



訳注 『宋書』 樂志二訳注稿(二)

佐藤, 大志 ; 佐竹, 保子 ; 釜谷, 武志 ; 柳川, 順子 ; 林, 香奈 ; 狩野, 雄

(Citation)

未名, 38:57-158

(Issue Date)

2020-03

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCDOI)

<https://doi.org/10.24546/81013104>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/81013104>



〈訳注〉

『宋書』樂志二訳注稿（二）

佐藤大志・佐竹保子・釜谷武志
柳川順子・林 香奈・狩野 雄

晉宣武舞歌四篇^① 傅玄造

晉宣武舞歌の四篇 傅玄の造る

惟聖皇篇 矛俞^②第一

惟聖皇 德巍巍^③ 光四海

惟れ聖皇 德巍巍として 四海を光^かかす

禮樂^④猶形影^⑤ 文武爲表裏^⑥

禮樂 猶お形影のごとく 文武 表裏を爲す

乃作巴俞^⑦ 肆舞士

乃ち巴俞を作し 舞士を肆^まぬ

劍弩齊列^⑧ 戈矛爲之始

劍弩 齊^{ひと}しく列び 戈矛 之が始めと爲す

進退疾鷹鷄^⑨ 龍戰而豹起^⑩

進退 鷹鷄より疾し 龍のごとく戦いて豹のごとく起こる

如亂不可亂 動作順其理

亂るるが如きも亂るべからず 動作 其の理に順い

離合有統紀^⑪

離合 統紀有り

晋の宣武舞の歌四篇

傅玄の作

惟聖皇篇 矛俞第一

聖なる皇帝、その徳は高く大きく、この世を輝かす。

礼儀と音楽とは形と影のごとく結びつき、文事と武事とは表と裏となつて一体となる。

そこで巴俞の舞をこしらえ、舞人をならべつらね、

劍と弩がそろつてならば、戈と矛が先陣となる。

その進退は鷹やハイタカのようにすばやく、龍が戦い豹が奮い起つようだ。

(その隊列は) 乱れそうで乱れることなく、動きはあるべきすじみちに沿い、

離れたり集まつたりするには、整つたきまりがある。

○押韻「海」は上声15「海」。「裏・士・始・起・理・紀」は上声6「止」

①宣武舞 魏の昭武舞を改作した晋の武舞。『宋書』樂志一に「晋書』樂志上に「及晋又改昭武舞曰宣武舞、羽籥舞曰宣文舞。咸

又改魏昭武舞曰宣武舞、羽籥舞曰宣文舞」とある。魏の昭武舞 寧元年、詔定祖宗之號、而廟樂乃停宣武・宣文二舞、而同用荀

は、魏文帝の黄初二年に漢の巴渝舞を改めて制作された舞。『宋書』樂志一に「文帝黄初二年、改漢巴渝舞曰昭武舞」とある。 勛所使郭夏・宋識等所造正徳・大豫二舞云」とあり、宣武・宣

文の二舞は、咸寧元年まで宗廟の樂として演奏されていた。

「宣武」は威武。或いは武威を宣揚する。「魏俞兒舞歌四篇・

安台神福歌」(『宋書』樂志二)に「昭文徳、宣武威。」また「晋書』樂志下に「又魏晉故事、有矛俞・弩俞及朱儒導引。今據尚書直云干羽、

禮文稱羽籥千戚。今文舞執羽籥、武舞執千戚、其矛俞・弩俞等、

蓋漢高祖自漢中歸、巴俞之兵、執仗而舞也。既非正典、悉罷不用」とある。また『宋書』樂志二に「魏俞兒舞歌四篇・矛俞新福歌」がある。

③魏魏 徳の高く大きなさま。『論語』泰伯に「子曰、巍巍乎舜禹之有天下也而不與焉（巍巍高大之稱）」とある。

④禮樂 禮儀と音楽。『礼記』樂記に「知樂則幾於禮矣。禮樂皆得、謂之有徳。徳者得也」、また「樂者爲同、禮者爲異。同則相親、異則相敬、樂勝則流、禮勝則離。合情飾貌者禮樂之事也。

禮義立、則貴賤等矣。樂文同、則上下和矣。……樂由中出、禮自外作。樂由中出故靜、禮自外作故文。大樂必易、大禮必簡。樂至則無怨、禮至則不爭。揖讓而治天下者、禮樂之謂也。」

⑤形影 身体とその影。「猶形影」は身体と影のように密接であることを言う。傅玄「昔思君」（『古詩紀』卷二二）に「昔君與我兮形影潛結、今君與我兮雲飛雨絶」とある。

⑥文武爲表裏 「文武」は文事と武事。「爲表裏」は表と裏一体の関係にあることを言う。『漢書』賈誼伝に引く「服鳥賦」に「夫禍之與福、何異糾纏」とあり、その応劭の注に「禍福相爲

表裏、如糾繩索相附會也。」

⑦巴俞 巴俞舞。漢の高祖の時に作られた武舞。巴は巴州、俞は渝州、現在の四川省に当たる地名。『後漢書』南蛮西南夷伝に「至高祖爲漢王、發夷人還伐三秦。……天性勁勇、初爲漢前鋒、

數陷陳。俗喜歌舞、高祖觀之、曰、『此武王伐紂之歌也。』乃命樂人習之、所謂巴渝舞也。遂世世服從。」

⑧劍弩齊列 「劍弩」は劍と弩。「魏俞兒舞歌四篇・弩俞新福歌」（『宋書』樂志二）に「材官選士、劍弩錯陳。」「齊列」はそつて並ぶ。何晏「景福殿賦」（『文選』卷十一）に「金楹齊列、玉鳥承跋。」

⑨戈矛 ほこ。枝のあるものを戈、枝のないものを矛という。『毛詩』秦風「無衣」に「豈曰無衣、與子同袍、王于興師、脩我戈矛、與子同仇（毛伝…戈長六尺六寸、矛長二丈。天下有道、則禮樂征伐自天子出）」とある。ここでは戈矛をもった舞人の舞が始まることを言う。

⑩鷹鷄 鷹やはいたかなどの猛禽類。宋玉「高唐賦」（『文選』卷十九）「虎豹豺兕、失氣恐喙。雕鸞鷹鷄、飛揚伏竄」また傅玄「馳射馬賦」（『太平御覽』卷八九七）に「來往若鷹鷄、超騰如

逸虎。」とある。

①龍戰而豹起 激しく戦闘するさまをかたどった舞のありさまを

言う。『易』坤の上六の卦辭に「龍戰于野、其血玄黃」、象伝に

「龍戰于野、其道窮也」とある。

②統紀 整った規則。『史記』太史公自序に「仲尼悼禮廢樂崩、

追脩經術、以達王道、匡亂世反之於正、見其文辭、爲天下制儀

法、垂六藝之統紀於後世。作孔子世家第十七」とある。

短兵篇 劍兪第二

劍爲短兵 其勢險危

疾踰飛電 回旋應規

武節齊聲 或合或離

電發星驚 若景若差

兵法攸象 軍容是儀

劍は短兵たるも 其の勢 險危なり

疾きこと飛電を踰え 回旋 規に應ず

武節 聲を齊しくし 或いは合し或いは離る

電のごとく發し 星のごとく驚せ 景の若く 差ふが若し

兵法の象る攸 軍容 是れ儀る

短兵篇 劍兪第二

劍は身近な敵を倒すための武器だが、その勢いはおそろしく危うい

すばやい動きは稲妻より上、くるくると回せばコンパスで描いたよう

声を揃えて戦意を表し、或る時は集まり或る時は離れる

いならずまのように閃き星のように流れゆく、影のように付きしたが背くかのように動く

それは兵法がかたちとなったものであり、軍隊のあり方のお手本ともなる

○押韻「危・規・離・差・儀」は上平5「支」。

①短兵 弓矢などに対して、刀や剣など、接近戦に用いる武器を指す。『史記』匈奴列伝に「其長兵則弓矢、短兵則刀劍。」

②飛電 いなびかり。傅玄「歴九秋篇 董逃行」(『玉台新詠』卷九)に「杯若飛電絶光、交觴接卮結裳、慷慨歡笑萬方。」

③武節 戦士の勇氣、軍隊の武威。張衡「東京賦」(『文選』卷三)に上林苑での狩獵開始を「文德既昭、武節是宣」と言う。

④齊聲 声をそろえる。兵士に扮する武人のかげ声が揃っていることをいうか。張衡「舞賦」(『芸文類聚』卷四二)に「然後整筓攬髮、被織垂縈。同服駢奏、合體齊聲。進退無差、若影追形」とある。

⑤電發星驚 閃く雷電や流れる星のように迅速に動くさま。張協「七命」(『文選』卷三五)に「氣盛怒發、星飛電駭」とあり、その李善注に引く李尤「七嘆」に「神奔電驅、星流矢驚、則莫若益野騰駒也」とある。

⑥若景若差 「若景」は影が身体を追うように動きが一致していることをいう。『尚書』大禹謨に「禹曰、惠迪吉、從逆凶、惟

影響(若影之隨形、響之應聲、言不虛)」とある。また『漢書』楚元王伝に「神明之應、應若景嚮、世所同聞也」とある。「若差」は互い違いとなる。「參差」に同じ。隊列を乱して馳せ行くさまを言うか。鮑照「舞鶴賦」(『文選』卷十四)に鶴の群れが乱舞する様子を「輕迹凌亂、浮影交橫。衆變繁姿、參差滉密」と言う。

この句は、舞人の隊列全体の動きを遠くから眺めたものか、或いは一人の舞人が自由自在に舞う姿に焦点化して描いたものか、二通りの解釈が可能。

⑦兵法攸象 軍容是儀儀 「儀」はきまり、手本。何晏「景福殿賦」(『文選』卷十一)に「圖象古昔、以當箴規。椒房之列、是準是儀」とある。

この二句は、兵法が象る形を表現したのがこの舞であり、その舞は軍隊の手本となるほど素晴らしいことを言う。或いは、末句は兵法に基づく軍隊には舞いの手本とすべき規則があることを言うとも考えられる。

軍鎮篇 弩兪第三

弩爲遠兵^② 軍之鎮 其發有機^③

體難動 往必速 重而不遲

銳精分罇^④ 射遠中微

弩兪之樂 壹何奇 變多姿^⑤

退若激^⑥ 進若飛

五聲協 八音諧^⑦

宣武象 讚天威^⑧

弩は遠兵たり 軍の鎮 其の發するや機有り

體は動き難きも 往けば必ず速く 重くして遅からず

銳精にして 罇を分かち 遠きを射て 微に中つ

弩兪の樂 壹に何ぞ奇なる 變じて姿多く

退くは激するが若く 進むは飛ぶが若し

五聲 協い 八音 諧^{かな}う

宣武の象 天の威を讚う

軍鎮篇 弩兪第三

弩は遠くの敵を倒すための武器であり、軍隊の要、矢を發するには引き金がある

本体は動かすのが大変だけれども、矢が放たれば確実に速く 重いけれども鈍くはない

その鋭利な矢は青銅の鐘をも割り、その射程は遠く微細的なにも見事に当てる

弩兪の音楽は なんとともすぐれていて、変化しては多様な姿を見せる

勢いよく一気に退きさがり、飛び出るように進み出る

五つの音が調和し、八つの楽器がハーモニーを奏でる

宣武の舞が象るのは、天の威徳を称えるもの

○押韻「機・微・飛・威」は上平8「微」、「遲・姿」は、上平6「脂」、「奇」は上平5「支」。

①弩俞 弩を主とした舞。巴俞舞の一。「晋宣武舞歌四篇・惟聖

皇篇・矛俞」の注②参照

②遠兵 短兵に対して、弓矢などの遠くの兵を攻撃する兵器。「長

兵」に同じ。なお、中華書局評点本は冒頭句を七字ひとつづき

とするが、ここでは前の「短兵篇」に合わせて「遠兵」の後に

句詠を施した。

③機 発射装置。『後漢書』陳球伝に「而州兵朱蓋等反、……乃

悉内吏人老弱、與共城守、弦大木為弓、羽矛為矢、引機發之、

遠射千餘步、多所殺傷」とある。

④銳精 磨かれた矢の鋭利なさま。『史記』淮陰侯列伝に「且天

下銳精持鋒欲爲陛下所爲者甚衆、顧力不能耳」とある。

⑤罇 鐘の一。『宋書』樂志一に「罇如鍾而大。史臣案、前代有

大鍾、若周之無射、非一、皆謂之鍾。罇之言、近代無聞焉」と

ある。

⑥多姿 姿が多様であるということ。嵇康「琴賦」(『文選』卷一

八)に「既豐贍以多姿、又善始而令終。嗟姣妙以弘麗、何變態

之無窮」とある。

⑦如激 水が堰を切つて一気に流れ出るようなさまを言う。潘岳

「射雉賦」(『文選』卷九)に「若夫多疑少決、膽劣心狷。内無

固守、出不交戰。來若處子、去如激電。」

⑧五聲協 八音諧 「五聲」は宮・商・角・徵・羽。「八音」は

八種の樂器。『漢書』律曆志上に「聲者、宮・商・角・徵・羽

也。所以作樂者、諧八音、蕩人之邪意、全其正性、移風易俗也。

八音、土曰埴、匏曰笙、皮曰鼓、竹曰管、絲曰絃、石曰磬、金

曰鐘、木曰柷。五聲和、八音諧、而樂成。」

⑨天威 天の威徳。『春秋』僖公九年の「左氏伝」に「孔曰、『以

伯舅耄老、加勞賜一級、無下拜。』對曰、『天威不遠顔咫尺(言

天聲察不遠、威嚴常在顔面之前)。小白余、敢貪天子之命、無

下拜、恐隕越于下、以遺天子羞敢不下拜。』とある。また武舞

がもと周武王が武力に拠つて天下を得たことを象つたものであ

ることは、『論語』八佾篇に「子謂韶盡美矣。又盡善也(孔曰、

韶舜樂名。謂以聖德受禪、故盡善) 謂武盡美矣。未盡善也(孔

曰、武武王樂也。以征伐取天下故未盡善。」とある。

窮武篇 安臺行亂第四

窮武者喪[㊦] 何但敗北 武を窮むる者は喪う 何ぞ但だ敗北するのみならんや

柔弱亡戰[㊦] 國家亦廢 柔弱は戦う亡く 國家も亦た廢せらる

秦始徐偃[㊦] 既已作戒前世 秦始 徐偃 既已に前世に戒めを作す

先王鑒其機[㊦] 修文整武藝 先王 其の機を鑒み 文を修め武藝を整う

文武足相濟[㊦] 然後得光大[㊦] 文武 相濟うに足れば 然る後に光大を得ん

窮武篇 安台行亂第四

武力を乱用する者は喪う、どうしてただ敗北するだけに止まろうか

柔和で弱き者は戦わなくても、國家もやはり滅ぼしてしまう

秦の始皇帝や徐偃王は、とうの昔にその戒めとなつてゐる

前代の賢明なる王はその機微を見分け、文事を興し武芸を整備された

文事と武事が補い助けることができれば、そこで大いに輝く盛大な徳を得ることができよう

○押韻 「北」は去声18 「隊」〔集韻〕、「廢」は去声19 「代」、「世・藝」は去声13 「祭」、「大」は去声14 「泰」。

亂曰

亂に曰わく

高則亢 滿則盈

高ければ則ち亢あがり 滿あつれば則ち盈あふる

亢必危 盈必傾

亢あがれば必ず危あうし 盈あれば必ず傾あく

去危傾 守以平

危傾を去り 守るに平を以てす

沖則久[◎] 濁能清[◎]

沖なれば則ち久しく 濁りても能く清なり

混文武 順天經[◎]

文武を混せて 天經に順う

乱に言う

高くなればおごりたかぶり、満ちてしまえばあふれてしまう

おごりたかぶればきつと危機が訪れ、あふればきつと傾いてしまう

危機や傾きを避けて、平衡な状態を保つ

空虚であれば長く久しく、濁ったとしても清らかにできる

文事と武事を混ぜ合わせ、天の常道に従う

○押韻 「盈・傾・清」は下平声14 「清」、「平」は下平声12 「庚」、「經」は下平声15 「青」

①安臺行亂 「行乱」は「行辞」の誤り。『晋書』樂志上に「故 舞四曲の中の歌曲。」

名曰巴渝舞。舞曲有矛渝本歌曲・安弩渝本歌曲・安臺本歌曲

②窮武者喪 「窮武」は武力を乱用する。『淮南子』兵略訓に「智

・行辭本歌曲、總四篇」とあり、安台と行辞はいずれも巴渝

伯有千里之地而亡者、窮武也。」また李尤「弩銘」(『芸文類聚』

卷六〇)に「忘戦者危、極武者傷」とあり、また荀悦『漢紀』

『藝文類聚』卷二二)に、「奢侈無限、窮兵極武。百姓空竭、

萬民罷弊」とある。「喪」はもと「鬻」に作る。「鬻」は祭祀

に用いる香酒。いま中華書局標点本の校勘に従い改めた。

③ 柔弱亡戰

「柔弱」は柔和にして弱いことを言う。『老子』七

六章に「人之生也柔弱、其死也堅強。萬物草木之生也柔脆、

其死也枯槁。故堅強者死之徒、柔弱者生之徒。是以兵強則不

勝、木強則兵。強大處下、柔弱處上」とあり、「柔弱」は「堅

強」よりも上であるというが、ここでは「柔弱」であつても

やはり国家を滅ぼしてしまうことを言う。

④ 秦始徐偃

「秦始」は秦の始皇帝。「徐偃」は徐偃王。周穆王

の時の徐の国王。楚の攻撃を受けたが、仁義を重んじて戦い

を避けたために敗北し、国は滅亡したとされる。また彼は筋

力は有るものの、骨がなかったとされる。『後漢書』東夷列伝

に「穆王畏其方熾、乃分東方諸侯、命徐偃王主之。偃王處潢

池東、地方五百里、行仁義、陸地而朝者三十有六國。穆王後

得驥馱之乘、乃使造父御以告楚、令伐徐、一日而至。於是楚

文王大舉兵而滅之。偃王仁而無權、不忍鬪其人、故致於敗」

とある。また『史記』秦本紀の集解に引く『尸子』に「徐偃

王有筋而無骨」とある。

⑤ 鑿其機

物事のきざしを見分ける。「機」はきざし。『晋書』皇

甫真載記に「辯還謂堅曰、燕朝無綱紀、實可圖之。鑿機讖變、

唯皇甫真耳」とある。

⑥ 足相濟

補い助けることができる。『三国志』魏書・明帝紀の

裴松之注に引く何曾の上奏文に「是以在險當難、則權足相濟、

隕缺不預、則才足相代、其爲固防、至深至遠。」

⑦ 光大

大いに輝き盛大なさま。『易』坤の彖伝に「含弘光大、

品物咸亨(疏・含弘光大、品物咸亨者、包含以厚、光著盛大、

故品類之物皆得亨通)。」とあり、「含弘光大」であれば万物全

てが滞りない状態となるという。

⑧ 沖則久

空虚であれば満ちることなく長くあり続けられること

を言う。『老子』四章に「道沖而用之、或不盈。淵兮似萬物之

宗。挫其銳、解其紛、和其光、同其塵、湛兮似或存。吾不知

誰之子、象帝之先」とあるのに基づく。

⑨ 濁能清

濁ったとしても静止して清らかにできることを言う。

『老子』十五章に「孰能濁以靜之徐清、孰能安以久動之徐生。

保此道者不欲盈。夫唯不盈、故能蔽不新成」とあるのに基づく。

⑩天經 天の常道。班固「典引」(『文選』卷四八)に「躬奉天經、惇睦辨章之化治(孝經曰、夫孝、天之經也)」とある。

(佐藤大志)

晉宣文舞歌二篇^① 傅玄^②造

羽籥舞歌

羲皇之初^④ 天地開元

罔罟禽獸^⑥ 羣黎以安^⑦

神農教耕^⑧ 創業誠難^⑨

民得粒食^⑩ 澹然無所患^⑪

黃帝始征伐^⑫ 萬品造其端^⑬

軍駕無常居 是曰軒轅

軒轅既勤止^⑭ 堯舜匪荒寧^⑮

夏禹治水^⑯ 湯武又用兵^⑰

孰能保安逸^⑱ 坐致太平

聖皇邁乾乾^⑲ 天下興頌聲^⑳

穆穆且明明^㉑

惟聖皇^㉒ 道化彰^㉓

晉の宣文の舞歌二篇 傅玄造る

羽籥舞の歌

羲皇の初め 天地 元めを開く

禽獸を罔罟^{あみか} 羣黎 以て安んず

神農は耕すを教え 創業 誠に難し

民は粒食するを得 澹然として患う所無し

黃帝は征伐を始め 萬品 其の端を造す^な

軍駕に常居無く 是れ軒轅と曰う

軒轅は既に勤めたり 堯舜は荒寧するに匪ず

夏禹は水を治め 湯武も又た兵を用う

孰か能く安逸を保ち 坐して太平を致さんや

聖皇は乾乾を邁^{すす}め 天下は頌聲を興す

穆穆として且つ明明たり

惟れ聖皇 道化 彰らかなり

激四海 清三光

四海を激すませ 三光を清らにす

萬機理[㊤] 庶事康

萬機は理まり 庶事は康らかなり

潜龍升[㊤] 儀鳳翔[㊤]

潜龍は升り 儀鳳は翔ける

風雨時[㊤] 物繁昌

風雨は時あり 物は繁昌す

却走馬[㊤] 降瑞祥

走馬を却け 瑞祥を降す

揚仄陋[㊤] 簡忠良[㊤]

仄陋を揚げ 忠良を簡えらぶ

百祿是荷[㊤] 眉壽無疆[㊤]

百祿是れ荷い 眉壽 疆かまり無し

晋の宣文の舞歌二篇 傅玄の作

羽籥の舞(雉の羽を持ち籥笛を吹く舞)の歌

伏羲皇帝の初めに、天地が開いた。

鳥獸を網で捕らえ、民衆はそれで安んじた。

神農氏が耕作を教え、創業はまことに難しかったが、

民は穀物を食べられるようになり、安らかに心配が無くなった。

黄帝が始めて(悪を)征伐し、すべてが始まりを成し、

いくさ車に落ち着く所が無かったので、(黄帝を)軒轅と言った。

軒轅は一生懸命だったし、堯と舜は怠けてくつろぐことがなく、

夏王朝の禹は洪水を治め、湯王と武王も武器を用いた。

いったい誰が安逸なままで、何もせずに太平を招きよせることができよう。

聖なる皇帝が一心につとめ励んだので、天下にほめうたが興った。

美しくかつ聡明であらせられる、と。

ああ聖なる皇帝は、道による教化が明らかだ。

東西南北の四海を澄ませ、日月星辰の三光を清くする。

すべての兆しが整い、あらゆる事が安泰だ。

潜んでいた竜が上昇し、容儀ある鳳凰が飛翔する。

風と雨は適時におこり、物は盛んに栄える。

走る馬を戻し、瑞祥を降させる。

卑賤な者を抜擢し、忠良な者を選び出す。

天からの多くの禄を担い、長きよわいは極まらない。

○押韻 「元・轅」は上平22「元」、「安・難」は上平25「寒」、「患」は去声30「諫」、「端」は上平26「桓」。「寧」は下平15「青」、「兵・

平・明」は下平12「庚」、「聲」は下平14「清」、「皇・光・康」は下平11「唐」、「彰・翔・昌・祥・良・疆」は下平10「陽」。「患」は、

于安瀾著・暴拯群校改『漢魏六朝韻譜』（河南人民出版社一九八九年。一九三六年序）一五〇頁〜一五四頁に、平声「寒桓刪」と通押

するとし、例として傅玄「羽籥舞歌」、張華「鷓鴣賦」、『文選』卷一三三、摯虞「黃帝贊」、『初學記』卷九）、潘岳「狹室賦」、『芸文類

聚』卷六四）、潘尼「乘輿箴」、『晋書』潘尼伝）、陸機「君子行」、『文選』卷二八）、同「百年歌」、『芸文類聚』卷四三三）、歐陽建「臨

終詩」、『文選』卷二三三）、庾闡「狹室賦」、『芸文類聚』卷六四）、伝陶潛「誦史述」九章之七「韓非贊」を挙げる。最後の二例は、周

祖謨「魏晉南北朝韻部之演變」(東大図書股份有限公司一九九六年)四七四頁にも「寒部平聲」として挙げられている。

①**晉宣文舞歌二篇** 前作「晉宣武舞歌」の対となっている。前作の注①を参照。

②**傅玄** 『晋書』卷四七傅玄伝に「傅玄字休奕、北地泥陽人也。

祖變、漢漢陽太守。父幹、魏扶風太守。玄少孤貧、博學善屬文、解鍾律。…尋卒於家、時年六十二。」

③**羽籥舞** 「羽」は、雉の羽。「籥」は、吹奏楽器。『周礼』春官

に「籥師、掌教國子舞羽獻籥(鄭玄注…文舞有持羽吹籥者、所謂籥舞也。文王世子曰、秋冬學羽籥。詩云、左手執籥、右手秉

翟)。祭祀、則鼓羽籥之舞(鼓之者、恒爲之節)。賓客饗食、則亦如之。大喪、厥其樂器、奉而藏之。」

④**義皇之初** 「義皇」は、伏羲。『文選』卷四八揚雄「劇秦美新」

に「厥有云者、上罔顯於義皇(李善注…罔、無也。顯、明也。伏羲爲三皇、故曰義皇)、中莫盛於唐虞、邇靡著於成周(左氏

傳、召公曰、糾合宗族于成周)。」

⑤**天地開元** 「開元」は、元(はじめ)を開く。『文選』卷四八

班固「典引」に「紹天闡繹(宗紹天地、開道人事)、莫不開元於太昊皇初之首。」

⑥**罔罟禽獸** 「罔罟」は、網をかける。『易』繫辭下伝に「古者、包犧氏之王天下也、…作結繩而爲罔罟、以佃以漁。」

⑦**羣黎以安** 「羣黎」は、群衆。『毛詩』小雅・天保に「神之弔

矣、詒爾多福(弔、至。詒、遺也。箋云…神至者、宗廟致敬、鬼神著矣。此之謂也)。民之質矣、日用飲食(質、成也。箋云

…成、平也。民事平、以礼飲食、相燕樂而已)。羣黎百姓、徧爲爾德(百姓、百官族姓也。箋云…黎、衆也。羣衆百姓、徧爲女之德。言則而象之)。」

⑧**神農教耕** 『易』繫辭下伝に「包犧氏没、神農氏作。斲木爲耜、

揉木爲耒、耒耨之利、以教天下(蓋取諸益、制器致豐、以益萬物)。」

⑨**創業誠難** 「創業」は、『文選』卷四八揚雄「劇秦美新」に「會

漢祖龍騰豐沛、奮迅宛葉。自武關與項羽戮力成陽、創業蜀漢、發迹三秦。」

⑩**民得粒食** 「粒食」は、五穀を食べる。『礼記』王制に「中國

戎夷、五方之民、皆有性也、不可推移。…西方曰戎、被髮衣皮、有不粒食者矣。北方曰狄、衣羽毛、穴居、有不粒食者矣(不粒

食、地氣寒、少五穀。」

⑪澹然無所患

「澹然」は、安らかなさま。『文選』卷九揚雄「長楊賦」に「夫天兵四臨、幽都先加（善曰、天兵、言兵威之盛如天也。尚書曰、宅朔方、曰幽都）；海內澹然（善曰、廣雅曰、澹、安也。徒濫切）、永亡邊城之災、金革之患。」

⑫黃帝始征伐

「黃帝」は、『易』繫辭下伝に「神農氏沒。黃帝・堯・舜氏、作通其變、使民不倦（通物之變、故樂其器用、不解倦也）。」また『史記』五帝本紀に「黃帝者、少典之子、姓公孫、名曰軒轅。…軒轅之時、神農氏世衰。諸侯相侵伐、暴虐百姓、而神農氏弗能征。於是軒轅乃習用干戈、以征不享。」

⑬萬品造其端

「造端」は、発端をなす。『礼記』中庸に「君子之道、造端乎夫婦。及其至也、察乎天地（夫婦、謂匹夫匹婦之所知所行）（『孔穎達疏』：君子之道造端乎夫婦者、言君子行道、初始造立、端緒起於匹夫匹婦之所知所行者）」

⑭軒轅既動止

「止」は助辭。『毛詩』召南・草蟲に「嘒嘒草蟲。趨趨阜螽。未見君子、憂心忡忡。亦既見止、亦既覯止、我心則降（止、辭也。覯、遇。降、下也）」

⑮堯舜匪荒寧

「荒寧」は、怠けてくつろぐ。『尚書』無逸に「周

公曰、嗚呼我聞、曰昔在殷王中宗、…治民祗懼、不敢荒寧（爲政、敬身畏懼、不敢荒怠自安）。肆中宗之享國、七十有五年（以敬畏之故、得壽考之福）」

⑯夏禹治水

『尚書』洪範に「箕子乃言曰、我聞、在昔鯀陞洪水、洎陳其五行。帝乃震怒、…鯀則殛死。禹乃嗣興。」

⑰湯武又用兵

「用兵」は、武器を用いる。『毛詩』邶風・擊鼓に「擊鼓其鐔、踴躍用兵（鐔然、擊鼓聲也。使衆皆踴躍用兵也。箋云…此用兵、謂治兵時）」

⑱孰能保安逸

「安逸」は、安らぐこと。『莊子』至樂に「夫天下之…所苦者、身不得安逸、口不得厚味…」

⑲聖皇邁乾乾

「乾乾」は、終日惕（つつし）み厲（おそ）れ身を尽くすさま。『易』乾に「九三。君子終日乾乾、夕惕若厲。无咎（處下體之極、居上體之下、在不中之位、履重剛之險。上不在天、未可以安其尊也。下不在田、未可以寧其居也。純脩下道、則居上之德廢。純脩上道、則處下之礼曠。故終日乾乾、至于夕惕、猶若厲也。居上不驕、在下不憂、因時而惕、不失其幾。雖危而勞、可以無咎。處下卦之極、愈於上九之亢。故竭知力、而後免於咎也。乾三以處下卦之上、故免亢龍之悔。坤三以處下

卦之上、故免龍戰之災。」

⑳天下興頌聲 「頌聲」は、徳治を称える歌。『春秋公羊伝』宣

公十五年に「初稅畝。…古者、什一而藉（什一）、以借民力、以

什與民、自取其一爲公田）…什一者、天下之中正也。什一行、

而頌聲作矣（頌聲者、大平歌頌之聲、帝王之高致也）。」

㉑穆穆且明明 「穆穆」は、美しいさま。『毛詩』大雅・文王に

「穆穆文王、於緝熙敬止。假哉天命、有商孫子（穆穆、美也。

緝熙、光明也。假、固也。箋云…穆穆乎文王、有天子之容、於

美乎、又能敬其光明之徳堅固哉。天爲此命之、使臣有股之子孫。）」

「明明」は、明察のさま。大雅・常武に「赫赫明明、王命卿士。

南仲大祖、大師皇父。整我六師、以脩我戎（赫赫然、盛也。明

明然、察也。王命南仲於大祖、皇甫爲大師。）」

㉒惟聖皇 「聖皇」は、『文選』卷一班固「東都賦」に「於是聖

皇乃握乾符、闡坤珍。披皇圖、稽帝文。」

㉓道化彰 「道化」は、道による教化、導き。『史記』卷一三〇

「太史公自序」に「是故禮以節人、樂以發和、書以道事、詩以

達意、易以道化、春秋以道義。撥亂世反之正、莫近於春秋。」

㉔萬機理 「萬機」は、すべての兆し。『尚書』皋陶謨に「無教

逸欲有邦（不爲逸豫貪欲之教、是有國者之常）。兢兢業業、一

日二日、萬幾（兢兢、戒慎。業業、危懼。幾、微也。言當戒懼

萬事之微。）」

㉕潛龍升 『易』乾に「初九、潛龍勿用。…九五、飛龍在天、利

見大人（不行不躍、而在乎天、非飛而何。故曰飛龍也。龍徳在

天、則大人之路亨也。夫位以德、興徳以位、敘以至徳、而處盛

位、萬物之覩、不亦宜乎。）」

㉖儀鳳翔 『尚書』益稷に「夔曰、…簫韶九成、鳳皇來儀（韶、

舜樂名。言簫見細器之備。雄曰鳳、雌曰凰。靈鳥也。儀有容儀、

備樂九奏、而致鳳皇、則餘鳥獸、不待九而率舞。）」

㉗風雨時 『尚書』洪範に「箕子乃言曰、我聞、…天乃錫禹、洪

範九疇、彝倫攸敘。…八、庶徵。…曰肅、時雨若（君行敬、則

時雨順之。曰乂、時暘若（君行政治、則時暘順之。曰哲、時

燠若（君能照哲、則時燠順之。曰謀、時寒若（君能謀、則時

寒順之。曰聖、時風若（君能通理、則時風順之。）」

㉘却走馬 走る馬を村内の畑に戻し、その排泄物を畑の肥料とす

る。「天下に道有り、足るを知り止まるを知る」ことの象徴。

逆は「戎馬生於郊」で、軍馬が郊外でお産をする。『老子』四

六章に「天下有道、卻走馬以糞（王弼注：天下有道、知足知止、無求於外、各修其内而已。故卻走馬、以治田糞也）。天下無道、戎馬生於郊（貪欲無厭、不修其内、各求於外。故戎馬生於郊也）。」

聽遠齊、通無滯礙、臣雖官有尊卑、無不忠良。」

王謙之は「張景陽七命注引王弼曰、天下有道、修於田而已、故卻走馬以糞田。」

③①百祿是荷 「百祿」は、『毛詩』小雅・天保に「天保定爾、俾爾戩穀。馨無不宜、受天百祿。（戩、福。穀、祿。馨、盡也。箋云…天使女所福祿之人、謂羣臣也。其舉事盡得其宜、受天之多祿。）」

②⑨揚仄陋 『尚書』堯典に「帝曰：明明、揚側陋（堯知子不肖、有禪位之志。故明舉明人在側陋者、廣求賢也）。」

③②眉壽無疆 「眉壽」は、眉の長い長寿の老人。『毛詩』豳風・七月に「十月穫稻。爲此春酒。以介眉壽（眉壽、豪眉也。箋云、介、助也。既以鬱下及棗、助男功。又穫稻而釀酒、以助其養老之具。是謂豳雅。）」

③③簡忠良 『尚書』冏命に「穆王命伯冏、爲周太僕正。…王若曰、伯冏、…昔在文武、聰明齊聖、小大之臣、咸懷忠良（聰明、視

之具。是謂豳雅。）」

① 羽鐸舞歌

昔在渾成時 兩儀尚未分

陽升垂清景 陰降興浮雲

昔在 渾成の時 兩儀 尚お未だ分たず

中和含氤氳 萬物各異羣

陽は升りて清景を垂れ 陰は降りて浮雲を興こす

人倫得其序 衆生樂聖君

中和は氤氳を含み 萬物は各おの羣れを異にす

三統繼五行 然後有質文

人倫は其の序を得 衆生は聖君を樂う

皇王殊運代 治亂亦續紛

三統 五行を繼ぎ 然後に質文有り

伊大晉 德兼往古

皇王は殊に運り代り 治亂も亦た續紛たり

伊れ大いなる晉 德は往古を兼ね

伊れ大いなる晉 德は往古を兼ね

伊大晉 德兼往古

伊れ大いなる晉 德は往古を兼ね

越犧農 邈舜禹

犧・農を越え 舜・禹を邈しのぐ

參天地 陵三五

天地に參じ 三五を陵ぐ

禮唐周 樂韶武

禮は唐周 樂は韶武

豈唯簫韶^① 六代具舉^②

豈に唯に簫韶のみならんや 六代具に舉ぐ

澤霑地境 化充天寓^③

澤は地境を霑し 化は天寓に充つ

聖明臨朝 元凱作輔^④

聖明 朝に臨み 元凱 輔と作る

普天同樂胥^⑤

普天 同に樂たのびしむ

浩浩元氣^⑥ 遐哉太清^⑦

浩浩たり元氣 遐かなるかな太清

五行流邁^⑧ 日月代征

五行は流れ邁き 日月は代こもりも征く

隨時變化 庶物乃成^⑨

時に隨いて變化し 庶物は乃ち成る

聖皇繼天^⑩ 光濟羣生^⑪

聖皇は天を繼ぎ 光あまねく羣生を濟う

化之以道 萬國咸寧

之れを化すに道を以てし 萬國は咸みなな寧んず

受茲介福^⑫ 延于億齡^⑬

茲おほの介おほいなる福を受け 億齡に延びん

羽鐸の舞（羽と樂器の鐸を持つ舞）の歌

むかし万物を渾然と成す道の時代に、天と地の両儀はなおまだ分かれていなかった。

陽が昇って清い光を垂れ、陰が降って浮雲を興した。

中和の気が陰陽の気を含み、すべての物がそれぞれ別に群れをなした。

人倫がその秩序を得、あまたの生き物は聖なる君主の登場を願った。

三つの正統なるものが五行を継ぎ、その後には質と文とがあらわれた。

大いなる王がさまざまに交替し、治世と乱世も入り乱れた。

ああ大いなる晋は、徳は往古のそれを兼ね、

伏羲氏と神農氏を越え、舜と禹をはるかに引き離す。

天と地に並び、三皇五帝をしのぎ、

礼（秩序）は唐堯と周朝、音楽は舜の「韶」と武王の「武」。

どうして舜の「籥韶」だけであろうか、黄帝以来の六代の音楽がすべて奏される。

恩沢は大地をうるおし、教化は天空にみちる。

聖なる明君が朝政に臨み、八元八愷の賢臣が補佐となる。

大いなる天のもとでもとにも喜び楽しむ。

広々とひろがる根元の気、はるかなる天の道。

五行が流れゆき、日月が交替して進む。

時に随って変化すれば、あらゆる物が成就する。

聖なる皇帝は天を継ぎ、万物をあまねく救う。

かれらを道で教化し、万国はすべて安寧。

この大いなる福を受け、よわいを億に延ばそう。

○押韻 「分・雲・羣・君・文・紛」は上平20「文」。「古・禹・武・高・輔」は上声9「麌」、「五」は上声10「姥」、「舉・胥」は上声8「語」。「清・征・成」は下平14「清」、「生」は下平12「庚」、「寧・齡」は下平15「青」。

①羽鐸舞歌 「鐸舞」は、『三国志』卷三十東夷伝に「韓在帶方之南。…常以五月下種訖、祭鬼神、羣聚歌舞、飲酒晝夜無休。其舞、數十人俱起相隨、踏地低昂、手足相應、節奏有似鐸舞。」

『宋書』樂志一に「晉又改魏昭武舞曰宣武舞、羽籥舞曰宣文舞」とあり（前々作「晉宣武舞歌四篇」の注①を参照）、「宣文舞」には前作の「羽籥舞」のみ記されるのに、ここでは「羽鐸舞」も「宣文舞」の一舞である。なぜ「羽鐸舞」が付加されたか、研究会では、①晋王朝が「文」の舞を拡充しようとした、②「羽籥舞歌」は政治面を歌い、「羽鐸舞歌」は音楽面を歌って、機能分化させた、との意見が出た。しかしそれでも、他の楽器の舞歌ではなく、なぜ「羽鐸」が選ばれたのかは依然謎として残る。なお『宋書』樂志四に「鐸舞歌行」が二首収録されているが、これは宗廟に奉納する雅楽ではなく、次元を異にする。

②昔在渾成時 「昔在」は、『尚書』冒頭に「昔在帝堯、聰明文思、光宅天下。」「渾成」は、混然として万物を成す「道」。『老子』二五章「有物混成、先天地生（王弼注…混然不可得而知、

而萬物由之以成、故曰混成也。不知其誰之子、故先天地生。…吾不知其名、字之曰道。」

③兩儀尚未分 「兩儀」は、天と地。『易』繫辭上伝に「是故、易有太極、是生兩儀（夫有必始於无、故太極生兩儀也。太極者、无稱之稱、不可得而名。取有之所極、況之太極者也。《正義曰、…故曰、太極生兩儀、即老子云一生二也。不言天地而言兩儀者、指其物體、下與四象相對、故曰兩儀》。」

④中和含氣氤 「中和」は、「元氣」の三名の一。『太平經』和三元氣帝王法に「元氣有三名、太陽、太陰、中和。形體有三名、天、地、人。『老子』四十二章に「道生一、一生二、二生三、三生万物。万物負陰而抱陽、沖氣以爲和。」「和」と「氣氤」は、『魏書』卷七上高祖孝文帝紀に「皇興元年八月戊申、生於平城紫宮、神光照於室內、天地氣氤、和氣充塞。」

⑤三統繼五行 「三統」は、天地人の正道。夏殷周三朝の正朔を指すという説もある。『尚書』甘誓に「王曰、…有扈氏威侮五行、怠棄三正（偽孔伝…五行之德、王者相承所取法。有扈、與

夏同姓、特親而不恭。是則威虐侮慢五行、怠惰棄廢天地人之道。言亂常○陸德明…：馬云、建子建丑建寅、三正也。』『漢書』卷三六楚元王伝に「劉」向上疏諫曰、…王者必通三統（應

劭曰「二王之後、與己爲三統也。」孟康曰「天地人之始也。」張

晏曰「一日天統、爲周十一月建子爲正、天始施之端也。二日地

統、謂殷以十二月建丑爲正、地始化之端也。三日人統、謂夏以

三月建寅爲正、人始成之端也。」師古曰「二家之說、皆不備

也。言王者象天地人之三統、故存三代也」、明天命所授者博、

非獨一姓也。」

⑥ 皇王殊運代 「皇王」は、大いなる王。『毛詩』大雅・文王有

声に「四方攸同、皇王維辟（毛伝…：皇、大也。箋云…：辟、

君也。）」『運代』は、めぐり代わる。『爾雅』釈詁下に「鴻昏於

顯間代也（郭璞注…：鴻鴈知運代。昏主代明、明亦代昏。顯、即

明也。間錯亦相代、於義未詳。《邢昺疏…：鴻鴈知運代》者、鴻

鴈之屬、九月而南、正月而北。是知其時運、而更代南北也。』

⑦ 治亂亦續紛 「續紛」は、乱れるさま。『楚辭』離騷に「時續

紛其變易兮（五臣注…：續紛、亂也）、又何可以淹留。」

⑧ 伊大晉 「伊」は助辞。『毛詩』周頌・我將に「儀式刑文王之

典、日靖四方。伊嘏文王。既右饗之（鄭玄箋…：我儀則式象、

法行文王之常道、以日施政于天下。維受福於文王。文王既右而

饗之。）」

⑨ 陵三五 「三五」は、三皇五帝。『楚辭』劉向「九嘆」思古に

「背三五之典刑兮、絶洪範之辟紀（王逸注…：言君施行、背三

皇五帝之常典、絶去洪範之法紀。）」

⑩ 樂韶武 「韶武」は、舜の樂の「韶」と武王の樂の「武」。『論

語』八佾に「子謂韶、盡美矣、又盡善也（孔曰、韶、舜樂名。

謂以聖德受禪、故盡善。謂武、盡美矣、未盡善也（孔曰、武、

武王樂也。以征伐取天下、故未盡善。）」

⑪ 豈唯簫韶 「簫韶」は、簫の樂器による「韶」。『尚書』益稷に

「夔曰：簫韶九成、鳳皇來儀（韶、舜樂名。言簫見細器之備。）」

⑫ 六代具舉 「六代」は、黄帝、堯、舜、禹、殷、周。『宋書』

卷十九樂志一に「易曰『先王作樂崇德、殷薦之上帝、以配祖考』、

自黄帝至于三代、名稱不同。…周存六代之樂、至秦唯餘韶・武

而已。』『晋書』卷二二樂志上に「周始二南、風兼六代。昔黄帝

作雲門、堯作咸池、舜作大韶、禹作大夏、殷作大濩、周作大武。

所謂因前王之禮、設俯仰之容、和順積中、英華發外。」

⑬**化充天寓** 「天寓」は、天空。『文選』卷六左思「魏都賦」に

「喪亂既弭而能宴、武人歸獸而去戰。…置酒文昌、高張宿設。…延廣樂、奏九成。…天宇駭、地慮驚。」

⑭**元凱作輔** 「元凱」は、高辛氏の才子の八元と高陽氏の才子の

八凱で、堯の賢臣たち。『春秋左氏伝』文公十八年に「季文子

使大史克對曰、…昔高陽氏有才子八人、…天下之民、謂之八愷

〔杜預注…愷、和也〕。高辛氏有才子八人、…天下之民、謂之

八元〔元、善也〕。…以至於堯。堯不能舉舜臣堯、舉八愷、使

主后土、以揆百事、莫不時序、地平天成。舉八元、使布五教于

四方、父義母慈兄友弟共子孝、内平外成。』『宋書』卷二二樂志

四の「晉聲舞歌五篇」の「大晉篇」にも「内舉元凱、朝政以綱。」

⑮**普天同樂膏** 「普天」は、大いなる天。「天が下すべて」の含

意を持つ。『春秋左氏伝』昭公七年に「無字辭曰、…故詩曰、

普天之下、莫非王土、率土之濱、莫非王臣〔杜預注…詩小雅。

濱、涯也〕○陸德明音義…普本或作溥、音同。』『毛詩』小雅・

北山に「溥天之下。莫非王土。率土之濱。莫非王臣〔溥、大。

率、循。濱、涯也。〕。」「樂膏」は、膏（とも）に樂しむ。『毛詩』

小雅・桑扈に「君子樂胥、萬邦之屏〔屏、蔽也。箋云…王者之

德、樂賢知在位、則能爲天下蔽捍四表患難矣。蔽捍之者、謂蠻

夷率服不侵畔〕。」「君子樂胥萬邦之屏」毛以爲、言君子王者、既

有禮文、又能樂與天下皆共之、能與天下皆樂、則爲萬邦之蔽捍、

天下皆得其樂、無復侵伐之憂、是爲之蔽捍矣。』

⑯**浩浩元氣** 「浩浩」は、大いなる天の形容。『毛詩』小雅・雨

無正に「浩浩昊天、不駿其德。降喪饑饉、斬伐四國〔駿、長也。

穀不熟曰饑、蔬不熟曰饉。箋云…此言王不能繼長昊天之德、至

使昊天此死喪饑饉之災、而天下諸侯於是更相侵伐。〕。」「元氣」

は、『漢書』律曆志上に「太極元氣、函三爲一〔孟康曰、元氣

始起於子、未分之時、天地人混合爲一、故子數獨一也。師古曰、

函讀與合同。後皆類此。極、中也。元、始也。〕。」

⑰**遐哉太清** 「太清」は、天道。『莊子』天運に「北門成問於黃

帝曰、帝張咸池之樂於洞庭之野、吾始聞之懼、…帝曰、汝殆

其然哉。吾奏之以人、徵之以天、行之以禮義、建之以大清〔成

玄英疏…太清、天道也。黃帝既允北門成第三聞樂、體悟玄道、

忘知息慮、是以許其所解、故云汝近於自然也。〕。」

⑱**五行流邁** 「流邁」は、ながれゆく。『文選』卷五二章昭「博

奕論」に「是以古之志士、悼年齒之流邁、而懼名稱之不建也。」

⑬庶物乃成 「庶物」は、あらゆるもの。『易』乾に「象曰、大

不和、地氣鬱結、六氣不調、四時不節。今我願合六氣之精以育

哉乾元、…首出庶物、萬國咸寧（萬國所以寧、各以有君也）。」

羣生、爲之奈何《成疏》我欲合六氣精華以養萬物、故問也。』

⑭聖皇繼天 「繼天」は、揚雄『法言』序に「聖人聰明淵懿、繼

⑮受茲介福 この大いなる福を受ける。『易』晋に「六二、晋如

天測靈、冠乎群倫、經諸範、謨五百。」

愁如貞吉、受茲介福于其王母（…故其初愁、如履貞不回、則乃

⑯光濟羣生 「光濟」は、ひろくすくうこと。『漢書』敘伝上に

受茲大福于其王母也。』

〔班彪〕既感（隗）囂言、又愍狂狡之不息、乃著王命論以救

⑰延于億齡 億齡に延ばす。『魏書』卷二三衛操伝に「桓帝崩後

時難。其辭曰、…舜亦以命禹、臯于稷契、咸佐唐虞、光濟四海、

（三〇五年）、操立碑於大邗城南、以頌功德、云、…長存不朽、

奕世載德。」「羣生」は、万物。『莊子』在有に「雲將曰、天氣

延於億齡。』

（佐竹保子）

晋宗廟歌十一篇 傅玄造 晋の宗廟歌十一篇 傅玄造る

我夕我牲 猗歟敬止 我が夕べ我が牲 猗歟敬止す

嘉參孔時 供茲享祀 嘉き參 孔だ時なり 茲の享祀に供う

神鑿厥誠 博碩斯歆 神は厥の誠を鑿て 博碩を斯れ歆く

祖考降饗 以虞孝孫之心 祖考降り饗し 以て孝孫の心を虞んぜん

右祠廟夕牲歌 右は祠廟夕牲の歌

晋の宗廟歌十一篇

傅玄の作

わが夕べにわがいけにえをそなえ、ああ、敬いつつしむ。

よきいけにえをよき時に、この祭りにお供えする。

神はわが誠をみそなわして、大いなるいけにえをお受けくださる。

祖先の神霊が降臨され祭りを受けて、子孫たるわが心を安らかにされんことを。

右は宗廟で夕べに犠牲を供える歌

○押韻 「止・祀」は上声6「止」。「歆・心」は下平21「侵」。

①晋宗廟歌 皇帝とその祖先を神として、みたまやで祭る際の歌。

傅玄が宗廟歌を作ったことについて、『晋書』樂志上に「及武

帝受命之初、百度草創。泰始二年、詔郊祀明堂禮樂權用魏儀、

遵周室肇稱殷禮之義、但改樂章而已、使傅玄爲之詞云。」また

『晋書』禮志上に「武帝泰始元年十二月丙寅、受禪。丁卯、追

尊皇祖宣王爲宣皇帝、伯考景王爲景皇帝、考文王爲文皇帝、宣

王妃張氏爲宣穆皇后、景王夫人羊氏爲景皇后。二年正月、有司

奏置七廟。帝重其役、詔宜權立一廟。於是羣臣議奏『上古清廟

一宮、尊遠神祇。逮至周室、制爲七廟、以辯宗祧。……』奏可。

於是追祭征西將軍・豫章府君・潁川府君・京兆府君、與宣皇帝

・景皇帝・文皇帝爲三昭三穆。是時宣皇未升、太祖虛位、所以

祠六世、與景帝爲七廟、其禮則據王肅說也。七月、又詔曰『主

者前奏、就魏舊廟、誠亦有準。然於祗奉神明、情猶未安、宜更

營造。』於是改創宗廟」とあり、泰始二年（二六六）に傅玄が

宗廟歌の歌詞を制作した。征西將軍以下文帝までの七人は、十

一篇の中で「登歌」としてうたわれている。

『南齊書』樂志に「晉泰始中、傅玄造廟夕牲昭夏歌一篇、迎

送神肆夏歌詩一篇、登歌七廟七篇。玄云『登歌歌盛德之功烈、

故廟異其文。至於饗神、猶周頌之有瞽及雍、但說祭饗神明禮樂

之盛、七廟饗神皆用之。』夏侯湛又造宗廟歌十三篇」とあり、「登

歌」は廟ごとに内容が異なるのに対して、「廟夕牲歌」や「廟

迎送神歌」はいずれの廟においても同様に神をもてなすために

用いられているという。また、「廟夕牲歌」は「廟夕牲昭夏歌」、「廟迎送神歌」は「迎送神肆夏歌」とされている。これは『周礼』春官・大司楽に、尸の出入りの際に九歌のうち「肆夏」を、犠牲の出入りの際に「昭夏」を奏していたとの記述に基づくものであろう。

②猗歎 感嘆の語。『毛詩』周頌・潛に「猗與漆沮、潛有多魚」、鄭箋に「猗與、歎美之言也。」

③敬止 敬仰する。「止」は句末の助字。『毛詩』大雅・文王に「穆穆文王、於緝熙敬止」、毛伝に「穆穆、美也。緝熙、光明也」、鄭箋に「穆穆乎、文王、有天子之容於美乎。又能敬其光明之徳。」

④嘉饗 祭祀用の犠牲。

⑤孔時 時宜を得ている。すばらしい祭祀を行なうのにふさわしい時。『毛詩』小雅・楚茨に宗廟での祭祀と宴を述べて「神嗜飲食、使君壽考。孔惠孔時、維其盡之。子子孫孫、勿替引之」、鄭箋に「惠、順也。甚順於禮、甚得其時、維君徳能盡之。」同・大雅・既醉に祭祀後の宴について「威儀孔時、君子有孝子。孝子不匱、永錫爾類」、鄭箋に「孔、甚也。言成王之臣威儀甚得其宜、皆君子之人、言孝子之行。」

⑥神鑒 神が主宰者武帝の誠を見る。「神鑒」を神の靈妙な洞察力と解釈することも可能であろう。その場合、訓みは「神鑒は厥れ誠にして」となる。『晋書』郭璞伝に「璞上疏曰、……若臣言可採、或所以爲塵露之益、若不足採、所以廣聽納之門。願陛下少留神鑒、賜察臣言。」

⑦厥誠 「誠」は天の道であるとともに人の道でもあり、それを聖人たる武帝が持っている。『礼記』中庸に「誠者、天之道也。

誠之者、人之道也。誠者不勉而中、不思而得、從容中道、聖人也。」あるいは「誠」は天の道で、それを神が神々しい考えとしてあらわし示すとも解し得る。

⑧博碩 まるまると肥った犠牲。『左伝』桓公六年に、隨の賢臣季梁が随侯をいさめて「夫民神之主也。是以聖王先成民、而後致力於神、故奉牲以告曰博碩肥臚、謂民力之普存也」、杜注に「博、廣也。碩、大也。」

⑨孝孫 祖先に対して孝心をもつ子孫。祭祀の主宰者の自称。『毛詩』小雅・楚茨に「祀事孔明、先祖是皇。神保是饗、孝孫有慶。報以介福、萬壽無疆。』『礼記』郊特性に、祖先の祭祀では孝孫と称し、禩の祭祀では孝子というのは、親疎の点で弁別するた

めであることを述べて「祭稱孝孫孝子、以其義稱也（謂事祖禰）。」

稱曾孫某、謂國家也（謂諸侯事五廟也。於曾祖以上、稱曾孫而

嗚呼悠哉 日鑒在茲^① 嗚呼 悠かなる哉 日に鑒て茲に在り

以時享祀 神明降之 時を以て享祀し 神明之に降る

神明斯降 既祐饗之 神明^ミに降り 既に祐けて之を饗す

祚我無疆 受天之祐 我に祚^{さいわ}いすること疆^{かぎ}り無く 天の祐を受く

赫赫^②太上 巍巍^③聖祖 赫赫たる太上 巍巍たる聖祖

明明^④烈考 丕承^⑤繼序 明明たる烈考 丕^{おほ}いに繼序を承く

右祠廟迎送神歌 右は祠廟に神を迎送する歌

ああ、はるかなことに、天はわれを日々ご覧になってここにおられる。

よき時に祭祀を行ない、神が降臨される。

神が降臨されて、われを助け祭祀をお受けになる。

われに限りない幸いを賜り、われは天の幸いを受ける。

かがやかしい太上、高くそびえる聖明なる祖先。

明らかな功績ある祖先は、大いにその父祖の徳を引き継がれた。

右は宗廟で神を迎え送る歌

○押韻 「茲・之」は上平7「之」。「祐・祖」は上声10「姥」、「序」は上声8「語」。

①日鑿在茲 日々この世界を監視している。『毛詩』周頌・敬之

に天が地上の王を絶えず見ていることを述べて「敬之敬之。天

維顯思。命不易哉。無曰高高在上、陟降厥士、日監在茲」、鄭

箋に「天上下其事、謂轉運日月施其所行、日日瞻視近在此也。」

②赫赫 かがやくさま。『毛詩』大雅・大明に、文王・武王の徳

が天上に輝いて下土を照らすことを「明明在下、赫赫在上。」

③太上 至高のもの。ここは祖先を含めていう。『史記』秦始皇

本紀に「追尊莊襄王爲太上皇」とあり、「太上」を「太上皇」

と同義に解した。

④巍巍 気高くそびえるさま。『論語』泰伯篇に「大哉、堯之爲

君也。巍巍乎、唯天爲大、唯堯則之。」

⑤聖祖 王朝の創始者。ここでは祖先をも含む。『漢書』王子侯

表に「大哉、聖祖之建業也。後嗣承序、以廣親親。」

傳玄「晋宗廟歌」の「祠京兆府君登歌」に「保乂命祐、基命

惟則。篤生聖祖、光濟四國」と見える。京兆府君は宣帝の父に

あたるので、「聖祖を生む」の聖祖は、初代の「帝」とされる

宣帝をさす。

⑥明明 明らかに輝くさま。注②「赫赫」の用例を参照。

⑦烈考 輝かしい功績のある亡き父。『毛詩』周頌・雝に「綏我

眉壽、介以繁祉。既右烈考、亦右文母。」

⑧丕承 大いなる徳や帝業を引き継ぐ。『尚書』太甲上に「天監

厥徳、用集大命、撫綏萬方。惟尹躬、克左右厥辟、宅師。肆嗣

王丕承基緒。」

⑨繼序 祖先の後を子、孫それぞれが継ぐこと。『毛詩』周頌・

閔予小子に、周の成王が小子たる自らが朝に夜につつしんで、

皇王たる文王・武王の徳を繼承せんとする意を述べて「維予小

子、夙夜敬止。於乎皇王、繼序思不忘」、鄭箋に「我繼其緒、

思其所行不忘也。」

經始宗廟 神明辰止 宗廟を經始し 神明辰たり止る

⑤假哉皇祖 「假哉」は良きかな。「皇祖」は祖先、あるいは祖

父。ここでは前者。『毛詩』周頌・離に「相維辟公、天子穆穆。

於薦廣牡、相予肆祀。假哉皇考、綏予孝子。宣哲維人、文武維

后。燕及皇天、克昌厥後。綏我眉壽、介以繁祉」、毛伝に「相、

助。廣、大也」「假、嘉也」「燕、安也」、鄭箋に「嘉哉、皇考、

斥文王也。文王之德乃安我孝子、謂受命定其基業也。又徧使天

下之人有才智、以文德武功爲之君故」「繁、多也。文王之德安

及皇天、謂降瑞應無變異也。又能昌大其子孫、安助之以考壽與

多福祿。」

⑥綏予孫子 祖先の徳が、われ、子孫を安んじる。福をたまわつ

て国家の基を安定させることをいう。『尚書』大誥に「綏予曰、

無愆于恤、不可不成乃寧考圖功。己、予惟小子、不敢替上帝命。」

『毛詩』周頌・離に「於薦廣牡、相予肆祀。假哉皇考、綏予孝

子。」前注⑤を参照。「予」字、底本を含め『宋書』の各本は「于

に作るが、『樂府詩集』卷八により改めた。

⑦燕及 安んじること。傳玄「饗天地五郊歌」に「燕及皇天、懷

柔百神」と既出。『毛詩』周頌・離に「燕及皇天、克昌厥後。」

前注⑤を参照。

⑧後昆 後嗣。『尚書』仲虺之誥に「王懋昭大徳、建中于民、以

義制事、以禮制心、垂裕後昆。」

⑨繁祉 多大の福。傳玄「天郊饗神歌」に「祐大晉、降繁祉」と

既出。『毛詩』周頌・離に「燕及皇天、克昌厥後。綏我眉壽、

介以繁祉。」前注⑤を参照。

⑩征西將軍 司馬鈞を指す。『晋書』宣帝紀に「宣皇帝諱懿、字

仲達、河内溫縣孝敬里人、姓司馬氏。其先出自帝高陽之子重黎、

爲夏官祝融。歷唐・虞・夏・商、世序其職。及周、以夏官爲司

馬。其後程伯休父、周宣王時、以世官克平徐方、錫以官族、因

而爲氏。楚漢間、司馬卬爲趙將、與諸侯伐秦。秦亡、立爲殷王、

都河内。漢以其地爲郡、子孫遂家焉。自卬八世、生征西將軍鈞、

字叔平。鈞生豫章太守暠、字公度。暠生潁川太守儁、字元異。

儁生京兆尹防、字建公。帝即防之第二子也。」

大まかな系譜を示すと次のとおり。「司馬卬……(七代)

——司馬鈞(叔平。征西將軍)——司馬暠(公度。豫章太守)

——司馬儁(元異。潁川太守)——司馬防(建公。京兆尹)

——司馬懿(仲達。宣帝)——司馬師(子元。景帝)・司馬昭

(子上。文帝。景帝の弟)——司馬炎(安世。武帝)」

また『宋書』礼志三にも「晉」武帝泰始元年十二月丙寅、

一廟。……於是追祭征西將軍・豫章府君・潁川府君・京兆府君、

受禪。丁卯、追尊皇祖宣王爲宣皇帝、伯考景王爲景皇帝、考文

與宣皇帝・景皇帝・文皇帝爲三昭三穆。是時宣皇未升、太祖虛

王爲文皇帝、宣王妃張氏爲宣穆皇后、景王夫人羊氏爲景皇后。

位、所以祠六世與景帝爲七廟、其禮則據王肅說也」とあり、二

二年正月、有司奏天子七廟、宜如禮營建。帝重其役、詔宜權立

六六年に征西將軍等として追祭されている。

嘉樂肆庭^① 薦祀在堂^④

嘉樂庭に肆ね^④ 薦祀堂に在り

皇皇宗廟^⑤ 乃祖先皇^⑥

皇皇たる宗廟^⑥ 乃が祖先皇

濟濟辟公^⑦ 相予烝嘗^⑧

濟濟たる辟公^⑧ 予が烝嘗を相く^⑧

享祀不忒^⑨ 降福穰穰^⑩

享祀忒わざれば^⑩ 福を降すこと穰穰たり

右祠豫章府君登歌^⑪

右豫章府君を祠る登歌

よき音楽が宮廷にならび、広間では祭祀が神に献げられる。

すばらしき宗廟で、祖父や父の神がりっぱにまつられる。

盛大なる家臣が、わが烝と嘗の祭りを手助けしてくれる。

祭祀を怠りなく執り行なえば、神はあまたのさいわいを降してくれる。

右は豫章府君をまつる登歌。

○押韻 「堂・皇」は下平11「唐」、「嘗・穰」は下平10「陽」。

①嘉樂 金石の樂器。『左伝』定公十年に「齊、魯之故、吾子何不聞焉。事既成矣、而又享之、是勤執事也。且犧・象不出門、嘉樂不野合（嘉樂、鍾磬也）。」ただ、『左伝』文公三年や『礼記』中庸に見える「嘉樂」は、『毛詩』大雅・假樂（嘉樂）に通じる）を指していて、ここではその「樂しみ」の意には解しなかつた。

②肆庭 朝廷に並べられる。袁宏「三国名臣序贊」に陳群について「長文通雅、義格終始。思戴元首、擬伊同恥。民未知德、懼若在己。嘉謀肆庭、讜言盈耳。」

③薦祀 祭祀をすすめ行なう。『宋書』礼志三に「求之古禮、喪服未終、固無祿享之義。自漢文以來、一從權制、宗廟朝聘、莫不皆吉。雖祥禫空存、無綬縞之變、烝嘗薦祀、不異平日。」

④在堂 御殿において。『宋書』樂志一に「遭離喪亂、舊典不存、然此諸樂、皆和之以鍾律、文之以五聲、詠之於哥詞、陳之於舞列、宮縣在下、琴瑟在堂、八音迭奏、雅樂並作、登哥下管、各有常詠、周人之舊也。」また同・樂志二の荀勗「晋四箱樂歌十七篇」「隆化」に「旅揖在庭、嘉客在堂。」

⑤皇皇 盛大ですばらしいさま。『毛詩』魯頌・泂水に「濟濟多

士、克廣德心。桓桓于征、狄彼東南。烝烝皇皇、不與不揚。不告于讒、在泂獻功」、毛伝に「皇皇、美也。揚、傷也。」

⑥乃祖先皇 おまえの祖父や亡き父。ここは、わが祖先の意。『尚書』盤庚中に「我、先后、綏乃祖乃父。乃祖乃父、乃斷棄汝、不救乃死。茲予有亂政同位、具乃貝玉。乃祖先父、丕乃告我高后曰、作丕刑于朕孫、迪高后丕乃崇降弗祥。」傳玄「金靈運」(『宋書』樂志四)に「靈運、言聖皇踐阼、致敬宗廟、而孝道施於天下也。……神祇應、嘉瑞章。恭享祀、薦先皇。樂時奏、馨管鏘。鼓淵淵、鍾嗶嗶。」

⑦濟濟 多くの家臣の盛んなさま。注⑤の用例を参照。

⑧辟公 諸侯。諸侯が王の祭祀を助けることをうたった『毛詩』周頌・烈文に「烈文辟公、錫茲祉福。惠我無疆、子孫保之」、毛伝に「烈、光也。文王錫之」、鄭箋に「惠、愛也。光文百辟卿士及天下諸侯者、天錫之以此祉福也。」

⑨相予 われを助ける。『毛詩』周頌・離に「相維辟公、天子穆穆。於薦廣牡、相予肆祀」、毛伝に「相、助。」

⑩烝嘗 冬と秋の祭祀。『毛詩』小雅・楚茨に「濟濟跄跄、絜爾牛羊、以往烝嘗、或剝或亨、或肆或將、祝祭于祊」、鄭箋に「冬

祭曰烝、秋祭曰嘗。」

⑪享祀不忒 手はずを整えてまつりを行なう。『毛詩』魯頌・閟

宮に「周公之孫、莊公之子。龍旂承祀、六轡耳耳。春秋匪解、

享祀不忒。皇皇后帝、皇祖后稷、享以騂犧」とそのまま見える。

彼成康、奄有四方。斤斤其明。鐘鼓喤喤、磬筦將將、降福穰穰。降福簡簡、威儀反反」、毛伝に「穰穰、衆也」、鄭箋に「神與之福又衆大。」

⑫降福穰穰 降される福の多いさま。『毛詩』周頌・執競にその

⑬豫章府君 司馬量を指す。征西將軍司馬鈞の子で、豫章太守を

まま見える。「執競武王、無競維烈。不顯成康、上帝是皇。自

於邈^①先后 實司于天

於邈^{あゝ}たる先后 實に天に司^{つかさど}らる

顯矣皇祖^③ 帝社肇^④臻

顯なるかな 皇祖 帝社 肇めて臻^{いた}る

本支克昌^⑥ 資始開元^⑦

本支 克^よく昌^{さか}んにして 資^とりて始めて元を開く

惠我無疆^⑧ 享祚永年^⑨

我を惠すること疆り無し 祚を享くること永年ならん

右祠潁川府君登歌

右 潁川府君を祠る登歌。

ああ、はるかなる先君は、まことに天においてつとめをはたしている。

祖先はあきらかで大いなる存在で、天帝からの幸いを初めてここに降された。

本家分家の別なく繁榮し、幸いに因って国を開く。

われに限りなきめぐみをたまわり、永えに幸いが続きますように。

右は潁川府君をまつる登歌。

○押韻 「天・年」は下平1 「先」、「臻」は上平19 「臻」、「元」は上平22 「元」。

① 先后 先の世の君王。潁川府君以前の祖先をいうか。『尚書』 哉、載、侯、維也。本、本宗也。支、支子也。」

盤庚中に「古我先后、既勞乃祖乃父。汝共作我畜民。汝有狀、則在乃心。我先后、綏乃祖乃父。乃祖乃父、乃斷棄汝、不救乃死（言我先王安汝父祖之忠、今汝不忠、汝父祖必斷絕棄汝命、不救汝死）。」

② 司于天 天にあつてしかるべき位置を与えられている。

③ 皇祖 偉大な祖先。潁川府君を指す。「祠征西將軍登歌」に「假哉皇祖、綏予孫子」と既出。

④ 帝社 天帝が降すさいわい。『毛詩』大雅・皇矣に「王此大邦、克順克比。比于文王、其德靡悔。既受帝社、施于孫子」、毛伝に「慈和徧服曰順、擇善而從曰比」『經緯天地曰文』、鄭箋に「靡、无也。王季之德、比于文王」「无有所悔也。必比于文王者、德以聖人爲匹」「帝、天也。社、福也。施猶易也。延也。」

⑤ 本支 樹木の幹と枝。本家と分家にたとえる。『毛詩』大雅・文王に「臺臺文王、令聞不已。陳錫哉周、侯文王孫子。文王孫子、本支百世。凡周之士、不顯亦世」、毛伝に「臺臺、勉也。」

⑥ 克昌 子孫を盛んにすることができる。『毛詩』周頌・離に「假

哉皇考、綏予孝子。宣哲維人、文武維后。燕及皇天、克昌厥後。綏我眉壽、介以繁祉」、鄭箋に「又能昌大其子孫安助之、以考壽與多福祿。」

⑦ 資始 それによつて生まれる。『周易』乾に「彖曰、大哉乾元、萬物資始、乃統天（夫形也者、物之累也。有天之形而能永保无虧爲物之首）。」

⑧ 開元 新たな紀元を始める。開国する。『漢書』李尋伝に「惟漢興至今二百載、曆紀開元、皇天降非材之右、漢國再獲受命之符、朕之不德、曷敢不通夫受天之元命、必與天下自新。」

⑨ 惠我 われをいつくしむ。『毛詩』周頌・烈文に「烈文辟公、錫茲祉福。惠我無疆、子孫保之」、鄭箋に「惠、愛也。光文百辟卿士及天下諸侯者、天錫之以此祉福也。又長愛之、無有期竟。」

⑩ 享祚 さいわいを受ける。『三国志』吳書・孫奮伝に「向使魯王早納忠直之言、懷驚懼之慮、享祚無窮、豈有滅亡之禍哉。」「祚」

宇、底本は「祀」に作るが、『晋書』樂志上により改めた。

① 潁川府君 司馬備を指す。司馬量の子で、潁川太守をつとめた。

於^①惟^②曾^③皇^④ 顯^⑤顯^⑥令^⑦德^⑧

於^あ惟^れ曾^皇、顯^顯たる令^德あり。

高^④明^⑤清^⑥亮^⑦ 匪^⑧競^⑨柔^⑩克^⑪

高^明清^亮、競^しいるに匪^ず柔^克なり。

保^⑦又^⑧命^⑨祐^⑩ 基^⑪命^⑫惟^⑬則^⑭

保^んじ又^ま命^祐を命^ぜられ、基^命惟^れ則^る。

篤^⑬生^⑭聖^⑮祖^⑯ 光^⑰濟^⑱四^⑲國^⑳

篤^く生^{まれ}し聖^祖は、光^あねく四^國を濟^すく。

右^⑳祠^㉑京^㉒兆^㉓府^㉔君^㉕登^㉖歌^㉗

右^京兆^府君^を祠^る登^歌。

ああ、偉大なる曾祖父は、かがやかしい徳をそなえていた。

高明で、さすがにしくあきらか。無理強いすることなくしなやかに治められた。

民を安らかにして天よりさいわいを降され、天命にもとづいて建国された。

天の思し召しを受けて生まれた聖なる祖先は、あまねく天下を救われた。

右は京兆府君をまつる登歌。

○押韻 「徳・克・則・國」は入声²⁵「徳」。

① 於^①惟^② ああ、これ。『漢書』叙伝下・述匈奴伝に「於^①惟^②帝^③典^④、

戎^⑤夷^⑥猶^⑦夏^⑧。周^⑨宣^⑩攘^⑪之^⑫、亦^⑬列^⑭風^⑮雅^⑯（師^⑰古^⑱曰^⑲、於^⑳、歎^㉑辭^㉒也。……於

あたる。

② 曾^②皇^③ 曾祖父である王。京兆府君の司馬防は、武帝の曾祖父に

讀^⑳曰^㉑鳥^㉒。）

③ 顯^③顯^④令^⑤德^⑥ 「令^⑤德^⑥」は徳が明らかにかがやくさま。『毛詩』大

雅・假楽にそのまま見える。「假楽君子、顯顯令德。宜民宜人、受祿于天。保右命之、自天申之。千祿百福、子孫千億」、鄭箋に「顯、光也。天嘉樂成王有光光之善德、安民官人、皆得其宜、以受福祿於天。」

④高明 天のごとく気高く明らか。『尚書』洪範に「六、三徳。

一曰正直（能正人之曲直）。二曰剛克（剛能立事）。三曰柔克（和柔能治。三者皆徳）。平康正直、彊弗友剛克、變友柔克（變、和也。世和順、以柔能治之）。沈潛剛克、高明柔克（高明謂天、言天爲剛徳、亦有柔克、不干四時、喻臣當執剛以正君、君亦當執柔以納臣）。」

⑤匪競 強いることはない。『毛詩』大雅・桑柔に「君子實維、秉心無競」、毛伝に「競、彊」。ただし鄭箋は「競」を勉める意に解している。

⑥柔克 柔軟な力。おだやかに政治を成し遂げられる。注④の『尚書』洪範の用例を参照。

⑦保乂 安定させて治める。『尚書』君奭に「率惟茲有陳、保乂有殷。故殷禮陟配天、多歷年所。」

⑧命祐 天から福をたまわる。『論衡』宣漢に「今瑞未必同於古、古應未必合於今、遭以所得、未必相襲。何以明之。以帝王興起、命祐不同也。」

⑨基命 はじめて命じる。即位するようにとの天命が降ることをいう。『尚書』洛誥に「周公拜手稽首曰、朕復子明辟。王如弗敢及天基命定命、予乃胤保、大相東土、其基作民明辟。」

⑩惟則 のつとり従う。傳玄「晋正徳大豫二舞歌二篇」に「天命有晉、光濟萬國。穆穆聖皇、文武惟則。」

⑪篤生 天の厚い保護を得て生まれる。『毛詩』大雅・大明に「續女維莘、長子維行。篤生武王、保右命爾、變伐大商。」

⑫聖祖 聖なる祖父。ここは曾祖父をいう。

⑬光濟 あまねく救う。班彪「王命論」に「舜亦以命禹。暨于稷契、成佐唐虞、光濟四海、奕世載徳、至于湯武、而有天下。」

⑭四國 四方の国々、ひいては天下。『毛詩』大雅・崧高に「申伯之徳、柔惠且直。揉此萬邦、聞於四國。」

⑮京兆府君 司馬防を指す。司馬懿の父で、京兆尹をつとめた。『晋書』宣帝紀に「京兆尹防、字建公。帝即防之第二子也。」

於鑠^①皇祖^② 聖德^③欽明^④

勤施^⑤四方^⑥ 夙夜^⑦敬止^⑧

載敷^⑨文教^⑩ 載揚^⑪武烈^⑫

匡定^⑬社稷^⑭ 龔行^⑮天罰^⑯

經始^⑰大業^⑱ 造創^⑲帝基^⑳

畏天之命^㉑ 于時保之^㉒

右祠宣皇帝登歌

於鑠^{あしやく}たる皇祖 聖德欽明なり

勤めて四方に施し 夙夜敬止す

載^{すな}ち文教を敷き 載ち武烈を揚ぐ

社稷を匡定し 龔^{つごし}んで天罰を行なう

大業を経始し 帝基を造創す

天の命を畏れ 時に^{こゝ}于て^{おい}之を保つ

右宣皇帝を祠る登歌

ああ、うるわしく偉大なるわが祖父は、清き徳もてつつましやかで物事を洞察された。

天下に政治がゆきわたるようにつとめ、日夜うやまいつつしむ。

ひろく教化をしきひろげ、かがやかしいさおしを高く上げ示す。

魏朝を助けて国家を治め、つつしんで天の代わりに征伐された。

帝業を創始し、王業の基礎を築かれた。

天命をおそれつつしみ、天の御加護が続くように努めよう。

右は宣皇帝をまつる登歌。

○押韻 「明」は下平12 「庚」、「止」は上声6 「止」。「明」と「止」は押韻せず。どちらかが別字の可能性もあり。中華書局の新・旧

点校本の校勘記は「勤施四方」と「夙夜敬止」が入れ替わり、「明」「方」が押韻していたとの説を引用する。「烈」は入声17 「薛」、「罰」

は入声10「月」。「基・之」は上平7「之」。

①於鑠 「鑠」は光りかがやく。『毛詩』周頌・酌に「於鑠王師、
遵養時晦。」

②皇祖 祖先、あるいは祖父。ここでは後者。傅玄「祠征西將軍
登歌」に「假哉皇祖、綏予孫子」と既出。

③聖德 至高の道徳。帝徳を指す。『史記』五帝本紀に「昌意娶
蜀山氏女、曰昌僕、生高陽、高陽有聖惠焉。」

④欽明 つつしみ深く、ものごとを明らかに見抜く。『尚書』堯
典に「曰、若稽古帝堯。曰、放勳、欽明文思、安安。允恭克讓、
光被四表、格于上下。」

⑤勤施四方 四方の隅々まで治めるようにつとめる。『尚書』洛
誥に「公稱丕顯徳、以予小子、揚文武烈、奉答天命、……惟公
徳明、光于上下。勤施于四方」、孔安国の伝に「言公明德光於
天地、勤政施於四海萬方、四夷服仰公德而化之。」

⑥夙夜 朝も夜も怠ることなく。『尚書』旅獒に「所寶惟賢、則
邇人安。嗚呼、夙夜罔或不勤。不矜細行、終累大徳。」

⑦敬止 敬仰する。「止」は句末の助字。『毛詩』大雅・文王に「穆
穆文王、於緝熙敬止。」傅玄「祠廟夕牲歌」に「我夕我牲、猗

歟敬止」と既出。

⑧載敷文教 「文教」は教化による文治。「載」は「載」の句型は

『毛詩』周頌・時邁に「載戢干戈、載櫜弓矢」、鄭箋に「載之
言、則也。王巡守而天下咸服兵不復用此、又著震疊之效也。」

⑨載揚武烈 「揚」は発揚する。「武烈」は武功、武勲。司馬懿
が呉の征討に従事したことなどを指すか。注⑤の用例を参照。

⑩匡定 助け安定させる。『晋書』王戎伝に載せる、齊王罔に対
して王戎の言ったことばに「公首舉義衆、匡定大業、開關以來、
未始有也。」

⑪社稷 土地神と穀物神、ひいては国家をいう。『尚書』太甲上
に「先王顧諟天之明命、以承上下神祇、社稷宗廟、罔不祇肅。」
『礼記』檀弓下にも見える。

朱乾『樂府正義』二は「武烈」が、孟達を平らげ、公孫淵を
斬ったことを謂い、「天罰」は曹爽・王凌・曹彪を殺したこと、
「匡定社稷」は王朝の命を受けて補政したことを指すとする。

⑫龔行天罰 天命によって罰を行なう。討伐をいう。『尚書』甘
誓に「有扈氏威侮五行、怠棄三正。天用勦絶其命。今予惟恭行

天之罰。』『漢書』叙伝下に「股肱蕭・曹、社稷是經、爪牙信・

布、腹心良・平、翼行天罰、赫赫明明。述高紀第一。」

⑬經始 傳玄「祠征西將軍登歌」に「經始宗廟、神明戻止」と既出。

⑭大業 帝業。天子が国を統治する大事業。『尚書』盤庚上に「紹復先王之業、底綏四方。」

⑮造創 創造する。『晋書』劉頌伝に載せる劉頌の上疏に「夫造創謀始、逆闇是非、以別能否、甚難察也。」

⑯帝基 帝王としての大業の基礎。『三国志』呉書・魯肅伝に「承運代劉氏者、必興于東南、推步事勢、當其曆數、終構帝基、以

協天符、是烈士攀龍附鳳馳驚之秋。」

⑰畏天之命 于時保之 天命を畏れかしこまり、天の助けを得ら

れるようにつとめる。『晋書』宣帝紀に載せる呉の孫権が曹操に言ったことばに「權之稱臣、天人之意也。虞・夏・殷・周不

以謙讓者、畏天知命也。」文王を明堂にまつることをうたった『毛詩』周頌・我將に「伊嘏文王、既右饗之。我其夙夜、畏天

之威、于時保之」、鄭箋に「于、於。時、是也。早夜敬天、於是得安文王之道。」

⑱宣皇帝 宣帝、司馬懿を指す。

執競景皇^① 克明^③克哲 競を執る景皇は 克く明にして克く哲なり

旁作穆穆^④ 惟祗^⑤惟畏 旁あまねく穆穆を作し 惟れ祗つしみ惟れ畏る

纂宣之緒^⑥ 耆定厥功^⑦ 宣の緒を纂つぎ 厥の功を定むるを耆いたす

登此儁⑧又 糾彼羣凶 此の儁しゅんが又を登のぼせ 彼の羣凶を糾す

業業在位^⑨ 帝既勤止 業業として位に在り 帝既に勤む

維天之命 於穆不已^⑩ 維れ天之命 於穆として已まず

右祠景皇帝登歌

右景皇帝を祠る登歌

武を執り行なった景帝は、英明にして賢哲。

四方から人々が恭しく集まってきて、つつしみおそれてかしくまる。

景帝は宣帝の皇緒を継いで、みずからの功業を成し遂げられた。

徳のすぐれた才ある者を官僚に登用し、悪人どもを調べ正された。

帝位にあつてつつしみ、民を治めることにとめられた。

これは天命が帝を、絶えることなくあつく見まもつてくださるゆえ。

右は景皇帝をまつる登歌。

○押韻 「哲」は入声17「薛」、「畏」は去声8「未」、この押韻については未詳。「功」は上平1「東」、「凶」は上平3「鍾」。「止・已」は上声6「止」。

①執競 強き武の道を執り行なう。『毛詩』周頌・執競に「執競

武王、無競維烈」、鄭箋に「競、彊也。能持彊道者、維有武王

耳。不彊乎、其克商之功業、言其彊也。」

②景皇 景皇帝を指す。景帝は司馬師、司馬懿の長子。武帝司馬

炎の即位後、景帝を追尊される。

③克明 徳が広がりがやく。『毛詩』大雅・皇矣に「維此王季、

帝度其心。貊其德音、其徳克明。克明克類、克長克君。」「克」

は充分に〜である。また「克々克々」の句型は『詩経』によく見られる。

④勞作穆穆 四方から到来して、うやうやしく敬う。『尚書』洛

誥に「惟公德明、光于上下。勤施于四方。勞作穆穆、迓衡、不

迷文武勤教。予沖子夙夜毖祀」とそのまま見える。

⑤惟祗惟畏 『尚書』金縢に「四方之民、罔不祗畏。」

⑥纂宣之緒 宣帝の始めた皇統を引き継ぐ。『漢書』叙伝下に「皇

矣漢祖、纂堯之緒、實天生德、聰明神武。」

俊又在官。百僚師師、百工惟時。」

⑦ 耆定厥功 天下を平定するという景帝自身の功績を成し遂げる。司馬師は四十八歳で死去しているので、次に引く鄭箋のよ

⑨ 業業 おそれつつしむさま。『尚書』阜陶謨に「百僚師師、百

うに「耆」を「老」の意には訓まず、毛伝の「致」で解釈した。

工惟時。撫于五辰、庶績其凝。無教逸欲、有邦。兢兢業業。一

『毛詩』周頌・武に「於皇武王、無競維烈。允文文王、克

日二日萬幾。無曠庶官。」

開厥後。嗣武受之、勝殷遏劉、耆定爾功」、毛伝に「武、迹。

⑩ 帝既勤止 皇帝は天下を安定させることにとめる。「止」は

劉、殺。耆、致也」、鄭箋に「遏、止。耆、老也。」

⑪ 維天之命 於穆不已 天が守り助けてくれる命は、まことに深

⑧ 儻又 徳をそなえて統治の能力をもつ者。「儻」は「俊」に通

遠でやむことがない。『毛詩』周頌・維天之命に「維天之命、

じる。「又」は賢人。『尚書』阜陶謨に「翁受敷施、九德咸事、

於穆不已。於乎不顯、文王之徳之純」とそのまま見える。

於皇時晉 允文文皇

於皇なる時の晉 允に文なる文皇

聰明叡智 聖敬神武

聰明叡智 聖敬神武たり

萬機莫綜 皇斯清之

萬機 綜ぶる莫く 皇斯れ之を清くす

虎兕放命 皇斯平之

虎兕 放命し 皇斯れ之を平らぐ

柔遠能邇 簡授英賢

遠きを柔んじ邇きを能くし 英賢に簡授す

創業垂統 勳格皇天

業を創めて統を垂れ 勳は皇天に格る

右 祠文皇帝登歌

右 文皇帝を祠る登歌

ああ、大いなるこの晋国、まことに文徳をそなえておられる文帝。

聡明にして叡智をそなえ、すぐれた智でつつしみ、神々しき武勇をもっておられる。

よるずの事柄が整っていなかったが、天子はこれを清定された。

虎や兕のごとき悪人が君命を放棄したが、天子はこれを平定された。

遠方の国をなつて近きも治め、俊才を官職に抜擢された。

帝業を創始して後嗣に伝え、そのいさおしは天に届いた。

右は文皇帝をまつる登歌。

○押韻 「皇」は下平11「唐」、「武」は上声9「慶」、この押韻については未詳。「之」は上平7「之」、あるいは「漕之」「平之」で押韻している可能性もあり、「漕」は下平14「漕」、「平」は下平12「庚」。「賢・天」は下平1「先」。

① 於皇時晋 「時」は「この」の意。『毛詩』周頌・般に「於皇 知以藏往。其孰能與此哉。古之聰明叡知、神武而不殺者夫。」
時周、陟其高山。」

② 允文允皇 「允文」はまことに文の徳がある。「文皇」は文帝 に「帝命不違、至于湯齊。湯降不遲、聖敬日躋。」

を指す。司馬師の同母弟、司馬昭。武帝の即位後、追尊された。

⑤ 神武 神のような武勇をそなえている。先の注③の用例を参照。

⑥ 萬機 万をかぞえる事。また、すべてのきざし。「機」は「幾」

後」、鄭箋に「信有文德哉、武王也。能開其子孫之基緒。」句 に通じる。『尚書』皋陶謨に「兪受敷施、九德咸事、俊乂在官。

末の「皇」字、『樂府詩集』卷八は「祖」に作る。 百僚師師、百工惟時。撫于五辰、庶績其凝。無教逸欲、有邦。 兢兢業業。一日二日萬幾、無曠庶官（兢兢、戒愼。業業、危懼。

③ 聰明叡知 『周易』繫辭伝上にそのまま見える。「神以知來、

幾、微也。言當戒懼萬事之微。」

⑦虎兇 トラと水牛に似た一角獣、猛獸の代表。『論語』季氏に、

孔子が冉有に述べたことばに見える。「且爾言過矣。虎兇出於
柙、龜玉毀於櫝中、是誰之過與。」

⑧放命 命令を放棄する。『漢書』傅喜伝に「高武侯喜無功而封、

内懷不忠、附下罔上、與故大司空丹同心背畔、放命圯族、虧損
德化、罪惡雖在赦前、不宜奉朝請、其遣就國。」

⑨柔遠能邇 遠方の国を懐柔し、近い国内もおだやかに順治する。

『毛詩』大雅・民勞にそのまま見える。「惠此中國、以綏四方。

無縱詭隨、以謹無良。式遏寇虐、憚不畏明。柔遠能邇、以定我

王」、鄭箋に「能猶仰也。邇、近也。安遠方之國、順仰其近者、

當以此定我國家、爲王之功、言我者同姓親也。』『尚書』顧命、

文侯之命にも見える。

⑩簡授英賢 賢才を選んで官職を授ける。

⑪創業垂統 事業を始めて後世に受け継がれる。『孟子』梁惠王

下に「苟爲善、後世子孫必有王者矣。君子創業垂統、爲可繼也。

若夫成功、則天也」とそのまま見える。

⑫勳格皇天 帝業を成し遂げるといふ勳功が天にとどく。『宋書』

武帝紀中に「詩云『有命自天、命此文王。』夫『或躍在淵』者、

終饗九五之位。『勳格天地』者、必膺大寶之業。」「皇天」は傳

玄「饗天地五郊歌」に「燕及皇天、懷柔百神」と既出。

曰晉是常^① 享祀時序^②
曰に 晉は是れ常なり 享祀 時れ序あり

宗廟致敬^③ 禮樂具舉^④
宗廟に敬を致し 禮樂具に舉ぐ

惟其來祭^⑤ 普天率土^⑥
惟れ其れ來たり祭るは 普天率土なり

犧樽既奠 清酏既載^⑦
犧樽 既に奠し 清酏 既に載す

亦有和羹^⑧ 薦羞斯備^⑨
亦た和羹有り 薦羞 斯に備わる

蒸蒸永慕^⑩ 感時興思^⑪
蒸蒸として永く慕い 時に感じて思いを興こす

登歌奏舞 神樂其和 登歌して舞を奏し 神は其の和を樂しむ

祖考來格^⑧ 祐我邦家^⑨ 祖考 來たり格^{いた}り 我が邦家を祐く

敷天之下 罔不休嘉^⑩ 敷天の下 休嘉せざる罔し

晋は永久不変の王朝であり、祭祀は滞りなく順序が整っている。

祖先のみたまやでつつしみをあらわすのに、礼樂はすべて準備が整っている。

祭祀の輔佐にやってくるのは、天下のありとあらゆる所から。

犠牲と酒樽は供えられ、御酒は樽に湛えられている。

調味されたあつものもあり、献げるごちそうが備わっている。

祖先をとこしえに思い慕い、時節ごとに思いを致す。

堂上で歌い舞うと、神は調和した歌舞を樂しまれる。

祖先の神が降臨されて、わが国家を助けてくださる。

天下あまねく、すべてにさいわいがゆきわたる。

○押韻 「序・擧」は上声 8 「語」、「土」は上声 9 「麋」は去声 19 「代」、「備」は去声 6 「至」、「思」は去声 7 「志」。「和」は下平 8 「戈」、「家・嘉」は下平 9 「麻」。

①曰晋是常 『毛詩』商頌・殷武に「昔有成湯、自彼氐羌、莫敢を「言う」でなく、句頭の助字に改変して用いる。

不來享、莫敢不來王。曰商是常」というのをふまえながら、「曰」 ②享祀時序 「享祀」は祖先神の祭祀をいう。『毛詩』魯頌・閟

宮に「春秋匪解、享祀不忒。皇皇后帝、皇祖后稷。」「時序」は順調に進む。『左伝』文公十八年に「舜臣堯、舉八愷、使主后土、以揆百事、莫不時序、地平天成。舉八元。使布五教于四方。」

③宗廟致敬 『孝経』感応章に「故雖天子必有尊也。言有父也。必有先也。言有兄也。宗廟致敬、不忘親也。脩身慎行、恐辱先也」とそのまま見える。

④具舉 ともに挙がる。こゝは用意がそろっていること。傅玄「羽鐸舞歌」に「豈唯簫韶、六代具舉」と既出。

⑤來祭 諸侯が祭祀を助けに来る。『孝経』聖治章に「昔者周公郊祀后稷、以配天、宗祀文王於明堂、以配上帝。是以四海之内、各以其職來祭（君行嚴配之禮、則德教刑於四海。海内諸侯各脩其職來助祭也）」。

⑥普天率土 天の下、地の果てに至るまで。『左伝』昭公七年に「古之制也、封略之内、何非君土。食土之毛、誰非君臣。故詩曰。普天之下、莫非王土。率土之濱、莫非王臣。」

⑦犧樽既奠、清酌既載 犠牲と酒器を席前に設置して、酒器に酒を注ぎ入れる。『礼記』郊特性に「既灌、然後迎牲、致陰氣也。

蕭合黍稷、臭陽達於牆屋。故既奠、然後炳蕭合羶薌。』『毛詩』

商頌・烈祖に「嗟嗟烈祖、有秩斯祐。申錫無疆、及爾斯所。既載清酌、賚我思成。亦有和羹、既戒既平。」

⑧亦有和羹 さまざまな味を調和したスープもそなえる。『尚書』説命下に「爾惟訓于朕志。若作酒醴、爾惟麴麴。若作和羹、爾惟鹽梅。爾交脩予、罔予棄（酒醴須麴麴以成、亦言我須汝以成。鹽、鹹。梅、醋。羹須鹹醋以和之。）」注⑦の用例を参照。

⑨薦羞 『周礼』天官・籩人に「凡祭祀、共其籩、薦羞之實（薦羞、皆進也。未食未飲曰薦。既食既飲曰羞。）」

⑩蒸蒸永慕 「蒸蒸」は孝順のさま。張衡「東京賦」に「於是春秋改節、四時迭代。蒸蒸之心、感物曾思。……亦有和羹。」

「永慕」は永遠に思慕する。曹植「応詔詩」に「嘉詔未賜、朝覲莫從。仰瞻城闕、俯惟闕庭。長懷永慕、憂心如醒。」

⑪感時興思 時節が推移するのを感じて、祖先を思う気持ちが起こる。『後漢書』孔融伝に「南陽王馮・東海王祗薨、帝傷其早歿、欲爲脩四時之祭、以訪於融。融對曰「聖恩敦睦、感時增思、悼二王之靈、發哀愍之詔、稽虔前典、以正禮制。」

⑫神樂其和 神が整った音楽を楽しむ。あるいは、神にささげる音楽がおだやかで整っていることをいうか。

⑬祖考來格 祖先神が降り至る。『尚書』益稷に「夔曰、鼗擊鳴球、搏拊琴瑟以詠、祖考來格。虞賓在位、羣后德讓。」

⑭邦家 国。『毛詩』小雅・南山有台に「南山有臺、北山有萊。」

樂只君子、邦家之基。樂只君子、萬壽無期。」

天」に同じ。『毛詩』周頌・般に「於皇時周、陟其高山。墮山番嶽、允猶翁河。敷天之下、哀時之對。時周之命。」「休」「嘉」は「よい」。ここは神の下す幸をいう。『尚書』說命中に「王惟戒茲、允茲克明、乃罔不休。」「郊祀歌十九章」「天門」〔漢書〕

⑮敷天之下 罔不休嘉 「敷天」は「普天」(第六句に既出)「溥

礼樂志)に「桃正嘉吉弘以昌、休嘉碎隱溢四方。」

肅肅^①在位 濟濟^②臣工

肅肅として位に在り 濟濟たる臣工

四海來格^③ 禮儀有容^④

四海より來たり格り 禮儀容有り

鍾鼓振 管絃理

鍾鼓 振るい 管絃 理^⑤う

舞開元^⑥ 歌永始^⑦

舞は元^⑧めを開き 歌は始めを永くす

神胥樂^⑨兮

神は胥^⑩な樂しめり

肅肅在位 臣工濟濟

肅肅として位に在り 臣工は濟濟たり

小大成敬 上下有禮^⑪

小大 成な敬し 上下 禮有り

理管絃 振鼓鍾

管絃を理え 鼓鍾を振るう

舞象德^⑫ 歌詠功

舞は德^⑬を象^⑭り 歌は功を詠う

神胥樂兮

神は胥な樂しめり

肅肅在位 有來雍雍^⑥

肅肅として位に在り 來たること有りて雍雍たり

穆穆天子^⑥ 相惟辟公

穆穆たる天子 相くるは惟れ辟公

禮有儀 樂有則^⑥

禮に儀有り 樂に則有り

舞象功 歌詠德^⑥

舞は功績を象り 歌は德を詠う

神胥樂兮

神は胥な樂しめり

右祠廟饗神歌二篇

右は祠廟饗神歌二篇

賓客はつつしんで席にあり、威嚴ある諸侯や百官もそろっている。

四方の果てからあまねく來たり至り、禮儀に儀容をそなえている。

鐘や鼓が振り鳴らされ、管弦の樂器が調和を奏でる。

舞はおおもとの始めであり、歌は物事の始めを長く引きのばす。

神はみな楽しんでおられることよ。

賓客はつつしんで席にあり、諸侯や百官は威儀盛ん。

年齢にかかわりなくみなつつしみ、身分にかかわりなくみな礼をわきまえる。

管弦の樂器を調和させ、鐘や鼓を振り鳴らす。

舞は德をかたちにあらわし、歌は勲をうたいあげる。

神はみな楽しんでおられることよ。

賓客はつつしんで席にあり、やわらいださまで客人がそろう。

おごそかな天子、それを助けるのは諸侯たち。

礼には容儀がそなわり、音楽には規則がそなわる。

舞は勲をかたちにあらわし、歌は徳をうたいあげる。

神はみな楽しんでおられることよ。

右は宗廟で神をもてなす歌二篇

○押韻 「工」は上平1「東」、「容」は上平3「鍾」。「理・始」は上声6「止」。「濟」は去声12「霽」、「禮」は上声11「齊」。「鍾」は上平3「鍾」、「功」は上平1「東」。「雍」は上平3「鍾」、「公」は上平1「東」。「則・徳」は入声25「徳」。

①肅肅 つつしむさま。『毛詩』周頌・離に「離、禘大祖也。有

來離離、至止肅肅。相維辟公、天子穆穆。」

②濟濟臣工 「濟濟」は威儀盛んなさま。傳玄「豫章府君登歌」

に「濟濟辟公、相予烝嘗」と既出。「臣工」は臣下と百官。『毛

詩』周頌・臣工に「臣工、諸侯助祭、遣於廟也。嗟嗟臣工、敬

爾在公。」

③四海來格 「格」はいたる。『毛詩』商頌・玄鳥に「肇域彼四

海、四海來假。來假祁祁、景員維河。」

④有容 身のこなしが礼儀にかなっている。

⑤開元 始めを開く。傳玄「羽籥舞歌」に「羲皇之初、天地開元」

と既出。

⑥歌永始 歌は始めを永くのばす。おおもとを忘れずにいること

をいう。『尚書』舜典の「詩言志、歌永言、聲依永、律和聲」

を意識するか。

⑦胥樂 相共に楽しむ。『毛詩』魯頌・有駘に「振振鷺、鷺于下。鼓

咽咽、醉言舞、于胥樂兮、鄭箋に「胥、皆也」「君臣於是則皆喜樂

也。」

⑧ 小大成敬 上下有禮 「小大」は長幼。『毛詩』小雅・楚茨に「爾

殺既將、莫怨具慶。既醉既飽、小大稽首。神嗜飲食、使君壽考」、

鄭箋に「小大猶長幼也。」「上下有禮」は『左伝』襄公十三年に

「君子尚能而讓其下、小人農力以事其上、是以上下有禮、而讒

慝黜遠。由不爭也、謂之懿德」とそのまま見える。

⑨ 舞象德 傅玄「地郊饗神歌」に「舞象德、歌成文」と既出。

⑩ 有來雍雍 「雍雍」はおだやかなさま。「離離」に通じる。注

①の用例を参照。

⑪ 穆穆天子 「穆穆」は天子のうるわしい姿。注①の用例を参照。

⑫ 禮有儀 樂有則 「有儀」は礼儀を守る。『毛詩』小雅・菁菁者

莪に「菁菁者莪、在彼中阿。既見君子、樂且有儀。」「則」は法

るべき道。同・大雅・烝民に「天生烝民、有物有則。民之秉彝、

好是懿德。」

⑬ 舞象功 歌詠德 底本は「舞象功歌詠德神膏樂兮」の十字を欠

くが、『晋書』樂志上、『樂府詩集』卷八等により補う。『後漢

書』祭祀志下注に引く『東觀漢記』に「永平三年八月丁卯、公卿

奏議世祖廟登歌八佾舞名。東平王蒼議、以爲、漢制舊典、宗廟

各奏其樂、不皆相襲、以明功德。……以兵平亂、武功盛大。歌

所以詠德、舞所以象功、世祖廟樂名宜曰大武之舞。」

(釜谷武志)

晉江左宗廟歌十三篇

曹毗造十一首

王珣造二首

晉の江左の宗廟歌十三篇

曹毗造る 十一首

王珣造る 二首

歌高祖宣皇帝 曹毗造

高祖宣皇帝を歌う 曹毗造る

於赫高祖 德協靈符

於あ赫あたる高祖 德は靈符かなに協あう

應運撥亂^① 釐整天衢^② 運に應じて亂を撥め 天衢を釐整す

勳格宇宙^③ 化動八區^④ 勳は宇宙に格り 化は八區を動かす

肅以典刑^⑤ 陶以玄珠^⑥ 肅すに典刑を以てし 陶うに玄珠を以てす

神石吐瑞^⑦ 靈芝自敷^⑧ 神なる石は瑞を吐き 靈なる芝は自ら敷く

肇基天命^⑨ 道均唐虞^⑩ 肇めて天命を基め 道は唐虞に均し

高祖宣皇帝を贊美して歌い上げる 曹毗の作

ああ輝かしき高祖よ、その徳は天から授かった符命に適うものであった。

機運に応じて動亂を平定し、天下を整然と正された。

勳功は天下の隅々にまで行き渡り、教化は広く八方の人々を揺り動かした。

人々を戒めるには行き過ぎのないよう常刑を用い、薫陶するには奥深い真理の道によってさりげなく行われた。

それを称えて、この世のものならざる石は瑞祥を浮かび上げらせ、靈妙なるひじりだけは自ずから一面に生い茂った。

天命を受けて国家の礎をはじめて築かれ、その統治の道は唐堯や虞舜に等しいものであった。

○押韻 「符・衢・區・珠・敷・虞」は上平10「虞」。

①江左 長江下流域以東を指す。南朝の人々は特に東晋(三一七) ②曹毗 曹操の族子曹休の子孫。生没年は未詳。『晋書』文苑伝

に伝がある。彼と王珣らが「晉江左宗廟歌」を作ったことは、

『宋書』樂志一に「晉世曹毗・王珣等亦增造宗廟哥詩、然郊祀遂不設樂」と見え、『晋書』樂志下では、前掲『宋書』樂志の上文「太元中、破苻堅、又獲樂工楊蜀等、閑練舊樂、於是四箱金石始備焉」に直結させてこの出来事を記す。更に、『晋書』孝武帝紀には、太元十六年（三九一）正月、太廟を改築したことが記されている。これらの記事から推して、本歌辞群十三篇は、この時の祭祀に合わせて作られた可能性が考えられる。

③王珣 東晋の宰相王導の孫。三四九〜四〇〇。『晋書』王導伝に伝が附せられている。本歌辞群の制作については前掲注②を参照。

④高祖宣皇帝 西晋王朝の基礎を築いた司馬懿（一七九〜二五二）の諡は文、後に宣文。晋が建国したとき宣王と追尊され、武帝司馬炎が受禪してから宣皇帝と号された。『晋書』宣帝紀「高祖」は多く開国の君主に用いられる廟号。咸寧元年（二七七）五、宣帝廟を追尊して高祖と改められた。『晋書』武帝紀「於」は感嘆詞。「赫」は輝かしいさま。『毛詩』商頌・那に「於赫湯孫、穆穆厥聲。庸鼓有數、萬舞有奕。」その

小序に「那、祀成湯也。微子至于戴公、其間禮樂廢壞。有正考甫者、得商頌十二篇於周之大師。以那爲首。」

⑥靈符 上天から下された符命。用例として、曹植「聲舞歌・大魏篇」（『宋書』樂志四）に「大魏應靈符、天祿方甫始。」陸機「弔魏武帝文」（『文選』卷六〇）に「信斯武之未喪、膺靈符而在茲。」なお、『文選』李善注所引曹植「大魏篇」は、「應」を「膺」に、「甫」を「茲」に作る。

⑦撥亂 混乱を平定する。『毛詩』大雅・江漢の小序に「江漢、尹吉甫美宣王也。能興衰撥亂、命召公平淮夷。」『三國志』魏書・諸夏侯曹伝、『晋書』宣帝紀によると、正始十年（二四九）正月、司馬懿は、幼帝曹芳の輔政に当たりながら公権を私物化していた曹爽・曹羲兄弟、及びその一派の何晏・丁謐・鄧颺・畢軌・李勝・桓範らを粛清した。一句はこの一連の出来事を指すか。

⑧釐整天衢 「釐整」は、筋道立てて整える。「天衢」は、天道。『易』大畜・上九爻辞に「何天之衢、亨。」一句は、揚雄「劇秦美新」（『文選』卷四八）にいう「荷天衢、提地釐」を文字の

レベルで踏まえるか。

⑨動格宇宙 「宇宙」は、天地の間に広がる無限の空間と時間、

全世界。『淮南子』原道訓に「紘宇宙而章三光」、高誘注に「四方上下曰宇、古往今來曰宙、以喻天地。」ここでは天下国家をいう。類似表現として、既出の「晋宗廟歌十一篇」其九「祀文皇帝登歌」に「創業垂統、動格皇天。」

⑩八區 八方、つまり天下をいう。用例として、揚雄「解嘲」〔『漢書』揚雄伝下、『文選』卷四五〕に「天下之士、雷動雲合、魚

鱗雜襲、咸營于八區。」『漢書』顔師古注に「八區、八方也。」

⑪典刑 規準を踏み越えない恒常的な刑罰。『尚書』舜典に「象

以典刑（象、法也。法用常刑、用不越法）。」

⑫玄珠 黒真珠。ここでは奥深い真理の道をいう。『莊子』天地

篇に「黄帝遊乎赤水之北、登乎崑崙之丘而南望、還歸、遺其玄珠。」『經典釈文』に引く司馬彪の注に「玄珠、道真也。」

⑬神石 司馬氏が曹魏に取って代わる予兆として現れた石。たと

えば、『魏氏春秋』〔『三國志』魏書・明帝紀・裴松之注、『藝文類聚』卷一〇〕によると、魏の明帝の青龍三年（二三五）、汜濫した張掖郡刪丹泉山奥の川から、図の描かれた、亀のような形状の巨大な宝石が現れ、玉の箱、麒麟、鳳凰、白虎、犠牲の牛を伴った石の馬七頭の南に、「大討曹、金但取之」云々と

いった文字が書かれていた。五行説で、金は晋王朝を象徴する。

⑭靈芝 天下泰平の瑞祥として現れるひじりだけ。たとえば、『孝

経援神契』〔『藝文類聚』卷九八〕に「德至於草木、則芝草生。」

⑮肇基 初めて基盤を打ち立てる。『尚書』武成に「至於大王、

肇基王迹。」

⑯唐虞 伝説的帝王、堯と舜。「唐」は、堯が天子となる前の領

土、「虞」は、舜の祖先伝来の領土。

歌世宗景皇帝^① 世宗景皇帝を歌う

景皇承運^② 纂隆洪緒^③ 景皇 運を承け 洪緒を纂隆す

皇維 ^① 重抗	天暉再舉	皇維	重ねて抗げられ	天暉	再び舉げらる
蠢矣 ^② 二寇	擾我揚楚 ^③	蠢たるかな二寇	我が揚楚を擾す		
乃整元戎 ^④	以膏齊斧 ^⑤	乃ち元戎を整え	以て齊斧に膏ぬる		
臺臺神算 ^⑥	赫赫 ^⑦ 王旅 ^⑧	臺臺たる神算	赫赫たる王旅		
鯨鯢既平 ^⑨	功冠帝宇 ^⑩	鯨鯢は既に平らげられ	功は帝宇に冠たり		

世宗景皇帝を賛美して歌い上げる

景帝は天命を受けて、偉大なる帝業を継承された。

天下を束ねる綱紀が重ねて高く掲げられ、天下を照らす光が再び挙がった。

ところが、不遜にも、二つの賊党が、わが揚州や楚の地に混乱を引き起こした。

そんなわけで、景帝は大いなる兵車を整え、鋭い斧を血糊にまみれさせて反乱を鎮圧された。

綿密に練り上げられた神業的な知略と、輝かんばかりに勢い盛んな帝王の軍隊。

不義なるクジラどもはすっかり平定されて、その功績は天下一に輝いた。

○押韻 「緒・舉・楚・旅」は上声8「語」、「斧・宇」は上声9「麌」。

①世宗景皇帝 司馬懿の長子、司馬師（二〇八〜二五五）。諡は 皇帝と号された。（『晋書』景帝紀）「世宗」は、その文治武功

忠武。晋が建国してから景王と追尊され、武帝が受禪すると景 により一世の本源となった人物に用いられる廟号。こう追尊さ

れた時期は、前詩の「高祖宣皇帝」に同じ。

②承運 天命を受ける。用例として、孫楚「為石仲容与孫皓書」

『文選』卷四三)に「太祖承運、神武應期。」

③纂隆洪緒 「纂隆」は、大業を継承する。用例として、陸機「皇

太子宴玄圃宣猷堂有令賦詩」(『文選』卷二〇)に「皇上纂隆、

經教弘道。」李善注は、『爾雅』釈詁上にある「纂、繼也」を引

いて解釈する。「洪緒」は、代々継承されてきた大業。多くは

帝業をいう。類似句として、『三国志』魏書・管寧伝に引く彼

の文帝への上疏文に「横蒙陛下纂承洪緒、德侔三皇、化溢有唐。」

④皇維 天下を統括する綱紀。

⑤蠢矣二寇 「蠢」は、未開の者たちの無礼不遜なさま。『爾雅』

釋訓に、「蠢、不遜也」と。一句は『毛詩』小雅・采芣にいう

「蠢爾蠻荆、大邦爲讎」を踏まえる。「二寇」とは、毋丘儉と

文欽の反乱を指す。『三国志』魏書・毋丘儉伝、及び『晋書』

景帝紀によると、正元二年(二五五)、鎮東將軍・都督揚州諸

軍事で、夏侯玄・李豊に近しかった毋丘儉は、曹爽と同郷で、

論功行賞に不満を持っていた揚州刺史の文欽を抱き込んで司馬

師に反し、鎮圧された。二人に関わりのある夏侯玄・李豊・曹爽は、いずれも司馬懿・司馬師父子に殺された人々である。

⑥揚楚 毋丘儉・文欽が拠った呉楚の地。それを予言する事象と

して、『三国志』魏書・毋丘儉伝に、「正元二年正月、有彗星數

十丈、西北竟天、起于呉楚之分。儉・欽喜、以爲己祥。」「晋書」

景帝紀にも同様の記事がある。

⑦元戎 大きな兵車。『毛詩』小雅・六月に「元戎十乘、以先啓

行(元、大也)。」

⑧膏齊斧 「齊斧」は、切れ味の鋭い斧。『漢書』王莽伝下に、

黃鉞を失った司徒王尋の言として「此經所謂『喪其齊斧』者也。」

その応劭注(顔師古注引)に「齊、利也。」顔師古注に「此『易』

巽卦上九爻辞。」なお、現行の『易』では「齊」を「資」に作

る。それに「膏」ぬるとは、斧に血糊をべつとりと塗りつける、

つまり、相手に切りつけて徹底的な痛手を負わせること。用例

として、潘岳「閔中詩」(『文選』卷二〇)に「周殉師令、身膏

氏斧。」

⑨臺臺 努め励むさま。『毛詩』大雅・文王に「臺臺文王、令聞

不已（震聲、勉也）。」

⑫鯨鯢 雄雌のクジラ。弱小なる者を食い物にする悪人の喩え。

⑩赫赫 盛んなさま。『毛詩』大雅・常武に「赫赫明明、王命卿

『左伝』宣公十二年に「古者明王伐不敬、取其鯨鯢而封之、以

士、南仲大祖、大師皇父（赫赫然、盛也）。」

爲大戮（鯨鯢、大魚名。以喩不義之人吞食小國）。」

⑪王旅 帝王の軍隊。『毛詩』大雅・常武に「王旅嘽嘽、如飛如

⑭帝宇 皇帝のいます宮殿。ここでは天下を指す。

翰」

歌太祖文皇帝^①

太祖文皇帝を歌う

太祖齊聖^② 王猷^③誕融^④

太祖 齊聖にして 王猷 誕いに融る

仁教四塞^⑤ 天基累崇^⑥

仁教 四もに塞ち 天基 累ねて崇し

皇室多難^⑦ 嚴清紫宮^⑧

皇室 多難にして 嚴しく紫宮を清む

威厲秋霜 惠過春風

威は秋霜よりも厲しく 惠みは春風に過ぐ

平蜀夷楚^⑨ 以文以戎^⑩

蜀を平らげ楚を夷らぐるに 文を以てし戎を以てす

奄有參墟^⑪ 聲流無窮^⑫

奄いに參墟を有して 聲の流ること無窮なり

太祖文皇帝を贊美して歌い上げる

太祖は正しく聡明で、帝王としての知略は大いに行き渡った。

仁徳による教化が四方に満ち、天より託された帝業の礎は段々と高まっていった。

時に皇室は多難な時期であつたが、太祖は宮廷内を厳しく清め正された。

その威嚴は秋の霜よりも厳しく、下される恩恵は春風にも増して暖かかった。

蜀や楚の地を平定するのに、文武を兼ね備えた力を用いられた。

こうして大いに晋の国土を領有し、その名声は永遠に伝えられることとなった。

○押韻 「融・崇・宮・風・戎・窮」は上平1「東」。

①太祖文皇帝 司馬師の同母弟、司馬昭（二二一〜二六五）。諡

徐方既來（猶、謀也）。「猷」は「猶」に同じ。

は文王。武帝が受禪すると文皇帝と追号され、廟は太祖と称された。〔晋書〕文帝紀）廟が追尊された時期は、前掲の「高祖

④誕 大いに。『尚書』湯告に「王歸自克夏、至于亳、誕告萬方（誕、大也）」。

宣皇帝」に同じ。「太祖」という語はもと周の文王を指すが〔毛

⑤四塞 四方の至るところに充滿する。用例として、司馬相如「封

詩』周頌・雝・小序の毛伝）、後世、開国した皇帝の廟号として多く用いられるようになった。司馬昭もまた、自身は現王朝

旁魄四塞、雲布霧散、上暢九垓、下沂八埏。」

に仕え、その子が次の王朝の初代皇帝となったという点で、周文王との共通点を持つ。

⑥天基 天から託された帝業の基礎。

②齊聖 正しく聡明なこと。たとえば『尚書』微子之命に「嗚呼、

郭皇太后（明元郭皇后）の令にいう高貴郷公曹髦の狼藉〔三

乃祖成湯、克齊聖廣淵。」

国志』魏書・三少帝紀）を指すだろう。ただ、その裴松之注に

③王猷 帝王のはかりごと。『毛詩』大雅・常武に「王猶允塞、

引く『漢晋春秋』は、司馬昭によつて魏王朝の權威が日々失わ

れていくことに憤懣やるかたない曹髦が、相国の司馬昭に対してクーデターを起こしたと捉えている。

⑧ 嚴清紫宮 「紫宮」は、天帝の宮殿である紫微宮。『史記』天

官書に「中宮。天極星、其一明者、太一常居也。旁三星三公、或曰子屬。後句四星、末大星正妃、餘三星後宮之屬也。環之匡

衛十二星、藩臣。皆曰紫宮。」ここでは天子の居所一円をいう。

一句は、司馬昭が高貴郷公曹髦のクーデターを肅清したことを指す。『三國志』魏書・三少帝紀、甘露五年（二六〇）の条に、

「五月己丑、高貴郷公卒、歳二十。」ことの経緯については、

前掲注⑦に挙げた『漢晋春秋』に詳しい。

⑨ 平蜀夷楚 「平蜀」は、景元四年（二六三）、蜀漢の劉禪を降伏させたこと、及びその功労者である鍾会が蜀で企てた反乱を、

歌世祖武皇帝①

於穆武皇 允龔欽明

應期登禪 龍飛紫庭

百揆時序 聽斷以情

世祖武皇帝を歌う

於穆^{あゝ}武皇 允龔 欽明なり

期に應じて登禪し 龍の紫庭に飛ぶがごとし

百揆 時に序へ 聽斷 情を以てす

咸熙元年（二六四）に鎮圧したこと（『晋書』文帝紀）を指す。

「夷楚」は、甘露三年（二五八）、寿春（安徽省）で反した諸葛誕を鎮圧したこと（『三國志』魏書・諸葛誕伝、『晋書』文帝紀）をいう。寿春は郢ともいい、楚の末代、孝烈王が都を置いたところ。『史記』楚世家に、「楚東徙都寿春、命曰郢。」

⑩ 以文以戎 文武双方の能力を行使する。表現上、『毛詩』魯頌

・泮水にいう「允文允武、昭假烈祖」を踏まえるか。

⑪ 奄有 おおいに有する。『毛詩』大雅・皇矣に「受祿無喪、奄有四方（奄、大也）。」

⑫ 參墟 參星に相応する晋の国土、今の山西・河南一帯を指す。

『左伝』昭公十五年に「唐叔受之、以處參墟（參墟、實沈之次、晋之分野）。」「參墟」は「參虛」に同じ。

殊域既賓 偽吳亦平^⑧ 殊域は既に賓^{したが}い 偽吳も亦た平らぐ

晨流甘露 宵映朗星^⑨ 晨に甘露流れ 宵に朗星映ず

野有擊壤^⑩ 路垂頌聲^⑪ 野に擊壤有り 路に頌聲垂る

世祖武皇帝を賛美して歌い上げる

ああ麗しき徳を備えた武皇帝は、誠実で恭しく聡明であられた。

機運に応じて禅讓を受けて皇位に昇り、龍が天庭に昇るように朝廷の玉座に就かれた。

百官を統べる者がその時々々に奏上し、裁判では人々の訴えに耳を傾け、人情に基づいて判断を下された。

これにより、はるか遠方の国々が帰順したばかりか、吳国を自称する連中もまた平定された。

瑞祥として、早朝には甘露がしたり、宵には明るい星が空に照り輝いた。

田野には擊壤に打ち興ずる老人たちがいて、路には天下泰平を賛美する歌声が流れた。

○押韻 「明・平」は下平12「庚」、「庭・星」は下平15「青」、「情・聲」は下平14「清」。

①世祖武皇帝 司馬昭の長子、司馬炎（二三六～二九〇）。咸熙 讓を受けて晋王朝を建てた。廟号は「世祖」。『三国志』魏書

二年（二六五）五月に晋王の太子に立てられ、同年八月辛卯（九 三少帝紀、『晋書』武帝紀）

日）、司馬昭の崩御に伴い晋王に即位、同年十二月（恐らくは ②於穆武皇 「於」は感嘆詞、「穆」は賛美の修飾語。『毛詩』周

十一月の誤り）壬戌（十二日）に魏の元帝（陳留王曹奐）の禪 頌・清廟に「於穆清廟（於、歎辭也。穆、美。」）なお、同一句

が書植「武帝誅」(『三国志』魏書・蔣濟伝・裴松之注)に見え、類似句が書植「大司馬曹休誅」(『藝文類聚』卷四七)に「於穆公侯」とある。

③允龔欽明 「允龔」は、「允恭」に同じ。誠実で恭しい。「欽明」は、恭しく聡明である。いずれも皇帝を賛美する語。『尚書』堯典に「欽明文思安安、允恭克讓、光被四表、格于上下。」

④應期登禪 「應期」は、機運のめぐり合わせに応じる。「登禪」は、禪讓を受けて帝位に登る。応貞「晋武帝華林園集詩」(『文選』卷二〇)に「於時上帝、乃願惟眷、光我晉祚、應期納禪。」

⑤龍飛紫庭 「龍飛」は、帝位に昇る。『易』乾卦・九五の爻辭に「飛龍在天、利見大人。」「紫庭」は、天帝の宮廷。前詩に見える「紫宮」に同じ。

⑥百揆時序 「百揆」は諸々の政治を統括する者。「序」は順序だてて述べる。『尚書』舜典に「納于百揆、百揆時敘(揆、度也。度百事、揔百官、納舜於此官。舜舉八凱、使揆度百事、百事時敘、無廢事業)。」

⑦聽斷以情 「聽斷」は、裁判で事情をよく聴き取り、判断を下

す。用例として、『漢書』絳伝下に「中宗明明、奮用刑名、時舉傳納、聽斷惟精。」

⑧僞吳亦平 「僞吳」は、孫呉を正統でない王朝と貶めて呼んだもの。武帝の咸寧六年(二八〇)三月壬寅(十五日)、龍驤將軍の王濬が舟の師団を建鄴の石頭まで進めてきたのに驚いた孫皓が降伏し(『晋書』武帝紀)、ここに呉が滅亡した。

⑨甘露・朗星 ともに天下泰平の瑞祥。皇甫謐『帝王世紀』(『藝文類聚』卷一一「帝堯陶唐氏」)に「有五十老人、擊壤於道。觀者歎曰、大哉、帝之德也。老人曰、吾日出而作、日入而息。

擊井而飲、耕田而食。帝何力於我哉。於是景星曜於天、甘露降于地、朱草生於郊、鳳皇止於庭、嘉禾孳於畝、澧泉湧於山。」

⑩擊壤 太古の遊戯。帝堯の時代、その善政を享受する老人が道端でこの遊戯に興じていたことから、天下泰平を象徴する語として用いられる。前掲注⑨を参照。

⑪頌聲 善政に感謝する賛美の歌声。『公羊伝』宣公十五年に「什一者、天下之中正也。什一行而頌聲作矣(頌聲者、大平歌頌之聲、帝王之高致也)。」

歌中宗元皇帝^①

中宗元皇帝を歌う

運屯百六^② 天羅解貫^③

運は百六に屯^くしみ 天羅は貫を解く

元皇勃興^④ 網籠江漢^⑤

元皇 勃として興り 江漢を網籠す

仰齊七政^⑥ 俯平禍亂^⑦

仰ぎては七政を齊^{おさ}め 俯しては禍亂を平らぐ

化若風行^⑧ 澤猶雨散

化すること風の行くが若く 澤すること猶お雨の散ずるがごとし

淪光更耀 金輝復煥^⑨

淪^しみたる光は更に耀^{かがや}き 金の輝^{かがや}きは復た煥^{あき}らかなり

徳冠千載 蔚有餘榮

徳は千載に冠たり 蔚として餘榮有り

中宗元皇帝を賛美して歌い上げる

天運は百六の厄に行き悩み、天下を統治する機構はその根幹が解体した。

そこに元帝は勃然と興隆し、網や籠で捕らえるように長江漢水の流域一帯を手中に収めた。

天を仰いで日月五星を調整して天下を治め、地上に俯いては禍や混乱を平定した。

その教化は風が吹くようにあまねく行き渡り、恩沢は雨が広く大地を潤すようだ。

沈んでいた光は改まって再び輝き、晋の徳である金の輝きはまたまばゆいばかりの明るさを取り戻した。

その徳は千年に冠たるもので、鬱蒼と茂る樹木のようにあふれんばかりの鮮やかさだ。

○押韻 「貫・亂・煥」は去声²⁹「換」、「漢・散・粲」は去声²⁸「翰」。

①中宗元皇帝 三一六年に滅亡した西晋王朝を江南で再建した東

晋の元帝、司馬睿（二七六～三二三）。宣帝司馬懿の曾孫。建

武元年（三一七）三月辛卯（九日）、魏・晋の故事に倣つて晋

王となり、太興元年（三二八）三月丙辰（十日）、群臣の要請

に応じて皇帝の位に就いた。廟号は「中宗」。『晋書』元帝紀）

②百六 厄運をいう。用例として、『漢書』谷永伝に引くその上

奏文に「陛下承八世之功業、當陽數之標季、涉三七之節紀、遭

无妄之卦運、直百六之災隄。」ほぼ同時代の袁宏「三国名臣序

贊」（『文選』卷四七）にも「百六道喪、干戈迭用。」

③天羅解貫 天下を統べる王朝の一貫性が解体された状況をい

う。干宝「晋紀総論」（『文選』卷四九）にも「内外混淆、庶官

失才、名實反錯、天網解紐、國政迭移於亂人、禁兵外散於四方。」

④元皇勃興 以下の一連の動向を指す。司馬睿は、専横を極めた

成都王穎の討伐に従つて捕らえられ、叔父の東安王繇が殺害さ

れるに及んで遁走したが、東海王越が下邳で兵力を集めると、

その下で安東將軍・都督揚州諸軍事を務め、永嘉（三〇七～三

一三）の初め、王導の計略によつて建鄴に拠点を置き、呉人顧

榮らの協力を得ながら江東一帯を収攬した。（『晋書』元帝紀）

⑤網籠江漢 網や籠で捕らえるように、長江・漢水の流域一帯の

人々を収攬する。特に、司馬睿を補佐した王導の、南人に対す

る次のような支配を指しているか。建興二年（三二四）、呉人

の周勰は、北來の貴族らの専横に憤りつつ死去した父、呉興太

守の周玘の遺言に従つて反乱を起こし、多くの南方系豪族がこ

れに集結した。（『資治通鑑』晋紀十一・愍帝建興二年）司馬睿

政權は、この反乱に同調しなかつた周札（周玘の弟）を呉興太

守に任命し、周勰の従兄、周筵を太子右衛率に任命して、南人

の切り崩しを図つた。（同建興三年）川勝義雄『魏晋南北朝（中

国の歴史3』（講談社、一九七四年）一七二～一八二頁を参照。

⑥齊七政 日月五星を整えて、天下を治める。『尚書』舜典に「正

月上日、受終于文祖。在璿璣玉衡、以齊七政（在、察也。璿、

美玉、璣、衡。玉者、正天文之器、可運轉者。七政、日月五星、

各異政。舜察天文、齊七政、以審己當天心與否。」

⑦平禍亂 前掲注⑤に示した動乱鎮圧を指すか。

⑨金輝復煥 五行相生説により、土徳の魏を受け継いだ晋王朝の

⑧化若風行 教化を風に喩える例として、「毛詩序」「文選」卷

徳は金である。一句は、晋王朝の復興をいう。

「四五」に「風以動之、教以化之。」

歌 肅祖明皇帝^①

肅祖明皇帝を歌う

明明肅祖^② 闡弘帝胙^③

明明たる肅祖 帝胙を闡弘す

英風夙發^④ 清暉載路^⑤

英風 夙に發し 清暉 路に載つ

姦逆縱忒^⑥ 罔式皇度^⑦

姦逆 忒を 縱にし 皇度に忒る罔し

躬振朱旗^⑧ 遂豁天步^⑨

躬^{みずか}ら朱旗を振いて 遂に天歩を豁^{ひら}く

宏猷淵塞^⑩ 高羅雲布^⑪

宏猷 淵塞にして 高く羅^{つら}なり雲のごとく布^しく

品物咸寧^⑫ 洪基永固^⑬

品物 咸^{みな}寧^{やす}らかに 洪基 永く固し

肅祖明皇帝を賛美して歌い上げる

聡明な肅祖明帝は、天から下された皇位を明々と天下に知らしめた。

秀でた風格は早期から發揮され、清らかな光が路上いっぱい満ちあふれた。

ところが、邪な逆賊が悪の限りを尽くし、皇帝の定める法度をないがしろにした。

陛下は自ら紅色の軍旗を振るってこれを討伐され、かくして国運をからりと切り開かれた。

大いなるはかりごととは深く充実し、天下に高く張り巡らされた綱紀は雲のように広がった。地上の万物はみな安らかに、後代に引き継がれる帝業は永遠に堅固なものとなった。

○押韻 「祚・路・度・歩・布・固」は去声11「暮」。

① 肅祖明皇帝 元帝司馬睿の長子、司馬紹（二九九〜三二五）。

司馬睿の即位に伴って太子となり、永昌元年（三二二）、元帝

司馬睿が崩御すると、帝位に就いた。廟号は「肅祖」。〔『晋書』

明帝紀）

② 明明肅祖 「明明」は、聡明なさま。多く君主を褒め称えるの

に用いられる。『尚書』五子之歌に「明明我祖、萬邦之君。」

③ 闡弘帝祚 天から命ぜられた皇位を、明らかに広く宣言する。

「祚」は「祚」に通ず。

④ 英風夙發 司馬紹の神童ぶりを伝える次のような逸話がある。

数歳の頃、長安からの使者に、太陽と長安といずれが遠いかを問われて、太陽から人が来たとは聞かないので太陽の方が遠いと答えたが、翌日、宴席で群臣たちから受けた同じ問いに、太陽の方が近いと答え、色を失った父元帝に、太陽は目を挙げれば見えるが長安は見えないと言ったという。〔『世説新語』夙慧篇、『晋書』明帝紀）

⑤ 載路 路上いっぱい満ちる。左思「魏都賦」〔『文選』卷六）に「餘糧棲畝而弗收、頌聲載路而洋溢。」

⑥ 姦逆縱忒 「忒」は、悪事。用例として、陳琳「爲袁紹檄豫州」

〔『文選』卷四四）に「操遂承資跋扈、肆行凶忒。」一句は、司

馬睿を東晋建国に導いた王導の従兄、王敦の所業を指すだろう。

王敦は、永昌元年（三二二）、元帝の側近劉隗を誅する名目で

反乱を起こし、司馬紹が帝位に就くと、王朝篡奪を謀りつつ自

ら揚州牧となり、いよいよ晋王朝をないがしろにして暴慢の限

りを尽した〔『晋書』元帝紀・明帝紀・王敦伝）。

⑦ 皇度 皇帝の定めた法度。用例として、『宋書』樂志二、荀勗

「正旦大会行礼歌・邦国」に「思我皇度、彝倫攸序。」

⑧躬振朱旗 「朱旗」すなわち紅の旗は、多く軍旗をいう。用例

中に「匪直也人、秉心塞淵（箋云、塞、充實也。淵、深也。）」

として、曹植「東征賦」（『藝文類聚』卷五九）に「揮朱旗以東

「淵塞」は「塞淵」に同じ。用例として、袁宏「三国名臣序贊」

指兮、橫大江而莫御。」一句が表す史実として、太寧二年（三

（『文選』卷四七）に「公衡冲達、秉心淵塞。」

二四）七月、明帝は自ら軍隊を率いて王敦討伐に赴き、越城（今

⑫高羅雲布 「高羅」は、前詩にいう「天羅」と同じ系列の語。

の南京市南部）で大いに破って王敦を憤死に追いやった（『晋

天高く張り巡らされた、天下を統べる綱紀。一句の類似表現と

書』明帝紀）。

して、班固「西都賦」（『文選』卷一）に「罽網連紘、籠山絡野、

⑨天歩 天の運行。国運をいう。『毛詩』小雅・白華に「天歩艱

列卒周匝、星羅雲布。」

難、之子不猶（歩、行）。」

⑬品物咸寧 「品物」は、地上に生育する万物。『易』坤卦・彖

⑩宏猷 大いなるはかりごと。前掲注⑨に示した『毛詩』小雅・

伝に「坤厚載物、徳合无疆、含弘光大、品物咸亨。」

白華の鄭箋に「猶、囚也。」「猷」は「猶」に同じ。

⑭洪基 大いなる基盤事業。多くは世襲の帝業をいう。

⑪淵塞 心の持ち様が深く充実している。『毛詩』邶風・定之方

歌顯宗成皇帝^①

顯宗成皇帝を歌う

於休顯宗^② 道澤玄播

於^あ休^うしき顯宗^わ 道澤は玄^おく播^くかる

式宣德音^③ 暢物以和

式^もて德音を宣べ 物を暢^わべて以て和せしむ

邁德蹈仁^④ 匪禮弗過^⑤

德^とに邁^まめ仁を蹈^たみて 禮^{れい}に匪^ひずんば過^よらず

敷以純風 濯以清波

敷^おくに純風を以てし 濯^あらうに清波を以てす

連理映阜 鳴鳳棲柯^⑦

連理は阜おかに映じ 鳴鳳は柯えだに棲む

同規放勛^⑧ 義蓋山河^⑨

規を放勛と同じくし 義は山河を蓋う

顯宗成皇帝を贊美して歌い上げる

ああ麗しき顯宗、その政による恩沢は、玄妙な働きで天下に広く波及した。

以て仁徳にあふれた言葉を遍く行き渡らせて、万物は存分にその本性を伸ばして調和した。

徳行に励んで仁愛の道を実践され、礼儀に合致しなければそこへ立ち寄ることはされなかった。

純粹な氣風を敷き広げ、清らかな波で汚濁を洗い清められた。

すると、連理の木が丘に照り輝き、鳴き交わす鳳凰が梧桐の枝に巢を作るといふ瑞祥が現れた。

帝堯と同じ規範に則り、その正義は山河を覆い尽した。

○押韻 「播」は去声³⁹「過」。「和・過・波」は下平⁸「戈」、「柯・河」は下平⁷「歌」。過韻と戈韻とは、声調は異なるが、韻母は

同じ。于安瀾『漢魏六朝韻譜』は、この詩を一韻到底と見ている（魏晉宋譜・歌戈麻）。

①顯宗成皇帝 明帝司馬紹の長子、司馬衍（三二一〜三四二）。亮が補佐した。廟号は「顯宗」。『晉書』成帝紀）

太寧三年（三二五）三月戊辰（二日）、皇太子となり、同年閏 ②於休顯宗 「於」は感嘆詞。「休」は、うるわしい。蔡邕「郭

八月戊子（二十五日）に明帝が崩御すると、翌日の己丑、帝位 有道碑文」『文選』卷五八）に「於休先生、明德通玄。」一句

に就いた。時に五歳。皇太后の庾氏が称制し、王導と外戚の庾 の構成は、前掲「歌高祖宣皇帝」の「於赫高祖」、「歌世祖武皇

帝」の「於穆武皇」に同じ。

者德化洽、八方合爲一家、則木連理。」

③式宣德音 「式」は、以て。『尚書』盤庚下に「式敷民德、永肩一心（用布示民、必以德義、長任一心、以事君）。」「德音」は、仁徳にあふれた天子の言葉をいう。

⑦鳴鳳棲柯 「鳳」は仁の鳥。天下泰平の瑞祥。『礼斗威儀』（『藝文類聚』卷九九）に「君乘土而王、其政太平、鳳皇集於苑林。」なお、鳳凰が棲むのは梧桐の木に限られる。『毛詩』大雅・卷

④邁德 徳行に励む。『左伝』莊公八年に「夏書曰、皋陶邁種徳（稱皋陶能勉種徳。邁、勉也）。」ここに引く『夏書』は、『尚書』大禹謨に同文が見えている。

阿に「鳳皇鳴矣、于彼高岡。梧桐生矣、于彼朝陽。」その鄭箋に「鳳皇之性、非梧桐不棲、非竹實不食。」

⑤匪禮弗過 類似表現として、『易』大壯卦の象伝に「雷在天上、大壯。君子以非禮不履。」「禮」字、底本以下諸本は「神」に作る。今、『晋書』樂志下、『樂府詩集』卷八に拠って改める。

⑧放勳 堯を指す。『經典釈文』尚書音義上・堯典に「馬（『尚書』馬融注）云放勳堯名。皇甫謐同。一云放勳堯字。」「放勳」は「放勳」に同じ。

⑥連理 別々の樹木が途中で合体して木目をひとつに合わせたもの。天下和合の瑞祥。『瑞應圖』（『藝文類聚』卷九八）に「王

⑨義蓋山河 同一句が、『三国志』呉書・呉主伝に引く、魏の文帝曹丕の孫権への策命文に見える。

歌康皇帝^①

康皇帝を歌う

（柳川順子）

康皇穆穆^② 仰嗣洪徳^③
爲而不宰^④ 雅音四塞^⑤
閑邪以誠^⑥ 鎮物以默^⑦

康皇は穆穆たり 仰ぎて洪徳を嗣ぐ
爲して宰らず 雅音 四に塞がる
邪を閑くに誠を以てし 物を鎮むるに黙を以てす

威靜區宇^⑧ 道宣邦國^⑨ 威は區宇を靜め 道は邦國に宣ぶ

康皇帝を歌う

康帝は優れて麗しく、大いなる徳を受け継がれた。

政を行うにも支配者ぶることはなく、皇帝の正しいことばは四方にゆきわたる。

誠の心をもって邪念を防ぎ、静黙を以て人民を鎮めた。

その威嚴は天下を靜め、その道は国家に行き渡る。

○押韻 「徳・塞・默・國」は入声²⁵「徳」。

①康皇帝 康帝（三四二〜三四四在位）は第八代皇帝司馬岳。明

帝の第二子、成帝の弟。『晋書』康帝紀。『晋書』樂志では「歌

康帝 曹毗」とある。

②穆穆 『毛詩』大雅・文王に「穆穆文王、於緝熙敬止（傳…穆

穆、美也）」。

③洪徳 『漢書』卷百下敘伝に「宣（漢宣帝）承其末、乃施洪徳、

震我威靈、五世來服」とある。『樂府詩集』卷八郊廟歌辭では

「洪徳」を「沃徳」に作る。

④爲而不宰 『老子』第十章に「生之畜之、生而不有、爲而不恃、

長而不宰、是謂玄徳。」『莊子』達生に「是謂爲而不恃、長而不宰」とある。

⑤雅音四塞 『宋書』樂志一に「魏文侯雖好古、然猶昏睡於古樂、

於是淫聲熾而雅音廢矣。」「雅音」は、文字通り優れた音楽を指

すとともに、前の句に示される作爲のない統治の表れとしての

音楽を意味するとも考えられるが、たとえば前の「歌頌宗成皇

帝」に「德音」、次の「歌孝宗穆皇帝」に「休音」、²⁶「歌哀皇帝」

に「徽音」とあり、他の皇帝の歌において曹毗は「音」を「音

楽」よりも「ことば」の意で用いることが多いことから、こゝに

では皇帝の正しいことばと解す。『論語』述而篇に「子所雅言、詩書執禮皆雅言也」、孔安国注に「雅言、正言也」とあり、ここの「雅音」は「雅言」に近い意か。

「四塞」は四方に充滿すること。『史記』司馬相如列伝に「旁魏四塞、雲專霧散。」「太平御覽」卷二二〇『晋書』に「又曰、王獻之爲中書令、啓瑯琊王爲中書監表曰、……中興以來、益重其任、故能王言彌徽、德音四塞。」

⑥閑邪以誠 『易』乾に「閑邪存其誠。」疏に「言防閑邪惡、當自存其誠實也」とある。『藝文類聚』卷七〇晋の蘇彦「榴榴枕銘」に、「禦心以道、閑邪以誠。色空無着、故能忘情。」

⑦鎮物以默 「鎮物」は、『晋書』謝安伝に「玄等既破壁、有驛書至、安方對客圍棋、看書既竟、便攝放床上、了無喜色、棋如故。客問之、徐答云、小兒輩遂已破賊。既罷、還内、過戸限、心喜甚、不覺履齒之折。其矯情鎮物如此」とある。

⑧區宇 『文選』卷一班固「西都賦」に「區宇若茲、不可殫論。」『文選』卷三張衡「東京賦」に「區宇又寧、思和求中。」注に「綜曰、天地之内稱寓。言海内既已又安、思求陰陽之和、天地之中而居之。良曰、天下又安、思陰陽和、求天地中。將都於此。」

⑨邦國 『毛詩』大雅・瞻卬に「人之云亡、邦國殄瘁。」

歌孝宗穆皇帝^①

孝宗穆皇帝を歌う

孝宗夙哲^② 休音允臧^③

孝宗は夙哲 休音 允に臧し

如彼晨離^④ 耀景扶桑^⑤

彼の晨離の 景を扶桑に耀かすが如し

垂訓華幄^⑥ 流潤八荒^⑦

訓を華幄に垂れ 潤を八荒に流す

幽贊玄妙^⑧ 爰該典章^⑨

幽く玄妙を贊かにし 爰に典章を該う

西平僭蜀^⑩ 北靜舊疆^⑪

西のかた僭蜀を平らげ 北のかた舊疆を靜む

高猷遠暘^⑫ 朝有遺芳^⑬

高猷 遠く暘べ 朝に遺芳有り

孝宗穆皇帝を歌う

孝宗はつとに明哲で、その優れたことばはまことに素晴らしい。まるで朝日が扶桑のもとに光輝くかのようなものである。

とばりの内で訓えを垂れ、遙か遠い地にまで恩沢を施された。

奥深い道理を深く明らかにされ、制度や規範をお備えになった。

西方においては叛ける蜀の地を平定し、北方においてはほとどの領地を鎮められた。

治国の大道は遠く行き渡り、朝廷にはその優れた遺業が残されている。

○押韻 「臧・桑・荒」は下平11「唐」、「章・疆・芳」は下平10「陽」。

①孝宗穆皇帝 穆帝(三四四〜三六一在位)は第九代皇帝司馬聃。

廟号は孝宗。『晋書』穆帝紀に「穆皇帝諱聃、字彭子、康帝子

也。建元二年九月丙申、立爲皇太子。戊戌、康帝崩。己亥、太

子即皇帝位、時年二歳。」「『晋書』樂志は「歌穆帝」に作る。

②夙哲 『毛詩』召南・行露に「豈不夙夜、謂行多露」、鄭箋に

「夙、早也。」

③休音允臧 『尚書』商書・太甲中に「王克終厥德、實萬世無疆

之休(傳:言王能終其德、乃天之顧佑商家、是商家萬世無窮之

美)。「爾雅」釈詁に「休、美也。」また陸雲「答兄平原」詩に

「令聞伊何、休音允臧。」「休音」は誉れの意ともとれるが、他

の皇帝の歌において曹毗は「く音」を「ことば」の意で用いて

いることから、ここでも優れたことばの意とする。「歌康皇帝」

の注⑤参照。『毛詩』邶風・定之方中に「卜云其吉、終焉允臧

(傳:允、信。臧、善也)。」

④晨離 「晨離」は朝日のこと。『毛詩』小雅・庭燎に「夜如何

其、夜鄉晨(鄭箋:晨、明也。……是朝之時也)。」また『文選』

卷二十五傳成「贈何劭王濟」詩に「雙鸞遊蘭渚、二離揚清暉」とあり、李善注に「鸞・離、喻王・何也。蘭渚、喻中書也。王逸楚辭序曰、虬龍鸞鳳以託君子。漢書曰、長麗前採光耀明。臣瓚曰、長離、靈鳥也。二離、日月也」とある。

⑤耀景扶桑 『樂府詩集』卷八郊廟歌辭は「耀」を「曜」に作る。

江淹「別賦」に「日出天而耀景、露下地而騰文」(『江文通文集』卷一)。「文選」卷十六では「曜景」に作り、呂向注に「曜景、曜光景也」とある。

『楚辭』九歌・東君に「噉將出兮東方、照吾檻兮扶桑」、王逸注に「日出、下浴於湯谷、上拂其扶桑、爰始而登、照曜四方。」

⑥垂訓華幄 『文選』卷四十七夏侯湛「東方朔面贊」に「傲世不可以垂訓也、故正諫以明節。」李善注に「家語、南宮叔曰、孔子作春秋、垂訓後嗣。班固漢書贊曰、朔正諫似直」とある。

『文選』卷二十四陸機「贈馮文熊遷斥丘令」詩に「居陪華幄、出從朱輪」。李善注に「應璩與趙叔潛書曰、入侍華幄、出典禁闈、張銑注に「居、謂常在朝之時。陪、侍太子。華幄、幄坐帳、朝羣臣也。太子出則乘朱輪車。」

⑦流潤八荒 『管子』宙合に「所賢美於聖人者、以其與變隨化也。」

淵泉而不盡、微約而流施。是以德之流潤澤均加于萬物。』(『文選』卷五十七潘岳「夏侯常侍誄」に「如彼隨和、發彩流潤。如彼錦纈、列素點綯。」李善注・淮南子曰、隨侯之珠、和氏之璧、得之而富、失之而貧。禮記、孔子曰、夫玉溫潤而澤仁也。』

『漢書』項籍伝贊に「昔賈生之過秦曰……有席卷天下、包舉宇內、囊括四海之意、并吞八荒之心(師古曰、八荒、八方荒忽極遠之地也)。」

⑧幽贊玄妙 『周易』説卦に「昔者聖人之作易也、幽贊於神明而生著」、晋の韓伯注に「幽、深也。贊、明也」とある。

『老子』第一章に「玄之又玄、窈妙之門。」『呂氏春秋』勿躬に「精通乎鬼神、深微玄妙、而莫見其形。」

⑨爰該典章 『春秋穀梁伝』哀公元年の經文に「鼷鼠食郊牛角、改卜牛。夏四月辛巳、郊」、伝に「此該之變而道之也」、晋の范甯注に「該、備也」とある。

⑩西平僭蜀 「僭」は、『公羊伝』昭公二十五年に「子家駒曰、諸侯僭於天子、大夫僭於諸侯久矣。昭公曰、吾何僭矣哉」、何休注に「失禮成俗不自知也」とある。

具体的には、永和三年(三四七)、桓温が成漢を滅ぼして蜀を

晉領としたことを指す。『晋書』穆帝紀に「(永和)三年春三月乙卯、桓温攻成都、克之。丁亥、李勢降、益州平。……夏四月、地震。蜀人鄧定、隗文學兵反、桓温又擊破之、使益州刺史周撫鎮彭模。」『晋書』李勢載記に「始、李特以惠帝太安元年起兵、至此六世、凡四十六年、以穆帝永和三年滅。」

⑪北靜舊疆 『文選』卷二十四曹植「贈白馬王彪」詩に、「謁帝承明廬、逝將歸舊疆〈善曰、……舊疆、鄆城也。時植雖封雍丘、仍居鄆城。翰曰、承明、門名。逝、往也。疆、謂王所處也〉。」

永和十二年(三五六)、桓温が洛陽の地を回復したことを指す。『晋書』穆帝紀に「(永和十二年)三月、姚襄入于許昌、以太尉桓温爲征討大都督以討之。秋八月己亥、桓温及姚襄戰于伊水、大敗之。襄走平陽、徙其餘衆三千餘家於江漢之間、執周成而歸。」

歌哀皇帝^⑩

於穆哀皇^⑫ 聖心虛遠^⑬
雅好玄古^⑭ 大庭是踐^⑮
道尚無爲^⑯ 治存易簡^⑰
化若風行^⑱ 民猶草偃^⑲

哀皇帝を歌う

於^あ穆^あたる哀皇 聖心虚遠なり
雅^{つね}に玄古を好み 大庭を是れ踐^ふむ
道は無爲を尚^{おぼ}び 治は易簡を存す
化は風の行くが若く 民は猶^たお草の偃^おるるがごとし

使揚武將軍毛穆之、督護陳午、輔國將軍、河南太守戴施鎮洛陽。」
⑫高猷遠暢 『尚書』周書・康誥に「願乃德、遠乃猷〈孔傳…願省汝德、無令有非。遠汝謀、思爲長久〉。」『毛詩』小雅・巧言に「秩秩大猷、聖人莫之〈毛傳…秩秩、進知也。莫、謀也〉。鄭箋…猷、道也。大道、治國之禮法。」

「暢」は「暢」の本字。『周易』坤に「君子黃中通理、正位居體。美在其中、而暢於四支、發於事業。美之至也。」また禰衡「鸚鵡賦」に「於是羨芳聲之遠暢、偉靈表之可嘉。」

⑬朝有遺芳 『楚辭』遠游に「誰可與玩斯遺芳兮、晨鄉風而舒情。」
葛洪『抱朴子』外篇・正郭に「林宗存爲一世之所式、沒則遺芳永播」とある。

雖曰登遐^㉑ 徽音彌闡^㉒ 登遐すと曰うと雖も 徽音 彌いよ闡かなり
愔愔雲韶^㉓ 盡美盡善^㉔ 愔愔たる雲韶 美を盡くし善を盡くす

哀皇帝を歌う

ああ優れた哀皇帝は、その御心は清虚で高遠。

つねに太古を好まれ、大庭の道を実践された。

道は無為をたつとび、治政はわかりやすく簡略なものであった。

教化は風が吹くかのごとくに行き渡り、その風になびく草のように民は従った。

崩御されても、その徳のあるお言葉の響きは、いよいよあきらかになるばかり。

なごやかに響く雲門・大韶の樂のように、この上なく美しく素晴らしい。

○押韻 「遠」は上声20 「阮」、「踐・闡・善」は上声28 「彌」、「簡」は上声26 「産」、「偃」は上声20 「阮」。

①哀皇帝 哀帝は第十代皇帝司馬丕（三六一〜三六五在位）。成 鄭箋に「命、猶道也。天之道、於乎美哉」とある。

帝の第一子。穆帝の従兄。『晋書』哀帝紀に「（興寧二年三月） ③聖心虚遠 『漢書』匡衡伝に「竊願陛下雖聖性得之、猶復加聖

辛未、帝不忿。帝雅好黄老、斷穀、餌長生藥、服食過多、遂中 心焉」、また『三国志』魏志・楊阜伝に「然今之小人、好説秦

毒、不識萬機、崇德太后復臨朝攝政。……（三年二月）丙申、 漢之奢靡、以邊聖心。」「虚遠」は、謝靈運「山居賦」〔宋書〕

帝崩於西堂。時年二十五。』『晋書』樂志は「歌哀帝」に作る。 謝靈運伝）に「暨其窈窕幽深、寂寞虚遠。事與情乖、理與形反。」

②於穆哀皇 『毛詩』周頌・維天之命に「維天之命、於穆不已」、 ④雅好玄古 『文選』卷二張衡「西京賦」に「雅好博古、學乎舊

史氏 是以多識前代之載」、薛綜注に「言公子雅性好博知古事
故學於舊史 舊史 太史掌圖典者也』『莊子』天地に「玄古
之君天下、無爲也、天德而已矣。」ここは哀帝が黄老を好んだ
ことを指すか。注①『晋書』哀帝紀参照。

⑤大庭是踐 大庭は上古の帝王の名。『莊子』胠篋に「子獨不知

至德之世乎。昔者容成氏、大庭氏、伯皇氏、中央氏、栗陸氏、
驪畜氏、軒轅氏、赫胥氏、尊盧氏、祝融氏、伏羲氏、神農氏、
郭象注に「此十二氏皆古帝王。」また『左伝』昭公十八年に「宋、
衛、陳、鄭皆火、梓慎登大庭氏之庫以望之」、杜預注に「大庭

氏、古國名、在魯城內、魯於其處作庫」、孔穎達疏に「大庭氏、
古天子之國名也。先儒舊說皆云炎帝號神農氏、一曰大庭氏。服
虔云、在黄帝前。鄭玄詩譜云、大庭在軒轅之前、亦以大庭爲炎
帝也」とあり、古の國名とする。また『礼記』曲礼上に「脩身
踐言、謂之善行」、鄭玄注に「踐、履也、言履而行之。」

⑥道尚無爲 『老子』第三十七章に「道常無爲而無不爲、侯王若
能守之、萬物將自化。」

⑦治存易簡 『周易』繫辭伝上に「易則易知、簡則易從、……易
簡而天下之理得矣」、晋の韓伯注に「天下之理、莫不由於易簡、

而各得順其分位也。」また『文選』卷二〇晋の庾貞「晋武帝華
林園集」詩に「游心至虛、同規易簡」、李善注に「周易曰、乾
以易知、坤以簡能、易則易知、簡則易從、簡易而天下之理得矣」、
呂延濟注に「謂游情太素之道、同法於簡易也」とある。

⑧化若風行 『文選』卷一六潘岳「閑居賦」に「訓若風行、應如

草靡」、李善注に「論語、孔子曰、君子之德風、小人之德草、
草上之風必偃」、呂向注に「襄此教訓、如風靡草。』『逸周書』
大明武に「陣若雲布、侵若風行。』『宋書』樂志二、曹毗「晋江
左宗廟歌十三篇・歌中宗元皇帝」に「化若風行、澤猶雨散。」

⑨民猶草偃 『尚書』周書・君陳に「爾其戒哉、爾惟風、下民惟

草（孔傳：汝戒、勿爲凡人之行。民從上教而變、猶草應風而偃、
不可不慎。）」また『論語』顔淵に「君子之德風、小人之德草、
草上之風、必偃。」葛洪「抱朴子」外篇・用刑に「明后御世、
風向草偃、道洽化醇。』『晋書』樂志は「民」を「時」に作る。

⑩雖曰登遐 『毛詩』大雅・下武に「三后在天、王配于京」とあ
り、毛伝に「三后、太王、王季、文王也。王、武王也」、鄭箋

に「此三后既沒、登遐、精氣在天矣。武王又能配行其道於京、
謂鎬京也。』『文選』卷三七劉琨「勸進表」に「永嘉之際、氛厲

彌昏、宸極失御、登遐醜裔、李善注に「禮曰、天王崩、告喪

曰天王登遐。」『爾雅』釈詁の郭璞注に「禮記曰、天王登遐。」

情愔琴德、不可測兮、李善注に「劉向雅琴賦曰、遊予心以廣
觀、且德樂之情愔。韓詩曰、情愔、和悅貌。聲類曰、和靜貌。」

① 徽音彌闡 『毛詩』大雅・思齊に「大姒嗣徽音、則百斯男、

「雲韶」は黄帝の「雲門樂」と舜の「大韶樂」。

鄭箋に「徽、美也。嗣大任之美音、謂續行其善教令。』『周易』

⑬ 盡美盡善 『論語』八佾に「子謂韶盡美矣、又盡善也（孔曰、

繫辭伝下に「夫易彰往而察來、而微顯闡幽（闡、明也）。」

韶、舜樂名。謂以聖德受禪、故盡善。謂武盡美矣、未盡善也

⑭ 情愔雲韶 『左伝』昭公十二年に「祈招之情愔、式昭德音、

（孔曰、武、武王樂也。以征伐取天下、故未盡善）」とあり、

杜預注に「情愔、安和貌。』『文選』卷三稭康「琴賦」に「亂曰、

武力を用いなかつたことをいう。

歌太宗簡文皇帝 王珣造 太宗簡文皇帝を歌う 王珣造る

皇矣簡文^① 於昭于天^②

皇なるかな簡文 於^{あゝ}天に昭らかなり

靈明若神^③ 周淡如淵^④

靈明なること神の若し 周淡なること淵の如し

沖應其來^⑤ 實與其遷^⑥

沖もて其の來るに應じ 實もて其の遷るに與^{くみ}す

媿媿心化^⑦ 日用不言^⑧

媿^ひ媿^ひとして心化し 日に用いて言わず

易而有親^⑨ 簡而可傳^⑩

易にして親有り 簡にして傳うべし

觀流彌遠^⑪ 求本愈玄^⑫

流れを觀るに彌^{いよ}いよ遠く 本を求むるに愈^{いよ}いよ玄なり

太宗簡文皇帝を歌う

王珣の作

大いなるかな簡文帝、ああ天に輝きたまう。

優れて聡明なことは神のごとく、何事にもこだわらず淡泊なさまは深く水をたたえる淵のよう。

沖によつて至るがままに応じ、実によつてその変化するがままにした。

どんどん心は変化して、日々道を用いながらもそのことを口にはされなかつた。

平易で親しみがあつた、簡約で人に伝わりやすかつた。

(簡文帝の) 流儀を觀ればいよいよ遠く、本質を求めればいよいよ奥深い。

○押韻 「天・淵・玄」は下平1 「先」、「遷・傳」は下平2 「仙」、「言」は上平22 「元」。

①太宗簡文皇帝 簡文帝は第十二代皇帝司馬昱(三七一〜三七二

在位)。廟号は太宗。元帝の末子。明帝の弟。『晋書』簡文帝紀

に「簡文皇帝諱昱、字道萬、元帝之少子也。幼而岐嶷、爲元帝

所愛。郭璞見而謂人曰、『興晉祚者、必此人也。』及長、清虛寡

欲、尤善玄言。……帝少有風儀、善容止、留心典籍、不以居處

爲意、凝塵滿席、湛如也。嘗與桓温及武陵王晞同載遊版橋、温

遽令鳴鼓吹角、車馳卒奔、欲觀其所爲。晞大恐、求下車、而帝

安然無懼色、温由此憚服。温既仗文武之任、屢建大功、加以廢

立、威振内外。帝雖處尊位、拱默守道而已、常懼廢黜。先是、

熒惑入太微、尋而海西廢。及帝登阼、熒惑又入太微、帝甚惡焉。

時中書郎郗超在直、帝乃引入、謂曰、『命之修短、本所不計、

故當無復前日事邪。』超曰、『大司馬臣温方内固社稷、外恢經略、

非常之事、臣以百口保之。』及超請急省其父、帝謂之曰、『致意

尊公、家國之事、遂至於此。由吾不能以道匡衛、愧歎之深、言

何能喻。』因詠庾闡詩云『志士痛朝危、忠臣哀主辱』、遂泣下霑

襟。帝雖神識恬暢、而無濟世大略、故謝安稱爲惠帝之流、清談

差勝耳。沙門支道林嘗言『會稽有遠體而無遠神。』謝靈運述其

行事、亦以爲赧獻之輩云。……史臣曰、……簡皇以虛白之姿、

在屯如之會、政由桓氏、祭則寡人」とある。なお、『晋書』樂

志は「歌簡文帝 王珣」に作る。

②王珣 『晋書』樂志下に、「太元中、破苻堅、又獲其樂工楊蜀

等、閑習舊樂、於是四廂金石始備焉。乃使曹毗、王珣等增造宗

廟歌詩、然郊祀遂不設樂。今列其詞於後云。『宋書』樂志一に「宋文帝元嘉九年、太樂令鍾宗之更調金石。十四年、治書令史奚縱又改之。語在律曆志。晉世曹毗、王珣等亦增造宗廟哥詩、然郊祀遂不設樂。」

王珣（二四九〜四〇〇）は王導の孫、王洽の子。『晋書』王導伝附伝王珣伝に「珣字元琳。弱冠與陳郡謝玄爲桓温掾、俱爲温所敬重、……時帝雅好典籍、珣與殷仲堪、徐邈、王恭、郗恢等並以才學文章見昵於帝。及王國寶自媚於會稽王道子、而與珣等不協、帝慮晏駕後怨隙必生、故出恭、恢爲方伯、而委珣端右。珣夢人以大筆如椽與之、既覺、語人云、此當有大手筆事。俄而帝崩、哀冊諡議、皆珣所草。」

本歌辭群は太元十六年（三九一）正月太廟を改築した際に作られた可能性がある。『晋江左宗廟歌十三篇・曹毗十一首其一』の注②参照。『晋書』孝武帝紀に「（太元）十六年春正月庚申、改築太廟。……秋九月癸未、以尚書右僕射王珣爲尚書左僕射、……新廟成。」同書安帝紀に「隆安元年春正月己亥朔、……以尚書左僕射王珣爲尚書令」とあり、孝武帝時、王珣は太廟改築に関わっており、安帝時には尚書令となっている。晋江左宗廟

歌十三篇のうちこの二首が王珣の作であるのは、この時点で曹毗が没していたためか。また、『宋書』礼志三には「孝武皇帝太元十六年、改作太廟。……諸主既入廟、設脯醢之奠。及新廟、帝主還室、又設脯醢之奠。十九年二月、追尊簡文母會稽太妃鄭氏爲簡文皇帝宣太后、立廟太廟道西。及孝武崩、京兆又遷、如穆帝之世四祧故事。安帝隆安四年、以孝武母簡文李太后、帝母宣德陳太后附于宣鄭太后之廟」とあり、安帝の時にも廟に関する議論があり、或いはこの時に制作された可能性もある。

③ 皇矣簡文 『毛詩』大雅・皇矣に「皇矣上帝、臨下有赫」、毛伝に「皇、大。」

④ 於昭于天 『毛詩』大雅・文王に「文王在上、於昭于天」、毛伝に「在上、在民上也。於、歎辭。昭、見也。」

⑤ 靈明 「靈明」はこの用例のみ。簡文帝の優れた才能については、注①『晋書』簡文帝紀を参照。

⑥ 周淡如淵 「周淡」はこの用例のみ。簡文帝の淡泊な様子について、注①『晋書』簡文帝紀を参照。「淵」は『晋書』樂志

では「川」に作るが、校勘記に「晉志作川、則唐人避諱改。」
⑦ 冲應其來 『老子』第四章に「道冲而用之或不盈。淵兮似萬物

之宗」また第四十五章に「大盈若沖、其用不窮」とあり、「沖」は空虚なこと、空の器を意味するが、ここでは「盈」あるいは次の句の「実」に対応して、あらゆるものを受け容れる心のありよう、体を表すと解する。なお、和刻本は「沖応じて其れ来たり、實與に其れ遷る」と訓む。

⑧ 實與其遷 「實」は充滿していること。ここでは先の「沖」に対して、現実的なもの、またそのありよう、用を表すと解する。『毛詩』小雅・節南山に「節彼南山、有實其猗」、毛伝に「實、滿。猗、長也。」この二句は、状況に応じて柔軟に対応し、何事も受け入れる人物であったことをいうか。

⑨ 媿媿心化 「媿媿」は『晋書』樂志は「臺臺」に作る。『毛詩』大雅・文王に「臺臺文王、令聞不已」、毛伝に「臺臺、勉也。」また『後漢書』張衡伝に「時臺臺而代序兮、疇可與乎比仇」、李賢注に「臺臺、進貌也。謂四時更進而代序。」ここでは後者の進む意を採る。「心化」は心が感化されること。『宋書』范曄伝に「吾少懶學問、晚成人、年三十許、政始有向耳。自爾以來、轉爲心化、推老將至者、亦當未已也。」

⑩ 日用不言 『周易』繫辭伝上に「仁者見之謂之仁、知者見之謂

之知。百姓日用而不知、故君子之道鮮矣」、注に「君子體道、以爲用也。仁知則滯於所見。百姓則日用而不知。體斯道者、不亦鮮矣」、疏に「言萬方百姓、恒日日賴用此道而得生、而不知道之功力也。」

⑪ 易而有親 『周易』繫辭伝上に「易則易知、簡則易從、……易簡而天下之理得矣。」

⑫ 簡而可傳 『礼記』檀弓上に「夫禮、爲可傳也、爲可繼也、故哭踊有節。」

⑬ 觀流彌遠 『大戴礼記』曾子立事に「故曰、聽其言也、可以知其所好矣。觀說之流、可以知其術也」、盧辯注に「流、謂部分。術、謂心術」とあり、「流」はここでは流儀の意として簡文帝の人柄をいうものと解する。『毛詩』大雅・公劉に「相其陰陽、觀其流泉、其軍三單、度其隰原」、鄭箋に「觀相其陰陽寒燠所宜、流泉浸潤所及、皆爲利民富國」とあり、周族の祖先である公劉が山川の様子を観ることができたということから、「流」は世の流れ、様相の可能性もあるか。なお『二十四史全訳』では、「流」は簡文帝の「源流」、「本」は「本末」とする。

『彌遠』は『論語』子罕および『史記』孔子世家に「顔淵喟然

歎曰、仰之彌高、鑽之彌堅」、また『老子』第四十七章に「其出彌遠、其知彌少。是以聖人不行而知、不見而名、不爲而成。」
⑭ 求本愈玄 「愈」は『晋書』樂志は「逾」に作る。

歌烈宗孝武皇帝 王珣造 烈宗孝武皇帝を歌う 王珣造る

天鑑有晉^⑩ 欽哉烈宗^⑪ 天 有晉を鑑す 欽なる哉 烈宗

同規文考^⑫ 玄默允龔^⑬ 規を文考に同じくし 玄默にして允に龔たり

威而不猛^⑭ 約而能通^⑮ 威ありて猛ならず 約にして能く通ず

神鉦一震^⑯ 九域來同^⑰ 神鉦一たび震わば 九域來同す

道積淮海^⑱ 雅頌自東^⑲ 道は淮海に積み 雅頌は東自りす

氣陶淳露^⑳ 化協時雍^㉑ 氣は陶し淳露あり 化は協い時に雍ぐ

烈宗孝武皇帝を歌う

王珣の作

天の監視する晋朝には、つつましい烈宗がおわした。

亡き父君に見習つて、沈黙を守り、まことに慎み深かった。

威厳はあるが猛々しくはなく、簡約ではあるが本質に通曉しておられた。

ひとたび神々しい鉦が鳴れば、全国から集結した。

淮南の地に道徳を積まれ、雅頌の音色は東の地から響いた。

皇帝の気が広がり、あつき恩沢が施され、教化はほどよく調和して、安定した世となった。

○押韻 「宗」は上平2 「冬」、「龔・雍」は上平3 「鍾」、「通・同・東」は上平1 「東」。

①烈宗孝武皇帝 孝武帝は第十三代皇帝司馬曜（三七二〜三九六

在位）。廟号は烈宗。『晋書』孝武帝紀に「孝武皇帝諱曜、字昌

明、簡文帝第三子也。……帝幼稱聰悟。簡文之崩也、時年十歲、

至晡不臨、左右進諫、答曰、哀至則哭、何常之有。謝安嘗嘆以

爲精理不減先帝。既威權已出、雅有人主之量。既而溺于酒色、

殆爲長夜之飲。』『晋書』樂志は「歌孝武帝 王珣」に作る。

②天鑑有晋 『毛詩』大雅・大明に「天監在下、有命既集。文王

初載、天作之合。在洽之陽、在渭之涘、鄭箋に「天監視善惡

於下、其命將有所依就、則豫福助之。於文王生適有所識、則爲

之生配於氣勢之處、使必有賢才。謂生大妣。』

『宋書』樂志二、傅玄「晉郊祀歌五篇・祠天地五郊夕牲歌」に

「天命有晉、穆穆明明。」

③欽哉烈宗 『尚書』堯典に「釐降二女于媯汭、嬪于虞。帝曰、

欽哉（歎舜能脩已行敬以安人、則其所能者大矣）。』

④同規文考 『文選』卷三張衡「東京賦」に「是以論其遷邑易京、

則同規乎殷盤。改奢即儉、則合美乎斯干（薛綜注：規、法也）。』

「文考」は亡父のこと。『尚書』泰誓下に「嗚呼、惟我文考、

若日月之照臨、光于四方、顯于西土（稱父以感衆也。言其明德

充塞四方、明著岐周）。……予克受、非予武、惟朕文考無罪（推

功於父、言文王無罪於天下、故天佑之、人盡其用）。』

⑤玄默允龔 『淮南子』主術訓に「君人之道、其猶零星之尸也、

儼然玄默、而吉祥受福」、漢の高誘注に「尸不言語、故曰玄默。』

また『文選』卷九揚雄「長楊賦」に「且人君以玄默爲神、澹泊

爲德」、李善注に「玄默、謂幽玄恬默也」、李周翰注に「玄默、

無事也」とあり、「玄默」はしずかに沈黙を守るだけでなく、

何もしなかったことまで含む謂いか。

『晋書』樂志は「龔」を「恭」に作る。「龔」は「恭」に同じ。

『尚書』堯典に「欽明文思安安、允恭克讓、光被四表、格于上

下。』『宋書』樂志二「晋江左宗廟歌十三篇」其四、曹毗「歌世

祖武皇帝」に「於穆武皇、允龔欽明」とある。

⑥威而不猛 『論語』述而に「子溫而厲、威而不猛、恭而安」、

また堯曰に「子張曰、何謂五美。子曰、君子惠而不費、勞而不

怨、欲而不貪、泰而不驕、威而不猛。」

⑦約而能通 『晋書』王湛伝附伝王承伝に、「承字安期。清虛寡

欲、無所修尚。言理辯物、但明其指要而不飾文辭、有識者服其約而能通。」前の一首に見える「簡而可傳」（簡約で人に伝わり

やすい）と同じような意である可能性もあるか。

⑧神鉦一震 『文選』卷六左思「魏都賦」に「神鉦迢遞於高巒、

靈響時驚於四表」、劉逵注に「劉邵趙都賦曰、神鉦發聲。俗云、石鼓鳴、則天下有兵革之事。」

⑨九域來同 『漢書』律曆志下に「祭典曰、共工氏伯九域。」『文

選』卷三五潘勗「冊魏公九錫文」に「綏爰九域、罔不率俾」、李善注に「薛君曰、九域、九州也」、呂向注に「九域、天下也。」

『毛詩』魯頌・閟宮に「至於海邦、淮夷來同（鄭箋…來同爲同盟也）」、『文選』卷四九干寶「晋紀總論」に「役不二時、江

湘來同」、李善注「毛詩曰、淮夷來同也」、呂向注に「來同、謂並歸晉。」この二句は淝水の戦い（三八三）で前秦の苻堅に勝

利したことをいうか。

⑩道積淮海 『尚書』商書・説命下に「允懷于茲、道積于厥躬」、

孔伝に「信懷此學志、則道積於其身。」また『文選』卷二九張

協「雜詩十首」其三に「高尚遣王侯、道積自成基」、李善注に

「周易曰、不事王侯、高尚其事。文字曰、積道德者、天與之、地助之。莊子曰、無爲無治、謂之道基」、呂向注に「基、本也。

高尚不仕、離去王侯、道積於身、自成基本也。」

「淮海」は淮水・海岸の地域。淮南一帯の南朝を指す。『尚書』

夏書・禹貢に「淮海惟揚州」、伝に「北據淮、南距海。」また『文

選』卷一〇潘岳「西征賦」に「浸決鄭白之渠、漕引淮海之粟」、李善注に「西都賦曰、通溝大漕、控引淮河、與海通波也。」

『晋書』簡文帝紀に「（太元八年）八月、苻堅帥衆渡淮、遣征討都督謝石、冠軍將軍謝玄、輔國將軍謝琰、西中郎將桓伊等距之。……（冬十月）乙亥、諸將及苻堅戰于肥水、大破之。」

⑪雅頌自東 『礼記』樂記に「故聽其雅頌之聲、志意得廣焉」、孔穎達疏に「雅以施正道、頌以贊成功、若聽其聲、則淫邪不入、

故志意得廣焉。』『漢書』董仲舒伝に「教化之情不得、雅頌之樂不成。故王者功成作樂、樂其德也。」武力によるだけでなく、

道に則った戦勝を称えるために雅頌を歌ったことをいうか。

⑫氣陶淳露 『文選』卷三四枚乘「七発」に「陶陽氣、蕩春心」、

李善注に「薛君韓詩章句曰、陶、暢也。陽氣、春也」、張銑注

に「陶、暢也。蕩、動也。」「藝文類聚」卷六五晋の楊泉「蚕賦」

⑬化協時雍 『尚書』虞書・堯典に「百姓昭明、協和萬邦、黎民

に「惟陰陽之產物、氣陶化而播流、物受氣而含生。」また『藝

於變時雍」、孔伝に「昭、亦明也。協、合。黎、衆。衆、時、是。

文類聚」卷九〇宋孝武帝「在藩上白雉表」に「陶氣仁風、練色

雍、和也。言天下衆民皆變化從上、是以風俗大和。」また『漢

淳露。』『晋書』樂志は「淳」を「醇」に作る。

書』刑法志に「順稽古之制、成時雍之化。」

四時祠祀歌^① 曹毗造

四時祠祀歌 曹毗造る

肅肅清廟^③ 巍巍聖功^④

肅肅たる清廟 巍巍たる聖功

萬國來賓^⑤ 禮儀有容^⑥

萬國の來賓 禮儀に容るる有り

鍾鼓振^⑦ 金石熙^⑧

鍾鼓振るい 金石熙^{あき}らかなり

宣兆祚^⑨ 武開基^⑩

宣は祚^{はじ}を兆め 武は基を開く

神斯樂兮

神は斯に樂しめり

理管絃^⑪ 有來斯和^⑫

管絃を理^{ととの}うれば、來る有りて斯に和す

說功德^⑬ 吐清歌^⑭

功德を説き 清歌を吐く

神斯樂兮

神は斯に樂しめり

洋洋玄化^⑮ 潤被九壤^⑯

洋洋たる玄化 潤は九壤を被う

民無不悅 道無不往

民は悦ばざる無く 道は往かざる無し

禮有儀^⑰ 樂有式^⑱

禮に儀有り 樂に式有り

詠九功^⑲ 永無極

九功を詠じて 永く極まる無し

神斯樂兮

神は斯に樂しめり

四時祀歌 曹毗の作

嚴肅なる太廟、偉大なる功績。

万国の來賓が集い、客人たちは礼儀にかなった優れた姿。

鐘鼓が鳴り響き、金石の樂が盛んに演奏される。

宣帝は晋朝を創始し、武帝は国の基礎を打ちたてられた。

神は樂しんでおられることよ。

管弦の樂を調和させて奏でると、參集した者たちは和諧する。

功業や徳行を説き、清らかな歌を唱う。

神は樂しんでおられることよ。

盛んなる奥深い教化により、恩沢は九州を覆う。

民は悦ばぬ者はおらず、道は行き渡らぬことはない。

礼には規範があり、樂には法則がある。

文徳にもとづく九功を詠じて、永く極まりない。

神は樂しんでおられることよ。

○押韻 「功」は上平1 「東」、「容」は上平3 「鍾」。「熙・基」は上平7 「之」。「和」は下平8 「戈」、「歌」は下平7 「歌」。「壤・

往」は上声36「養」。『式・極』は入声24「職」。

①四時祠祀歌 『晋書』樂志に「四時祠祀 曹毗」とある。

②曹毗 『晋書』文苑伝曹毗伝に「曹毗、字輔佐、譙國人也。高

祖休、魏大司馬。父讖、右軍將軍。毗少好文籍、善屬詞賦。」

世説新語』文學篇に「孫興公道曹輔佐才如白地明光錦、裁為負版

綺、非無文采、酷無裁製。」

『晋江左宗廟歌十三篇・曹毗十一首
其一』の注②参照。

③肅肅清廟 『毛詩』小雅・黍苗に「肅肅謝功、召伯營之、鄭

箋に「肅肅、嚴正之貌。」

『毛詩』周頌・清廟に「於穆清廟、肅雝顯相」、毛伝に「於、歎

辭也。穆、美。肅、敬。雝、和。相、助也」、鄭箋に「顯、光

也。見也。於乎美哉、周公之祭清廟也。」

『文選』卷八司馬相如

「上林賦」に「登明堂、坐清廟」、李善注に「郭璞曰、明堂者、

所以朝諸侯處。清廟、太廟也。」

④巍巍聖功 『論語』泰伯に「巍巍乎。舜禹之有天下也而不與焉」、

何晏集解に「巍巍、高大之稱。」

『周易』蒙・彖に「蒙以養正、聖功也」、疏に「蒙以養正、聖

功也者、能以蒙昧隱默自養正道、乃成至聖之功。」

⑤萬國來賓 『礼記』月令に「季秋之月」鴻雁來賓」、鄭注に「來

賓、言其客止未去也。」

⑥禮儀有容 『毛詩』周頌・振鷺に「振鷺于飛、于彼西雝。我客

戾止、亦有斯容」、鄭箋に「白鳥集于西雝之澤。言所集得其處

也。興者、喻杞宋之君有潔白之德、來助祭於周之廟、得禮之宜

也。其至止亦有此容、言威儀之善如驚然。」

『宋書』樂志二、傅玄「晋宗廟歌十一篇・祠廟饗神歌二篇」

其二に「四海來格、禮儀有容。」

⑦鍾鼓振 『宋書』樂志二、傅玄「晋宗廟歌十一篇・祠廟饗神歌

二篇」其二に「管絃理、鐘鼓振。」

⑧金石熙 『国語』楚語上に「而以金石匏竹之昌大、晉庶爲樂」、

韋昭注に「金、鍾也。石、磬也。匏、笙也。竹、簫管也。昌、

盛也。馨、謹也。庶、衆也。」

『尚書』堯典に「允釐百工、庶績

成熙（孔傳：熙、廣也）」

⑨宣兆祚 『左傳』哀公元年に「（少康）有田一

成、有衆一旅、能布其德、而兆其謀」、杜預注に「兆、始。」

『史記』秦楚之際月表に「平定海内、卒踐帝祚、成於漢家。」

⑩武開基 武は武帝司馬炎。『漢書』魏相丙吉伝贊に「近觀漢相、

高祖開基、蕭曹爲冠、孝宣中興、丙魏有聲。」

⑪理管絃 『宋書』樂志二、傅玄「晋宗廟歌十一篇・祠廟饗神歌

二篇」其二に「理管絃、振鐘鼓。」「史記」樂書に「雅頌之音理而民正、鳴噉之聲興而士奮、鄭衛之曲動而心淫。」

⑫有來斯和 『毛詩』周頌・離「有來離離、至止肅肅。相維辟公、

天子穆穆」、鄭箋に「離離、和也。肅肅、敬也。有是來時離離然、既至止而肅肅然者、乃助王禘祭、百辟與諸侯也。天子是時、則穆穆然、於進大牲之牲、百辟與諸侯又助我陳祭祀之饌、言得天下之歡心。」「宋書」后妃列伝に「詔前永嘉太守顏延之爲哀策、文甚麗。其辭曰、……有來斯雍、無思不極。」

『樂府詩集』卷八郊廟歌辭では「和」を「一作格」とする。

⑬說効德 『礼記』王制に「有功德於民者、加地進律。」

⑭吐清歌 『文選』卷二三劉楨「贈五官中郎將四首」其一に「清

歌製妙聲、萬舞在中堂。」

⑮洋洋玄化 『礼記』中庸に「大哉聖人之道、洋洋乎發育萬物、

峻極于天」、孔穎達疏に「洋洋、謂道德充滿之貌。」

『文選』卷六左思「魏都賦」に「玄化所甄、國風所稟」、李善

注に「蔡雍陳留太守頌曰、玄化洽矣、黔首用寧」、張銑注に「玄、聖。甄、成也。言皆聖化所成。」「宋書」樂志四では韋昭「吳鼓

吹十二曲」其十二「玄化」について、「玄化者、言上修文訓武、

則天而行、仁澤流洽、天下喜樂也」とする。陸雲「祖考頌」に「駿惠雨施、景潤雲行。洋洋玄化、功濟其民。」

⑯潤被九壤 『淮南子』秦族訓に「堯治天下、政教平、德潤洽。」

『文選』卷一九束皙「補亡詩六首」其五に「恢恢大園、茫茫九壤」、李善注に「九壤、九州也。」

⑰禮有儀 『毛詩』小雅・菁菁者莪に「既見君子、樂且有儀、

鄭箋に「既見君子者、官爵之而得見也。見則心既喜樂、又以禮儀見接」とある。『宋書』樂志二、傅玄「晋宗廟歌十一篇・祠

廟饗神歌二篇」其二に「禮有儀、樂有則。」

⑱樂有式 『尚書』微子之命に「世世享德、萬邦作式」、孔伝に

「言微子累世享德、不忝厥祖、雖同公侯而特爲萬國法式。」また『藝文類聚』卷七四後漢の辺詔「塞賦」に「本其規模、制作

有式、四道交正、時之則也」とある。

⑲詠九功 「九功」は文徳により治まる六府三事。『尚書』大禹

謨に「禹曰、於帝念哉、德惟善政、政在養民。水・火・金・木

・土・穀、惟修（言養民之本、在先修六府）、正徳・利用・厚生、惟和（正徳以率下、利用以阜財、厚生以養民。三者和、所謂善政）、九功惟叙、九叙惟歌（言六府三事之功有次叙、皆可歌樂、乃徳政之致。）『左伝』文公七年に「九功之徳、皆可歌生、惟和（正徳以率下、利用以阜財、厚生以養民。三者和、所謂善政）、九功惟叙、九叙惟歌（言六府三事之功有次叙、皆可謂善政）」。 穀、謂之六府。正徳・利用・厚生、謂之三事。」

（林 香奈）

宋宗廟登歌八篇 王韶之造 宋の宗廟登歌八篇 王韶之造る

綿綿遐緒^③ 昭明載融^④ 綿綿たる遐緒 昭明にして載ち融らかなり

漢徳未遠^⑤ 堯有遺風^⑥ 漢徳未だ遠からず 堯に遺風有り

於穆皇祖^⑦ 永世克隆^⑧ 於あ穆たる皇祖 永世克く隆くす

本枝惟慶^⑨ 貽厥靡窮^⑩ 本枝惟れ慶ぶ 厥の窮まる靡きを貽す

右祠北平府君登歌^⑪ 右は北平府君を祠る登歌

宋の宗廟登歌八篇 王韶之の作

絶えることなくはるかにつづく事績は、明らかで輝くばかり。

劉氏の漢の徳はまだ遠い昔のことではなく、劉氏の始祖堯帝が遺された伝統もある。

ああ素晴らしき先祖よ、永遠に徳を隆くされた。

われわれ子孫は本家も分家もみな喜ぶ、極まり尽きることがない幸いを遺してください。

右は北平府君（劉膺）をまつる登歌。

○押韻 「融・風・隆・窮」は上平1「東」。

①宋宗廟登歌 皇帝とその祖先を神として、みたまやで祭る際のコーラス。王韶之が宋の宗廟の歌辞を作ったことは、『宋書』樂志一に「宋武帝永初元（四二〇）年七月、有司奏「皇朝肇建、廟祀應設雅樂、太常鄭鮮之等八十八人各撰立新哥。黃門侍郎王韶之所撰哥辭七首、竝合施用。」韶可」と見える。また、七廟の設けられた経緯については、『宋書』礼志三に「宋武帝初受晉命爲宋王、建宗廟於彭城、依魏・晉故事、立一廟。初祠高祖開封府君・曾祖武原府君・皇祖東安府君・皇考處士府君・武敬臧后、從諸侯五廟之禮也。既卽尊位、乃增祠七世右北平府君・六世相國掾府君爲七廟。永初（四二〇—四二二）初、追尊皇考處士爲孝穆皇帝、皇妣趙氏爲穆皇后。三年、孝懿蕭皇后崩、又附廟。高祖（劉裕）崩、神主升廟、猶從昭穆之序、如魏・晉之制、虛太祖（南朝宋の太祖文皇帝（劉義隆、在位…四二四—四五三）之位也。廟殿亦不改構、又如晉初之因魏也。文帝元嘉（四二四—四五三）初、追尊所生胡婕妤爲章皇太后、立廟西晉宣太后地。孝武昭太后・明帝宣太后竝祔章太后廟。」

②王韶之 三八〇—四三五。『宋書』王韶之伝に「王韶之字休泰、琅邪臨沂人也。…（元嘉）十二年、又出爲吳興太守。其年卒、時年五十六。七廟歌辭、韶之制也。文集行於世。」

③遐緒 久遠なる功業。『晋書』潘尼伝に「釋奠頌」が引かれ、「祚以大寶、登以龍飛、宣基誕命、景熙遐緒。」

④融 非常に明るい。『春秋左氏伝』昭公五年に「明夷之謙、明而未融、其當且乎、故曰爲子祀。」杜預注に「融、朗也。」

⑤漢德未遠 『宋書』武帝紀上に「高祖武皇帝諱裕、字德輿、小名寄奴、彭城縣綏里人、漢高帝弟楚元王交之後也。」

⑥堯有遺風 漢は堯帝の流れとされた。『史記』高祖本紀に高祖劉邦が大蛇を斬る話がある。斬られた大蛇を我が子だという老婆の言葉に「吾、白帝子也、化爲蛇、當道、今爲赤帝子斬之、故哭。」と見え、集解が引く応劭の注に「秦襄公自以居西戎、主少昊之神、作西時、祠白帝。至獻公時櫟陽雨金、以爲瑞、又作畦畦、祠白帝。少昊、金德也。赤帝堯後、謂漢也。殺之者、明漢當滅秦也。秦自謂水、漢初自謂土、皆失之。至光武乃改定。」

⑦於穆皇祖 「於穆」は賛美する言葉。『毛詩』周頌・維天之命に「維天之命、於穆不已。」

⑧永世克隆 子々孫々にわたつて徳を隆くした。『毛詩』周頌・閔予小子に「於乎皇考、永世克孝。」

⑨本枝 一族の本家と分家の子孫。本文。『毛詩』大雅・文王に「文王孫子、本支百世」、毛伝に「本、本宗也。支、支子也。」

⑩貽厥靡窮 「貽」はこのこす。『尚書』五子之歌に「其四曰、明我祖、萬邦之君。有典有則、貽厥子孫」、孔伝に「君萬國爲天子。典謂經籍、則、法、貽、遺也。言仁及後世。」「靡窮」は極まることがない。『毛詩』邶風・泉水に「有懷於衛、靡日不思」、鄭箋に「靡、無也。」

⑪北平府君 「北平」は右北平郡を指す。注①前掲『宋書』礼志

乃立清廟^① 清廟肅肅^②

乃ち清廟を立つれば 清廟は肅肅たり

乃備禮容^③ 禮容穆穆^④

乃ち禮容を備うれば 禮容は穆穆たり

顯允皇祖^⑤ 昭是嗣服^⑥

顯允なる皇祖 昭らかに是れ服を嗣ぐ

錫茲繁祉^⑦ 聿懷多福^⑧

茲の繁祉を錫り 聿に多福を懷う

右祠相國掾府君登歌

右は相國掾府君を祠る登歌

三に「乃增祠七世右北平府君。」『漢書』地理志下に「右北平郡、秦置。莽曰北順。屬幽州。」戸六萬六千六百八十九、口三十二萬七千八百八十。『晋書』地理志上・幽州に「及秦滅燕、以爲漁陽・上谷・右北平・遼西・遼東五郡。漢高祖分上谷置涿郡。武帝置十三州、幽州依舊名不改。……幽州所部凡九郡、至晉不改。」

『宋書』武帝紀上に劉裕に到る劉家の系譜が記されている。本歌辭に關わるものとして、「亮生晉北平太守膺、膺生相國掾熙、熙生開封令旭孫。旭孫生混、始過江、居晉陵郡丹徒縣之京口里、官至武原令。混生東安太守靖、靖生郡功曹翹、是爲皇考。高祖以晉哀帝興寧元年歲次癸亥三月壬寅夜生。」「府君」は郡相・太守の尊稱。

太廟を立てれば、太廟は莊嚴である。

礼に適ったかたちを備えれば、礼に適ったかたちは壯麗である。

英明にして真心があるわがご先祖は、明らかに先人の事績を継承された。

かくも多くの幸いをもたらしてくださり、これからもずっとわれわれの多幸を思っておられる。

右は相国掾府君（劉熙）をまつる登歌。

○押韻「肅・穆・服・福」は入声1「屋」。

①清廟 古代帝王の宗廟。『毛詩』周頌・清廟に「於穆清廟、肅

離顯相」、毛伝に「於、歎辭也。穆、美。肅、敬。離、和。相、

助也。』『宋書』樂志二・曹毗「四時祠祀歌」に「肅肅清廟、巍

巍聖功。萬國來賓、禮儀有容。」

②肅肅 嚴正なさま。『毛詩』小雅・黍苗に「肅肅謝功、召伯嘗

之」、鄭箋に「肅肅、嚴正之貌。」

③禮容 礼に則ったしつらえ。『史記』孔子世家に「孔子爲兒嬉

戲、常陳俎豆、設禮容。』『宋書』樂志二・宋南郊雅樂登歌三篇

・顏延之に「天地饗神歌」「具陳器、備禮容。」

④穆穆 立ち居振る舞いが立派で整っているさま。『毛詩』大雅

・文王に「穆穆文王、於緝熙敬止」、毛伝に「穆穆、美也。緝熙、光明也」、鄭箋に「穆穆乎文王、有天子之容。於美乎。又

能敬其光明之德。堅固哉。」

⑤顯允 英明で真心があること。『毛詩』小雅・采芣に「顯允方

叔、征伐玁狁、蠻荆來威。』『漢書』韋賢伝附子玄成にこの詩が

引かれ、顏師古注に「顯、明。允、信。」

⑥嗣服 先人の事績を継承すること。『毛詩』大雅・下武に「永

言孝思、昭哉嗣服」、鄭箋に「服、事也。明哉、武王之嗣行祖

考之事。謂伐紂定天下。」

⑦錫茲繁祉 「錫」は、賜うこと。『毛詩』周頌・烈文に「烈文

辟公、錫茲祉福」、毛伝に「烈、光也。文王錫之」、鄭箋に「…

…光文百辟卿士及天下諸侯者、天錫之以此祉福也。」「繁社」は、

福が多いこと。『毛詩』周頌・離に「綏我眉壽、介以繁社」、鄭

箋に「繁、多也。』

⑧ 聿懷多福 多福であるようにと述べ思う。『毛詩』大雅・大明

に「維此文王、小心翼翼、昭事上帝、聿懷多福」、鄭箋に「小

心翼翼、恭慎貌。昭、明。聿、述。懷、思也。」「聿」は本来助

四縣既序 簫管既舉②

堂獻六瑚③ 庭萬八羽④

先王有典⑤ 克禋皇祖

不顯洪烈⑥ 永介休祐⑦

右祠開封府君登歌

右は開封府君を祠る登歌

字であったが、後になると厚く思う意に用いられるようになる。

『文選』卷四人・班固「典引」に「蓋用昭明夤畏、承聿懷之福。」

ここでは「懷」の主語を祀られている劉熙であるとし、神とな

った劉熙がわれわれに対してこのように思ってくださいとい

る、という方向で解釈した。

⑨ 相國掾府君 劉熙のこと。相国の掾（属官）であった。『宋書』

武帝紀上に「膺生相國掾熙、熙生開封令旭孫。」

四縣は既に序でられ 簫管は既に擧げらる

堂に六瑚を獻じ 庭に八羽を萬す

先王に典有り 克く皇祖を禋る

顯らかならざらんや洪烈 永えに休祐を介いにす

右は開封府君を祠る登歌

鍾磬はすでに四面に設けられ、簫管はすでに演奏されている。

廟堂には黍稷が盛られた殷の六瑚が獻ぜられ、廟前の庭では八佾の舞がさかんに舞われている。

古の聖君主には定められた制度があつて、それに則つてご先祖の御霊をお祀りできる。

何とも明らかではないか、大いなる功業は。永遠にわれわれ子孫の幸福を大いにしてください。

右は開封府君（劉旭孫）をまつる登歌。

○押韻 「序・舉」は上声8 「語」、「羽」は上声9 「麋」、「祖・祐」は上声10 「姥」。

①四縣既序 「四縣」は金石でつくられた鍾磬等の樂器。懸けて用いた。身分によつて数が異なり、天子は四面に設けた。『漢書』礼樂志に「高張四縣、樂充宮廷」、顏師古注に「晉灼曰、四縣、樂四縣也。天子宮縣、謂設宮縣而高張之。縣、古懸字。」

「序」は順序立てること。

②簫管既舉 「簫管」は管樂器。笛。「舉」は演奏する。『毛詩』周頌・有聲に「既備乃奏、簫管備舉。嗶嗶厥聲、肅雝和鳴、先祖是聽」、鄭箋に「既備者、懸也。曠也。皆畢已也。乃奏、謂樂作也。簫、編小竹管、如今賣錫者所吹也。管如篪、併而吹之。」

③堂獻六瑚 「瑚」は祭祀のときなどに黍稷を盛る器。『礼記』明堂位に「有虞氏之兩敦、夏后氏之四連、殷之六瑚、周之八簋。」鄭注に「皆黍稷器、制之異同、未聞。」「宋書」樂志二・宋明堂

歌・謝莊「登歌詞」に「六瑚貢室、八羽華庭。」

④庭萬八羽 「萬」は舞の名。またその舞を舞うこと。中華書局本は「舞」に作る。『毛詩』邶風・簡兮に「簡兮簡兮、方將萬

舞」、毛伝に「簡、大也。方、四方也。將、行也。以千羽爲萬

舞、用之宗廟山川。故言於四方。」「八羽」は八佾。八佾とも。

古代の天子が用いた樂舞。縱横八人、計六十四人で舞う。『論語』八佾に「孔子謂季氏、八佾舞於庭、是可忍也、孰不可忍也。」

⑤先王有典 聖君主に定められた正しい制度があること。『尚書』夏書・五子之歌に「其四曰、明明我祖、萬邦之君。有典有則、貽厥子孫。」

⑥克禋 「禋」は敬いながら祀ること。『毛詩』大雅・生民に「生民如何。克禋克祀、以弗無子」、毛伝に「禋、敬。弗、去也。」

⑦不顯洪烈 「不」字を中華書局本は「丕」に作る。「不顯」は至つて明らかであること。『毛詩』大雅・文王に「有周不顯、

帝命不時」、毛伝に「有周、周也。不顯、顯也。顯、光也。」「洪烈」は偉大な功業。『漢書』翟方進伝に「此乃皇天上帝所以安

我帝室、俾我成就洪烈也。」

⑧永介休祐 「介」は大いにする。『毛詩』周頌・維に「綏我眉

壽、介以繁社」、鄭箋に「繁、多也。文王之德、……又能昌大

郡に「河南郡、故秦三川郡、高帝更名。……縣二十二。雒陽・

其子孫、安助之以考壽與多福祿。」「休祐」は大いなる幸い。祐

……開封……。「晋書」地理志上・司州・滎陽郡に「滎陽郡

休。『漢書』礼楽志・郊祀歌「練時日」に「垂惠恩、鴻祐休」、

〈泰始二年置。統縣八、戶三萬四千〉、滎陽・京・密・卷・陽

顔師古注に「鴻、大也。祐、福也。休、美也。祐音佑。」

武・苑陵・中牟・開封。』『宋書』州郡志二・司州に「滎陽領京

⑨開封府君 劉旭孫のこと。開封令となつた。『宋書』武帝紀上

・密・滎陽・卷・陽武・苑陵・中牟・開封・成臯凡九縣。」

に「膺生相國掾熙、熙生開封令旭孫。」「漢書」地理志上・河南

鐘鼓皞皞^① 威儀將將^②

鐘鼓皞皞たり 威儀將將たり

溫恭禮樂^③ 敬享會皇^④

溫恭なる禮樂 會皇を敬享す

邁德^⑤垂仁^⑥ 係軌重光^⑦

德に邁^{つと}め仁を垂れ 軌を係^ついで光を重ぬ

天命純嘏^⑧ 惠我無疆^⑧

天は純嘏を命じ 我に無疆を惠む

右祠武原府君登歌

右は武原府君を祠る登歌

鐘や鼓の音楽は調和し、参列する人々の所作は整然としている。

温和で慎み深いこの礼楽で、曾祖父劉混様を敬いお祀りする。

(會皇は) 德行に努め仁愛を施し、正しい道を継承して先祖の徳と並び輝いた。

天は大いなる福を命ぜられ、それはわれわれ子孫にも限りなく与えられる。

右は武原府君(劉混)をまつる登歌。

○押韻 「喞・皇・光」は下平11「唐」、 「將・疆」は下平10「陽」。

① 鐘鼓喞喞 「鐘」字を中華書局本は「鍾」に作る。鐘や鼓の音が調和して響く。『毛詩』周頌・執競に「鐘鼓喞喞、磬筦將將、降福穰穰」、毛伝に「喞喞、和也。將將、集也。穰穰、衆也。」

② 威儀將將 祭祀でのふるまいが整然としていること。「威儀」は祭祀の際のふるまい・礼儀。『礼記』中庸に「優優大哉、禮儀三百、威儀三千、待其人然後行」、孔疏に「威儀三千者、即儀禮中行事之威儀。」『毛詩』小雅・賓之初筵に「賓之初筵、溫溫其恭。其未醉止、威儀反反。曰既醉止、威儀幡幡。」「將將」は厳正なさま。『毛詩』大雅・綿に「迺立應門、應門將將」、毛伝に「王之正門曰應門。將將、嚴正也。」

③ 溫恭 温和で慎み深い。『尚書』舜典に「濬哲文明、溫恭允塞」、孔疏に「溫和之色、恭遜之容。」前注『毛詩』賓之初筵も参照。

④ 敬享曾皇 「敬享」は魂を敬い祀る。『礼記』祭義に「君子生則敬養、死則敬享、思終身弗辱也」、鄭注に「享、猶祭也、饗也。」「曾皇」は曾祖父。『宋書』樂志二・晋宗廟歌十一篇・傳

玄「祠京兆府君登歌」に「於惟曾皇、顯顯令德。」

⑤ 邁德 つとめて徳を行うこと。『尚書』大禹謨に「皋陶邁種徳、徳乃降。」

⑥ 垂仁 仁愛を施す。『宋書』樂志三・清商三調歌詩・曹操「古公善哉行」に「古公亶甫、積徳垂仁。」

⑦ 係軌重光 「係」は継ぐ。『爾雅』釈詁上に「……係、繼也。」「軌」は正しいみち。『管子』君臣上に「是故別交正分之謂理、順理而不失之謂道。道德定而民有軌矣。」『宋書』武帝紀中に東晋最後の皇帝となつた恭帝の璽書が引かれ、「又璽書曰、昔在上世、三聖係軌、疇咨四嶽、以弘揖讓。惟先王之有作、永垂範於無窮。及劉氏致禪、實堯是法、有魏告終、亦憲兹典。」「重光」は先祖の栄光と並び輝くこと。『尚書』顧命に「昔君文王・武王、宣重光、奠麗陳教則肄」、孔伝に「言昔先君文武、布其重光、累聖之徳。」

⑧ 純嘏 大いなる福。『毛詩』小雅・賓之初筵に「錫爾純嘏、子孫其湛」、鄭箋に「純、大也。嘏謂尸與主人以福也。湛、樂也。」

王受神之福於尸、則王之子孫皆喜樂也。」

武帝紀上に「旭孫生混、始過江、居晉陵郡丹徒縣之京口里、官

⑨ 惠我無疆 何代にもわたって限りない恵みがあること。『毛詩』

至武原令。」「武原」は南彭城郡の県。『宋書』州郡志一・南徐

周頌・烈文に「烈文辟公、錫祉祿福。惠我無疆、子孫保之」、

州に「南彭城太守、江左僑立。晉明帝又立南下邳郡、成帝又立

鄭箋に「惠、愛也。光文百辟卿士及天下諸侯者、天錫之以此祉

南沛郡。文帝元嘉中、分南沛爲北沛、屬南兗、而南沛猶屬南徐。

福也。又長愛之無有期竟、子孫得傳世、安而居之。謂文王武王

孝武大明四年、以二郡竝併南彭城。領縣十二。……武原令、漢

以純德受命定天位。」

舊名。」

⑩ 武原府君 劉裕の曾祖父劉混のこと。武原令となった。『宋書』

鑠矣皇祖^① 帝度其心^② 鑠たるかな皇祖 帝其の心を度る^{はか}

永言配命^③ 播茲徽音^④ 永く言に命を配せられ 茲の徽音を播く^し

思我茂猷^⑤ 如玉如金^⑥ 我が茂猷を思う 玉の如く金の如し

駿奔在陞^⑦ 是鑑是歆^⑧ 駿しえに奔りて陞に在り 是れ鑑て是れ歆けん^み

右祠東安府君登歌

右は東安府君を祠る登歌

立派なるかなご先祖よ、上帝はその心を推し量られた。

わが先祖は永きにわたって天命に従って道を修め、この素晴らしい教化を布き広められた。

わが君の大いなる道を思う、それは玉のように金のように（貴重である）。

これからもずっと廟のまぎはしに駆けつけ（て祭祀をお助けする。どうか祭祀を見きわめられて享受されんことを）。

右は東安府君（劉靖）をまつる登歌。

○押韻 「心・音・金・歆」は下平21「侵」。

① 鑠矣 美しく立派である。『毛詩』周頌・酌に「於鑠王師、遵養時晦」、毛伝に「鑠、美。遵、率。養、取。晦、味也。」

② 帝度其心 「度」は考えはかる。『毛詩』大雅・皇矣に「維此王季、帝度其心」、毛伝に「心能制義曰度。」

③ 永言配命 『毛詩』大雅・文王に「無念爾祖、聿脩厥德。永言配命、自求多福」、毛伝に「聿、述。永、長。言、我也。我

長配天命而行、爾庶國亦當自求多福。』『毛詩』大雅・下武に「王配于京、世德作求。永言配命、成王之孚。」

④ 播茲德音 「播」はしく。広く行き渡らせる。『礼記』礼運に「故人情者、聖王之田也。脩禮以耕之、陳義以種之、講學以耨之、本仁以聚之、播樂以安之。」「德音」は立派な教え。『毛詩』

大雅・思齊に「大姒嗣徽音、則百斯男」、鄭箋に「徽、美也。嗣大任之美音、謂續行其善教令。」

⑤ 思我茂猷 「茂猷」は盛んなる道。『毛詩』小雅・南山有台に「樂只君子、德音是茂」、鄭箋に「茂、盛也。」「猷」は道、方

法。『毛詩』小雅・巧言に「秩秩大猷、聖人莫之」、毛伝に「秩

秩、進知也。莫、謀也」、鄭箋に「猷、道也。大道、治國之禮

法。』春秋左氏伝『昭公十二年に「其詩曰、祈招之愔愔、式昭德音。思我王度、式如玉、式如金」、杜預注に「金玉取其堅重。」

⑥ 如玉如金 前注左伝参照。

⑦ 駿奔在陸 「駿」はとこしえに。『毛詩』周頌・清廟に「於穆清廟、肅雝顯相。濟濟多士、秉文之德、對越在天。駿奔走在廟、

不顯不承、無射於人斯」、毛伝に「駿、長也」、鄭箋に「駿、大也。諸侯與衆士、於周公祭文王、俱奔走而來、在廟中助祭、

正義に「駿、長、釋詁文。言長者、此奔走在廟、非唯一時之事、乃百世長然、故言長也。」

⑧ 是鑑是歆 「鑑」はみる。「歆」は受ける。『毛詩』大雅・生民に「印盛于豆、于豆于登。其香始升、上帝居歆」、鄭箋に「其

馨香始上行、上帝則安而歆享之。」

⑨ 東安府君 劉裕の祖父劉靖のこと。東安太守となった。『宋書』

武帝紀上に「(劉)混生東安太守靖、靖生郡功曹翹。」『宋書』
州郡志一・徐州に「東安太守、東安故縣名、前漢屬城陽、後漢

屬琅邪、晉太康地志屬東莞、晉惠帝分東莞立。領縣三。」

烝哉孝皇^① 齊聖廣淵^②

烝なるかな孝皇 齊聖にして廣淵なり

發祥誕慶^③ 景胙自天^④

祥を發き慶を誕おぼいにすれば 景胙天自りす

德敷金石 道被管弦^⑤

德は金石に敷かれ 道は管弦に被らる

有命既集^⑥ 徽風永宣^⑦

命有り既に集なり 徽風永く宣べられん

右祠孝皇帝登歌

右は孝皇帝を祠る登歌

人君の道を得た孝皇帝よ、正しく優れていて広く深い。

幸福を開き吉慶を大いに広めたところ、天から大いなる幸いが授けられた。

その徳ある行いは金石の樂で布き広められ、治政の道は管弦にかけられ演奏される。

天の命がすでに降った、素晴らしい教化は永く広められていくことだろう。

右は孝皇帝(劉翹)をまつる登歌

○押韻 「淵・天・弦」は下平1「先」、「宣」は下平2「仙」。

① 烝哉孝皇 「烝」は人君として優れていること。『毛詩』大雅

君也、鄭箋に「君哉者、言其誠得人君之道。」「孝皇」は孝皇

・文王有声に「適求厥寧、適觀厥成、文王烝哉」、毛伝に「烝、

帝劉翹 字顯宗。『宋書』武帝紀に「靖生郡功曹翹、是爲皇考。」

処士であったが、武帝（劉裕）の即位後に追尊されて「孝穆皇帝」となった（宋書礼志三）。

② 齊聖廣淵 正しく優れた徳を持ち、広く深いこと。『尚書』周

書・微子之命に「乃祖成湯、克齊聖廣淵、皇天眷佑、誕受厥命」、孔伝に「言汝祖成湯、能齊徳聖達、廣大深遠、澤流後世。」

③ 發祥誕慶 「發祥」は幸いをひらく。『毛詩』商頌・長發に「濬

哲維商、長發其祥」、鄭箋に「深知乎、維商家之徳也、久發見其禎祥矣。」「誕慶」は吉慶を大いに広める。『尚書』虞書・大禹謨に「帝乃誕敷文徳、舞千羽于兩階。七旬、有苗格」、孔伝に「遠人不服、大布文徳以來之。」

④ 景昨自天 天から大いなる幸いがもたらされる。ここでは帝位が授けられること。「昨」を中華書局本は「祚」に作る。「昨」は祚に通じる。さいわい。『国語』齊語に「齊桓公」南城周、反胙于絳、韋昭注に「人君即位、謂之踐胙。」「宋書』武帝紀

下の受禪後の詔に「惟徳匪嗣、辭不獲申、遂祗順三靈、饗茲景

惟天有命^① 眷求上哲^②

赫矣聖武^③ 撫運桓撥^④

惟れ天に命有り 上哲を眷求す
赫たるかな聖武 運に撫い桓いに撥む

「祚、燔柴于南郊、受終于文祖」、『毛詩』大雅・大明に「有命自天、命此文王、于周于京」、鄭箋に「天爲將命文王、君天下於周京之地。」

⑤ 徳敷・道被二句 『礼記』樂記に「徳者、性之端也。樂者、徳之華也。金石絲竹、樂之器也。詩、言其志也。歌、詠其聲也。舞、動其容也。三者本於心、然後樂器從之。」

⑥ 有命既集 天の命がすでに降った。「集」はつく。『毛詩』大雅・大明に「維此文王、小心翼翼。昭事上帝、聿懷多福。厥徳不回、以受方國。天監在下、有命既集」、毛伝に「集、就」、鄭箋に「天監視善惡於下、其命將有所依就、則豫福助之。」

⑦ 微風 素晴らしい教化。『毛詩』小雅・角弓に「君子有微猷、小人與屬」、毛伝に「微、美也」、鄭箋に「猷、道也。君子有美道以得聲譽、則小人亦樂與之而自連屬焉。」「晋書』赫連勃勃伝に宮殿が完成し元号を改めた際に胡義周が作ったという功德を頌えた辞の中に「哲王繼軌、光闡微風。」

功竝敷土^⑦ 道均汝墳^⑧ 功は敷土に竝び 道は汝墳に均し

止戈曰武^⑦ 經緯稱文^⑧ 戈を止むるを武と曰い 經緯するを文と稱す

鳥龍失紀 雲火代名^⑧ 鳥龍紀を失い 雲火名を代う

受終改物^⑧ 作我宋京^⑧ 終わりを受け物を改め 我が宋京を作す

至道惟王^⑧ 大業有劭^⑧ 至道惟れ王たりて 大業に劭有り

降德兆民^⑧ 升歌清廟^⑧ 德を兆民に降し 清廟に升歌す

右祠高祖武皇帝登歌 右は高祖武皇帝を祠る登歌

天に命ずるところがあり、才德優れた聖人を探し求めた。

輝くことよ、聖明にして英武なる武皇帝、天運に従い政道を大いにされた。

勲功は国土をつくった禹と肩を並べ、徳ある治道は汝墳に教化が浸透した文王に均しい。

戦乱を終結させたことは武といい、よく天地を治めていることは文と称せられる。

鳥龍を徴とした司馬氏は天下の綱紀を失い、雲火を徴とする劉氏が取って代わったのだ。

皇帝の位を譲り受けて制度を改め、わが宋王朝をつくられた。

仁義を兼ね備えた政道を行う武皇帝が天下に王たりて、大いなる功業にはうるわしさが具わる。

徳を多くの民に下し、(われらはその素晴らしさを)宗廟に登って歌うのだ。

右は高祖武皇帝(劉裕)をまつる登歌

○押韻 「哲」は入声17「薛」、「撥」は入声13「末」。「墳・文」は上平20「文」。「名」は下平14「清」、「京」は下平12「庚」。「劭・廟」は去声35「笑」。

① 惟天有命 天からの命が下されたこと。『尚書』多士に「王若

曰、爾殷多士、今惟我周王、丕靈承帝事。有命曰、割殷、告勅

于帝」、孔伝に「天有命、命周割絶殷命、告正於天。」

② 眷求上哲 聖人を顧み求める。『尚書』咸有一德に「夏王弗克

庸德、慢神虐民。皇天弗保、監于萬方、啟迪有命。眷求一德、

俾作神主」、孔伝に「天求一德、使伐桀爲天地神祇之主。」『後

漢書』崔駰伝に駟が作った「達旨」が引かれ、「固將因天質之

自然、誦上哲之高訓。」

③ 赫矣聖武 「赫矣」は輝かしいこと。『漢書』韋賢伝附子・玄

成に玄成が「自劾責」詩を作り、「赫矣我祖、侯于豕韋、賜命

建伯、有殷以綏。」『宋書』樂志二・晋四箱樂歌十七篇・荀勗「食

拳樂東西箱歌十二篇・赫矣」に「赫矣太祖、克廣明德。廓開宇

宙、正世立則。變化不經、民無瑕慝。創業垂統、兆我晉國。」『聖

武』は聖明にして英武であること。また、そのような皇帝。『尚

書』伊訓に「惟我商王、布昭聖武、代虐以寬、兆民允懷」、孔

伝に「言湯布明武德、以寬政代桀虐政、兆民以此皆信懷我商王

之德。」

④ 撫運桓撥 「撫運」は天運に従うこと。『尚書』皋陶謨に「百

僚師師、百工惟時、撫于五辰、庶績其凝」、孔伝に「言百官皆

撫順五行之時、衆功皆成。」『宋書』武帝紀中・義熙十三年十月

の詔が引かれ、「公命世撫運、闡曜威靈、內研諸侯之慮、外致

上天之罰。」「桓撥」は政道を広大にすること。『毛詩』商頌・

長發に「玄王桓撥。受小國是達、受大國是達」、毛伝に「玄王、

契也。桓、大。撥、治」、鄭箋に「玄王廣大其政治。」

⑤ 敷土 地を布きつらねること。禹の治績。『尚書』禹貢に「禹

敷土、隨山刊木、奠高山大川。」

⑥ 汝墳 『詩経』の篇名。文王の教化が汝墳の地域に浸透した

ことを讃える。『毛詩』周南・汝墳の小序に「汝墳、道化行也。

文王之化行乎汝墳之國、婦人能閔其君子、猶勉之以正也。」こ

れを踏まえて武帝の治道が文王に等しいという。

⑦ 止戈曰武 『春秋左氏伝』宣公十二年に「楚子曰、『非爾所知

也。夫文、止戈爲武。武王克商、作頌曰、載戢干戈、載櫜弓矢。

……』、杜預注に「敢、藏也。藥、輜也。詩美武王能誅滅暴亂而息兵。」

⑧ 經緯稱文 「文」は天地を治めること。『春秋左氏伝』昭公二十八年に成縛が『詩経』大雅・皇矣を解く場面があり、「心能制義曰度、……、經緯天地曰文」、杜預注に「經緯相錯、故織成文。」

⑨ 鳥龍・雲火二句 各王朝には自然物によるそれぞれの象徴（卜一テム）があり、ここでは象徴物によって、晋王朝が衰え、宋王朝が替わって天下を治めることをいう。『春秋左氏伝』昭公十七年に「秋、郟子來朝、公與之宴。昭子問焉、曰、『少皞氏鳥名官、何故也（少皞、金天氏、黃帝之子、己姓之祖也。問何故以鳥名官。』』郟子曰、『吾祖也、我知之。昔者黃帝氏以雲紀、故爲雲師而雲名（黃帝、軒轅氏、姬姓之祖也。黃帝受命有雲瑞、故以雲紀事。百官師長皆以雲爲名、號繙雲氏蓋其一官也。炎帝氏以火紀、故爲火師而火名（炎帝、神農氏、姜姓之祖也。亦有火瑞、以火紀事、名百官。共工氏以水紀、故爲水師而水名。大皞氏以龍紀、故爲龍師而龍名（大皞、伏羲氏、風姓之祖也。有龍瑞、故以龍命官。我高祖少皞摯之立也、鳳鳥適至、故紀

於鳥、爲鳥師而鳥名。鳳鳥氏、歷正也（鳳鳥知天時、故以名歷正之官）。……」は杜預注。

『晋書』宣帝紀によれば、司馬氏は「帝高陽之子重黎」の後という。また、金徳を自認していたことについては、『宋書』樂志四・傅玄の晋鼓吹曲「靈之祥」に「旌金徳、出西方」、『宋書』武帝紀中の恭帝の璽書に「昔土徳告訖、傳祚于我有晋。今曆運改卜、永終于茲、亦以金徳而傳于宋」などある。呉を平定して太康と改元した年の九月に尚書令衛瓘等によって書かれた上奏文（宋書・礼志三）には、「大晋之徳、始自重・黎、實佐顛頊、至于夏・商、世序天地、其在于周、不失其緒。金徳將升、世濟明聖、外平蜀漢、海内歸心、武功之盛、實由文徳。」とある。「鳥龍」と「雲火」が一對の表現となることがあるのは、『晋書』職官志に「執法在南宮之右、上相處端門之外、而鳥龍居位、雲火垂名、前史詳之、其以尚矣。」「紀」は法制、綱領。『尚書』五子之歌・其三に「惟彼陶唐、有此冀方。今失厥道、亂其紀綱、乃底滅亡」、孔伝に「言失堯之道、亂其法制、自致滅亡。」

⑩ 受終改物 帝位を受けて制度を改めること。「受終」は帝位に即くこと。『尚書』舜典に「正月上日受終于文祖」、孔伝に「上

日、朔日也。終謂堯終帝位之事。文祖者堯文德之祖廟。「改物」

讀當言道有至有義有攷、字脫「有耳。」

は制度を改めること。『春秋左氏伝』昭公九年に「叔向謂宣子

⑬ 大業有劭 「大業」は帝王のたいなる功業。「劭」は麗しいこ

曰、「文之伯也、豈能改物。翼戴天子而加之以共。……」、杜

と。揚雄『法言』孝至に「年彌高而德彌劭者、是孔子之徒歟。」

預注に「言文公雖霸、未能改正朔易服色。翼、佐也。」

⑭ 兆民 「兆民」は天子の民。民草。『礼記』月令に「孟春之月。

⑪ 作我宋京 「宋京」は宋の都。『毛詩』大雅・文王に「殷士膚

……命相布德和令、行慶施惠、下及兆民。』鄭注に「天子曰兆

敏、裸將於京」、毛伝に「殷士、殷侯也。膚、美、敏、疾也。

民。」

裸、灌鬻也。周人尚臭。將、行、京、大也。』『宋書』樂志二・

⑮ 升歌 祭祀や宴会の際に堂に上つて歌うこと。『儀礼』燕礼に

王韶之「宋四箱樂歌五篇・大會行禮歌二章・其二」に「龍飛紫

「升歌鹿鳴、下管新宮、笙入三成。」

極、造我宋京。」

⑯ 高祖武皇帝 劉宋王朝を開いた劉裕（三六三—四二二、在位

⑫ 至道惟王 「至道」は仁義を備えた政道。『礼記』表記に「道

四二〇—四二二）。

有至義有考、至道以王、義道以霸、考道以爲無失」、鄭注に「此

奕奕寢廟^① 奉璋在庭

奕奕たる寢廟 奉璋庭に在り

笙籥既列 犧象既盈

笙籥既に列び 犧象既に盈つ

黍稷匪芳 明祀惟馨^⑤

黍稷は芳しきに匪^あず 明祀^こ惟れ馨る

樂具禮充

樂具わり禮充ち 羞を潔くし誠を薦む

神之格思^⑦ 介以休禎^⑧

神之格^{いた}るや 介^おいにするに休禎を以てす

濟濟羣辟^⑨

永觀厥成^⑩

濟濟たる羣辟あり 永く厥^その成るを觀る

右祠七廟享神登歌

右は七廟を祠る享神登歌

〔原注〕并以歌章太后篇^①。

并びに以て章太后篇を歌う。

高大なる宗廟、捧げられる玉璋が廟の前庭にある。

笙と籥は既に列べられ、飾りが施された酒器にはもう酒が満たされている。

備えられた穀物が芳しいのではなく、この素晴らしい祭祀こそが高く香るのである。

樂舞が備えられ儀礼も十分、捧げ物の膳を清め真心をお供えする。

神靈が至つて祭祀を享けられ、大いに幸いを与えて下さる。

多く盛んなる諸侯たちがいて、とこしえにこの成就を觀てありがたく思う。

右は七廟をまつる享神登歌。〔原注〕この時併せて章太后篇を歌う。

○押韻 「庭・馨」は下平15「青」、「盈・誠・禎・成」は下平14「清」。

① 奕奕寢廟 「奕奕」は大きいさま。「寢廟」は宗廟の正殿(廟)に「實酒秉璋以酢祭。半圭曰璋、臣所奉。」

と後殿(寢)。「毛詩」小雅・巧言に「奕奕寢廟、君子作之、」③ 笙籥 笙と籥。古代の管樂器。笛。「毛詩」小雅・鹿鳴に「我

毛伝に「奕奕、大貌。」「礼記」月令に「寢廟畢備」、鄭注に「畢有嘉賓、鼓瑟吹笙。」「毛詩」小雅・賓之初筵に「籥舞笙鼓、樂

猶皆也。凡廟、前曰廟、後曰寢。」既和奏」、毛伝に「秉籥而舞、與笙鼓相應」、鄭箋に「籥、管也。」

② 奉璋 「璋」は圭を半分にしたような形の玉器。朝聘・祭祀に「季夏六月、以禘禮祀周公於大廟、牲用白牡、尊用犧象山罍」、

・喪葬・治軍の際に用いた。「尚書」顧命に「秉璋以酢」、孔伝

に「季夏六月、以禘禮祀周公於大廟、牲用白牡、尊用犧象山罍」、

鄭注に「尊、酒器也。犧尊、以沙羽爲畫飾、象骨飾之。」犧尊と象尊を合わせた呼称とする説もある。『春秋左氏伝』定公十年に「且犧象不出門、嘉樂不野合」、杜預注に「犧象、酒器、犧尊、象尊也。」

⑤ 黍稷匪芳 明祀惟馨 『尚書』君陳に「我聞曰、至治馨香、感于神明。黍稷非馨、明德惟馨」とあるのに基づく。「黍稷」はキビ・アワ。

⑥ 潔羞薦誠 「羞」は神に捧げる食物。『周礼』大宰に「以九式均節財用。……四曰羞服之式」、鄭注に「羞、飲食之物也。」「誠」は天道、人の道。『礼記』中庸に「誠者、天之道也。誠之者、人之道也。誠者不勉而中、不思而得、從容中道、聖人也。」

⑦ 神之格思 『毛詩』大雅・抑に「神之格思、不可度思、矧可射思」、毛伝に「格、至也」、鄭箋に「矧、況。射、厭也。神之來至去止、不可度知。況可於祭末而有厭倦乎。」「思」は助字。

⑧ 介以休禎 「介」は大いにする。『毛詩』周頌・離に「綏我眉壽、介以繁祉」、鄭箋に「繁、多也。文王之德、……又能昌大其子孫、安助之以考壽與多福祿。」「休禎」は吉祥。『後漢書』陳番伝に「如是天和於上、地洽於下、休禎符瑞、豈遠乎哉。」

⑨ 濟濟羣辟 「濟濟」は多く盛んなさま。『尚書』大禹謨に「濟濟有衆、咸聽朕命」、孔伝に「濟濟、衆盛之貌。」「羣辟」は四方の諸侯、また、王侯・公卿・大夫・士のこと。『尚書』周官に「六服羣辟、罔不承德」、孔伝に「六服諸侯、奉承周德。」「文選』卷二・張衡「西京賦」に「正殿路寢、用朝羣辟」、薛綜注に「羣辟、謂王侯・公卿・大夫・士也。」

⑩ 永觀厥成 『毛詩』周頌・有瞽に「既備乃奏、簫管備舉。嗶嗶厥聲、肅雝和鳴、先祖是聽。我客戾止、永觀厥成」、鄭箋に「我客、二王之後也。長多其成功、謂深感於和樂、遂入善道、終無愆過。」「毛詩』有瞽で「厥の成るを觀（よく見て稱賛する）」している「我客」は、鄭箋によれば「二王の後」、祭祀を行う側の人間である。ここでもそれを踏まえているとして解した。

⑪ 并以歌章太后篇 「章太后」は文帝劉義隆の母胡道安。文帝即位後に追尊された。『宋書』樂志一に「文帝章太后廟未有樂章、孝武大明中使尚書左丞殷淡造新哥、明帝又自造昭太后宣太后哥詩。」「宋書』樂志二に殷淡が作った「章廟樂舞歌詞」が収められており、原注に「雜歌悉同太廟詞、唯三后別撰。」とある。

(狩野 雄)

(さとうたけし・広島大学教授)

(さたけやすこ・大東文化大学特任教授)

(かまたにたけし・神戸大学名誉教授)

(やながわじゅんこ・県立広島大学教授)

(はやしかな・京都府立大学教授)

(かのうゆう・武庫川女子大学教授)